昭和36年7月1日発行（毎月1回1日発行・第13巻第7号）昭和24年2月3日第3種郵便物認可　昭和34年12月11日国鉄東局特別扱承認雑誌第692号

月刊 キリスト



7

座談会
日本の伝道をどうする　植村 環・武藤富男 斎藤 真・鈴木正久

わが信仰の生涯
"キリストはわがもの"　山室民子

グラビア　ここに夢の家あり　—運転手の悲願—

恋愛論・男性の魅力　高木幹太



表紙・藤城清治　カット・山中春雄

7月号・目次



聖書のさしえ (7)

辻　　成史



シリア語によるラブラの福音書（6世紀）。
左上より「王座のキリスト」「キリストの洗礼」「学者と議論する少年イエス(？)」右上より「イザヤ」「降誕」「嬰児虐殺」



「受難」 のサイクル。左上方「イェルサレム入城」より右下方「十字架荷い」に至る。聖オーガスティン（カンタベリー）の福音書。１～２図が東方起源であるのに対し、ローマ起源といわれる。



「シロアムの池の畔の盲人の物語」ロッサノの福音書。現存する福音書挿絵中最も古いといわれる。

今まで数回にわたって、写本挿絵というものが、小芸術でありながらも、その精神的本質、すなわち devotion の芸術という点では、会堂を飾る大芸術と変わりのないことを見てきた。ことに、巻頭を飾るモニュメンタルな図像は、その構成・内容ともに大芸術的な要素を備えていた。実際、福音書の挿絵の中には、直接会堂を飾るモザイクの大画面をそのまま取り入れたと思われるものがあって——たとえばビザンチンの変容図など——、決して写本挿絵が単なる芸術家の手すさびでなかったことを示している。

しかし、さらに進んで、本文（テキスト）と直接結びついた聖書の挿絵を見るときには、あの大芸術的なものから受ける感動とはまたひとしお異なった感動を覚えるのである。この本文挿絵を描いた芸術家の目的は、豪華な構図や、巨大な表現で人を感動させることではなく、かえって、いかにして聖書に録された物語を、さらに良く画像をもって語り得るかということであった。しかし福音書そのものが、いくつかの伝承的な断片を総合して形成されたものであり、そこにはおのずからな章句の分節があるように、福音書挿絵も、その出発点からある種の定まったタイプをもって形成された。すなわち、芸術家は、無計画に聖書のあちこちに挿絵をほどこしたのではなく、しかるべきもっとも重要な箇所を選び出し、全体を一つのシリーズとして把握して描いた。これを図像学の用語でサイクルという。こうして形成されたサイクルは、その土地、その時代によってさまざまな違いを見せている。あるサイクルには、古い典礼の影響が強い。あるサイクルには、たくさんの情景が含まれていて、まるで紙芝居のような活々としたリアリズムを備えている。またあるサイクルには、当時の教義の影響がはっきりと見られる。初期にはいくつかのこうした福音書挿絵のタイプがあったと思われる。その中でももっとも総合的な性格を備え、のちの教会芸術の図像に大きな影響を与えたのは東方修道院で制作された聖書挿絵であった。

月刊 キリスト・7月号

巻頭随想

少年の日を想起して

中川 秀恭

わたしは日本海の孤島隠岐の西郷町に生まれ、少年時代をそこで過ごした。両親はイギリス国教会の伝道会社から派遣された、バークレー・バックストン師に導かれて聖公会員となった。師は松江の赤山に本拠をおいて、山陰や中国地方に大きな影響を及ぼした。わたしは幼児洗礼（二才、明治四二年）によって二代目の聖公会員になっており、当時町にあった講義所の荒砥琢哉先生の日曜学校に通った。

町のそれぞれの部落には氏神の神社があった。わたしの部落のは八幡神社で、小高い丘の中腹を切り開いたところに建てられていた。背後の丘はうっそうとした杉林で、境内には樹令千年に近いと思われる杉の大木があった。境内につづく石段を四、五〇段降りたところは平地で、人家があり、その向こうは川になっていた。

わたしの記憶にあるのは小学校の低学年のころであったから、大正四、五年であろう。神社の境内や拝殿の広縁は少年たちの遊び場であった。放課後になるとここに集まって「石けり」や「ペッタリ」（娘にきくと札幌では「パッチ」というそうである）遊びをした。雨の日は拝殿の広縁がこよない遊び場であった。そういう日にはとくに境内には人影もなく、はるか丘の下の通りにも人の往来がなくしんとしていた。そうしたとき、少年たちは突如恐怖におそわれた。ペッタリも石もほり出してワーッと叫びながら、石段をかけおりて家に帰るのだった。拝殿から通じる段々の上にある奥殿の扉がギギーッ、ギギーッときしんで開き、いまにも白ひげ、白装束の老人の姿をした八幡さまが現われてくるような感じにおそわれたからである。

このような少年の日の「宗教的」経験をさる神学研究会の席上でゆくりなくも想起した。その日のテキストとして用いたのはR・ニーバーの『人間の本性と運命』の一節であった。

「人間の個人的経験の一般的啓示、すなわち人間の意識のぎりぎりのところで『全くの他者』に直面しているという感じには三つの要素がふくまれている……」（第一巻第五章三節）。

わたしの少年時代の経験が、ニーバーのいう一般的啓示にあたるかどうかは、解釈の余地もあろうが、この経験はわたし自身の過去として、キリストにおける「特殊啓示」――神、キリストにおいてわたしに邂逅したもう――による否定を通じて再・生され、わたし自身の「救済の歴史」の中に位置ずけられているのであろう。

（北海道大学教授）

ことばの劣等感

善野碩之助

ある洋上航行中の出来事である。食事時になってあるドイツ人が、同席のアメリカ人に向かっていねいに「マールツァイト」とあいさつした。当のアメリカ人は、あまりききなれない名まえだと不審には思ったが、外国人のことゆえ、さして気にも止めないで自分のほうからも「サンダーストーム」と会釈した。



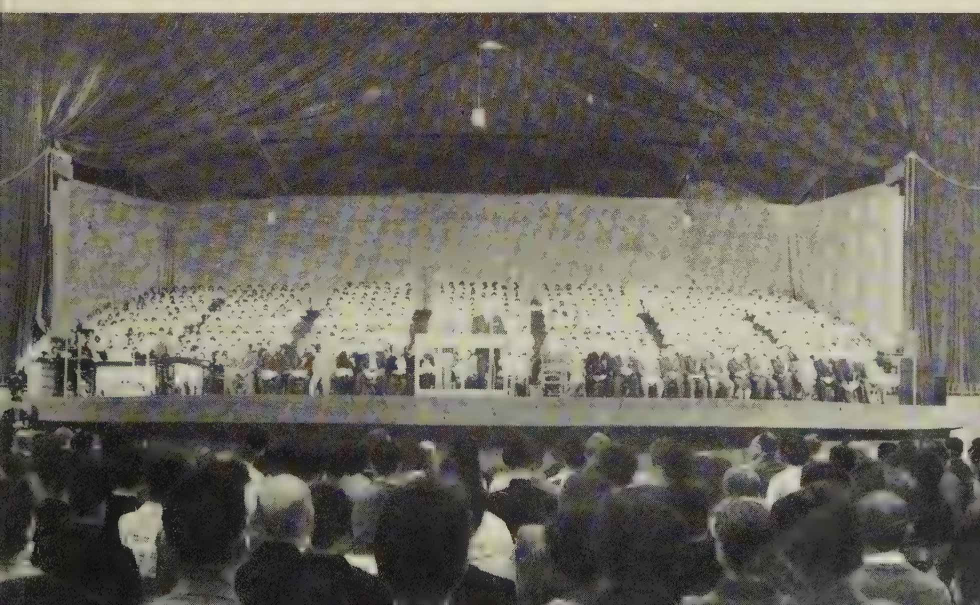
たたかいを記念して

去る5月19日、〝安保斗争一周年の集い〟が、東京社会事業会館久保講堂で、学者・文化人・宗教者ら多数参集のもとに開かれ、学者代表で隅谷三喜男氏、キリスト者代表で飯島宗享氏が新しい決意を述べた。

の夜の祭典

しい音楽、最高のメッセージ〟というふれこみで、去る5月6日から6月4日
体育館を会場に行なわれた東京クリスチャンクルセードは、毎夜平均6400名
を教界内外から集めた。

（提供・クルセード事務局）



いたがるわたしにとって、編物は手ごろな対象だったのである。わずかな暇々を継ぎ合わせて励んでは、なんとか身につけるスェーターぐらいはまに合わせていたが、近ごろはその暇さえもあやしくなった。生活が忙しくなったのか、人間が無精になったのか、長い編棒などは編みさしのスェーターとともに、押入れの上部にしまいこまれたままである。そんなわたしが、今でもなんとか編みこなしているのがレース編の小さな手提袋である。平凡な網目模様の袋であるが、どうかすると、これ一つ編み上げるのに半年、ときには一年近くもかかることがある。文字どおり、零細な時間を継ぎ足し、継ぎ足しして作ったものには、いいがたい愛着が伴なう。できの良し悪しは別として金銭には代えられない価値なのである。

　わたしはこの袋に聖書をおさめて教会へ出かける。編目を透いて聖書がのぞく。いつか思いがけないときに、電車の中で隣席の婦人に声をかけられたことがあった。「あなたも教会の帰りですか、わたしもそうなのですよ」といったごく簡単な会話であったし、それきりそのかたとも会わず、名まえも住所も知らないけれど、心あたたまるひとときであった。

　聖書の呼ぶ交わりについて、わたしはひとつの思い出を持っている。いまから一六年前、ちょうど終戦の年の夏近いころのことであった。戦前の大学で、暁の星のようにまばらであった女子留学生の中に中国人の台さんがあった。台さんはその年の四月の学期から、教育学専攻の学生として来日していた。台さんの日本語はあやしく、わたしの中国語はさらにおぼつかなかったので、ときに筆談を交えて話しても、さして深いことが話せるわけはなかった。台さんがなにを願って、戦時中の日本の大学に留学したのかは、もっとも聞きたいところであったが、それも果たさぬうちに、わたしが聞いたのは台さんの入院であった。病名はたしか肋膜炎であったと思う。

　六月のある午後、わたしは病院に台さんを見舞った。台さんには同じく留学生で法律専攻の李さんという婚約者があった。まめまめしく看病していた李さんが、病院の廊下でわたしに切なげに語ったことは、台さんの病気の重さを感じさせるものであり、いまなおわたしの耳になまなましい。しかし、それにもましてあざやかに心にとどまり、あっという驚きと喜びをもたらしてくれた発見は、台さんのまくらもとにあった一冊の聖書であった。わたしは「あなたもそうなの、わたしもそうなの」という意味のことをもどかしげに語り台さんは大きくうなずいた。国籍を越え、民族を越え、心と心とがぴたりと触れた一瞬……たしかにしばしとどまってほしい美しい一瞬であった。まくらべの聖書は、しんと静まり、また凛と輝いて、台さんを守っているかのようであった。わたしが見舞って二、三日後、町には焼夷弾が襲った。住居を焼かれたわたしは、台さんに会うこともなく町を去った。後日、聞いたことが誤聞でなければ、台さんはその後まもなく世を去ったという。

　レース編の袋からのぞくわが聖書を見守るとき、その聖書が、いつしか台さんのまくらべの聖書と一体となり、さらに知る人、知らない人、地にある人、天にある人、それらすべての人々の聖書とが一体となって、妙なる交響楽音を響かせてくれるのである。見知らぬだれかが、わが聖書をみて、思わぬ喜びをひろってくれることがあるかもしれないと思い、聖日ごとにわたしはこの袋を提げてゆく。

（津田塾大学教授）

翌日の食事時にふたりはまた顔を合わせた。ドイツ人「マールツァイト」。アメリカ人も（ちょっと意外に思ったが）すぐ思い直して「サンダーストーム」とやった。

食事が終ってからアメリカ人は考えた。どうも少しおかしい。きのう互に紹介しあったはずなのにきょうまた改めて名乗るとは？　相手に恥をかかせないための配慮かな？　そこで彼は同僚に尋ねてみた。「いったいドイツ人は、食事のたびに自己紹介をする習慣なのだろうか。きのうもきょうも《マールツァイト》と言ってあいさつしたが……」と。それをきいた同僚はふき出して説明した。「きみ、それは名まえではなくて食事時のあいさつなんだ。つまり、おいしく召し上がれ、といったような意味のさ」と。

さてその翌日、くだんのアメリカ人は、自分がドイツ語を知らなかったばかりに、とんだ恥をかいてしまった名誉快復にと、食事のあいずも待ちきれずに、食堂に行ってテーブルに陣どっていた。そこへ例のドイツ人がビール腹をかかえるようにしてゆったりと歩いて来た。

待ってましたとばかりにアメリカ人「マールツァイト！」その声がいかにも大きかったので、それにつられるようにドイツ人「サンダーストーム！」

このエピソードは、わたしがゲッチンゲンを去る直前、新約のケーゼマン教授が、ゼミナールの学生たちをお祭に招いてくれたときこんなことがよくあるものだと言って話してくれた話である。一同は涙が出るほど笑いこけたことを思い出す。

外国へ出るとことばの劣等感を味わうことがある。日常茶飯事のことばがわからぬことくらい、ばつの悪いことはない。相手がわかろうとわかるまいと、そんなことにはいっこうおかまいなしに、自国語であいさつできるほどの神経の持ち主ならいざ知らず、それが生活の必要条件ともなると、真剣ならざるをえないし、それだけ悲哀も大きいわけである。

その失敗を一つ。わたしがはじめて欧州の土を踏み、イタリアのジェノアからコペンハーゲン行の国際列車に乗りこんだときのことである。赤帽に荷物を托し、席をとるように頼んだが、すでにどのへやも満員だった。そこでわたしは、捨て身の戦法で一へやずつ、空席はないかと念を押して回った。

あるにぎやかなへやだった。わたしも声を大きくして「空席はないですか」と問うと、元気そうなのが早口になにか応酬した。わたしはイタリヤ語が相当頭にきていたので、負けじとばかりに、「すみませんが、ドイツ語で」とやると、ドッと爆笑が起こった。それもそのはず、若者たちはアフリカ旅行帰りのドイツ人だった。

このけがの功名で、欧州第一夜を無事車中で過ごしたこともあって、わたしは先ほどの挿話が忘れられない。自信にみちた？　ドイツ人の「サンダーストーム」で、アメリカ人の腹の皮はよじれ切ったことであろう。

宣教二世紀の日本の教会も、カナンのことばだけをあやつって、善男善女を劣等感におとし入れてはなるまいし、世間知らずで相手に抱腹絶倒されないように自戒すべきであろう。

（佐世保教会牧師）

レース編の手提袋

山崎　孝子

幼いころから、わたしは編物が好きであった。不器用なくせにつくることの喜びを、始終味わって

であります。そこでは、ただ神とわたしのほかは、何者も存在しなかったのであります。ここでイエスは神と直面したというよりも、むしろ人間と直面したといったほうが適切でしょう。すなわち悪魔の誘惑に直面したのであります。

わたしたちも、たえず心に誘惑を受けるのであります。何度か意志を強固にして、これに打ち勝とうと努力するのでありますが、ついにそれは負けてしまうふがいなさを幾たびか体験したことでしょう。しかし、誘惑を受けることを恥ずかしがってはいけないのです。誘惑はイエスさまもお受けになったのです。そして、この世でたったひとり誘惑を受けなかった人がいます。それはほかならぬ悪魔そのものです。わたしたちが人生の生き方をかえて、神さまに方向を向けたとき、そのとき初めて、悪魔はわたしたちに誘惑をしかけてくるのです。なぜならば、わたしたちが悪魔の弟子であるときには、誘惑する必要がないからです。しかし、誘惑をあなどってはいけません。イエスさまは、「心は熱しているが、肉体が弱いのである」とはげましてくださいました。またパウロは、「だから立っている者は倒れないように気をつけるがよい」と教えてくれました。また聖書の中で、わたしたちに最も親しみのある人物、ペテロは彼が幾たびか決心をしながらこの誘惑に負けて、自分のふがいなさに泣いたことでしょうが、「身を慎しみ目をさましていなさい、あなた方のてきである悪魔が、ほえたけるシシのように、食いつくす者を求めて歩きまわっている」と手紙の中ですすめています。

さて、悪魔はイエスが神の子であることを承認します。そして次に「もしあなたが神の子であるならば、その神通力をもって、この石をパンにしてはどうですか、神の子ならば飢えのために苦しむはずがない」とささやきかけるのであります。

パンの問題ほど人間にとって切実な問題はないでしょう。ドストエフスキーの小説で『カラマゾフの兄弟』の中に、次男のイヴァンが言うところがあります。「もしイエスさまが、その石をパンにしたならば、全人類は感謝の念にもえながら、おとなしい羊の群のようにイエスの後を追うて走るだろう、そしてイエスさまが手を引込めて、パンをよこさなくなりはせぬか、と、それのみ気づかって永久に戦々競々としているに相違ない」というところが出てまいります。

イエスさまが、もし石をパンにされたならば、それでわたしたちは、満足したでしょうか。

「人間の生活の秘密は、ただ生きることばかりではなく、なんのために生きるかというところにある。もしなんのために生きるかという問題が、解決されなかったならば、人間がたとえ周囲にパンの山を積まれても、生活することを潔よしとせず、こんな地上にとどまるよりも、むしろ自殺の道をとったに相違ない、これは全くそのとおりだ」と彼は続けていうのであります。イエスさまは、人間が豚のように食物を与えて満腹させて、それで幸福になるのではないといわれるのであります。人間が真実に人間であるのは、この肉体的な生命を保つだけでなく、神に応答する自覚的な自分になることであります。

パンの問題も、この神とわたしとの基本的な関係にまでもたらされたときに初めてわたしたちは、肉体において生きること

伝道説教

誘惑

松村秀一



ちょうど去年の今ごろ、真夏でありましたが、わたしは妻といっしょに、エルサレムに到着しました。今まで聖書で親しんでいたあの聖地に来たのですから感激はひとしおでした。

　わたしはアラビヤ人の案内人の説明を聞きながら、妻とその当時のことを話しながら、エルサレムから車を走らせてエリコの町につきました。この辺は不毛の地、岩石の間に白茶化た土が炎暑の中に乾燥しきって、とぼとぼと生えている草もしおれて、まったくの荒野でした。この乾ききった土の丘の陵線がどこまでもつづくその間に、オリーブの茂みがところどころあるくらいです。

　エリコの町に到着しました。エリコは「棕梠の村」とも言われていました。この辺には珍しく緑したたる村で、オレンジやバナナが実っていました。このエリコの町はずれに「エリシャの泉」があります。水がめを頭にのせた数人の人たちが、この泉に水汲みにくる昼さがりでした。ふと西のほうを見ると、目の前にぐっと見上げる岩山があります。案内人はわたしに「ここですよ、イエスさまが荒野の誘惑をお受けになったのは」と教えてくれました。草一本生えていないようにみえる全くの死の山でした。この砂漠の中に立たされたときは、恐ろしい孤独にわたしはおそわれました。幾たびか聖書の中にこの荒野の誘惑について読み、瞑想をしたことでありましたが、そのときほど深い感銘を受けさせられたことはありませんでした。

　モーセもエリヤも、シナイ山で四〇日間過ごし、対決を迫ってくる神のことばの前に自分を見つめたのであります。わたしたちは美しい自然の中で陶酔し、自我を見失ってしまいがちでありますが、この荒野には、自我を見失うなんの感傷もないの

めることができない矛盾した存在であることに気がつきます。人間は神さまよりも、むしろ神さまのなさる奇蹟のほうを求めているのです。

けれども、イエスさまは、人間を奇蹟のどれいにすることをお望みになりませんでした。

偶然に生まれて、偶然に死んでゆく人生を歩み、そして衝動に動かされてわたしたちが日々をおくっているときに、人間として、すなわち、わたしたちを自由な人格存在者として取り扱い、悔改めを迫っておいでになるのです。また逆に神をも理性の中で理解しようとする態度にたいし、神を証明するものはほかならぬ神であり、神との人格関係が結ばれるその中に、理解とまた証拠が含まれておることを教えておられるのです。

次に悪魔は非常に高い山にイエスさまを連れて行き、「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげよう」と言いました。

人間は権力を行使したがる、また反対に権力に追従したがるものです。しかし現実は他人どころか、自分をすら真実に自由にすることができないのです。戦時中、あんなに嫌悪を感じていた軍隊生活に、今では一種のノスタルジヤをもって話しがつきないのも、考えることをやめて、命令の通りに服従すればよい、つまり、自分の責任を自分で負う必要のない気楽さであったし、それは、わたしたちが日常生活の中で散髪店に行ったとき、つまり、一時間たらずといえども自分に関する責任をいっさいあずけて、台の上に寝そべったときの心よさに似ているからでしょう。

わたしたちが自分の自由を権力者の足もとに置いて服従する姿は、第二次大戦の記録の中で、そしてわたしたちは、東条内閣のときに、身をもって体験したことです。そして、この原理は教会の中でさえも、教権と神秘という形で大きな魅力をもっているのに気がつくでしょう。

しかし、イエスさまは、そのようにしてわたしたちを導こうとされませんでした。わたしたちが自分の心の中の深いところで決断をして、神との間に人格的な関係をうちたてることを望んでおられるのです。神のみ旨に従い得ない弱い自分の悲しみのことばであれ、敗北した悔改めの祈りであれ、自分の真実と誠実をもって神に直面することを待っておられるのです。

イエスさまは十字架の上から、「父よ彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのかわからずにいるのです」（ルカによる福音書二三・三四）と言われました。このことばこそ、わたしたちの真実の姿といえるのでしょう。

パンを求めて空の鳥に及ばず、着る物に心をうばわれて野の百合の美におとり、己の僥倖を求めて、自分を失い、権力に自由を放棄して、偶然の中にただよい、その人生の歩みの中にイエスさまのとりなしの祈りが、わたしたちの心に聞こえてきます。

「誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが肉体が弱いのである」（マタイによる福音書二六・四一）

（常盤台バプテスト教会牧師）

の意味が生じてくるのではないでしょうか。
イエスは「人の生くるはパンのみではなく神のことばによって生きるのである」と悪魔を撃退されたのであります。
次に悪魔は神殿の高い所に連れて行き、「あなたは神の子でしょう。それならばここからとびおりてごらんなさい、天の使いがきてあなたを助けてけがをさせないようにしてくれるでしょう」とイエスさまに言いました。さきほどの『カラマゾフの兄弟』の中のつづきですが「人間を檎にすることのできる力は、この地上で三つしかない、それは
一、奇蹟、二、神秘、三、教権である」というのです。
牧師をしていますと必ず受ける質問があります。それは奇蹟についてであります。最近わたしたちを震感させることが起こりました。それはスプートニック第一から始まり、ライカ、ストレル、ベルカなどの犬による実績を経て、ついに人間衛星船が打ち上げられ、地上に無事に生還させる偉業が達成せられたことです。こうした人間の偉業も祝賀会でフルシチョフやケネディの祝辞によって始められたように地球上の人間の破滅に使用されないとだれが言えるでしょうか。このような時代にあって、非科学的と思われる奇蹟は確かに信仰のつまずきとなるのも無理はありません。しかしいっぽうの心の底は、この奇蹟の起こることを求めているのが、わたしたちの真の姿ではないではないでしょうか。奇蹟が信じられない。しかしわたしたちは、奇蹟の起こることを求めているのです。奇蹟を求めるのに二つの態度があります。
第一、自分の幸福のために願望が達成されるいちばんの早みちとして、病気がなおる、宝くじが当たる、美人に変化する……と奇蹟を求めています。こうして新興宗教の宣伝に心を引かれ、たくさんの人が集まるのです。
第二、神の存在の証拠として、奇蹟の起こるのを求めようとする態度であります。イエスさまを十字架にかけた祭司や律法学者たちが、その十字架を見上げながら「ほんとうにおまえが神の子であるならば、いま十字架から降りてみるがよい、それをみたら信じよう」と言ってののしったとありますが、この願いは昔も今も変わりません。
パウロも
「ユダヤ人はしるしを請い、ギリシャ人は、知恵を求める」と言っています。自分の知恵でわからないならば、せめてなにかしるしで神の存在を確かめようとするのであります。わたしたちは「信じる」ということの中で坐していることができないのであります。（コリント人への第一の手紙一・二二）
理解したい、しかし理解できないならば、せめてしるしをと希望しているのですが、もしもそこで奇蹟が起こったとしても奇蹟の背景になる神の力と、そのできごとと結び合わせて、考えられるかどうか、これは疑問です。そこでも信じられないなにかが残ってくるのです。
つまり信仰のほうが先であって、信仰がないならば、その奇蹟さえもわからないのです。
こうして人間がひとしく奇蹟に抵抗しながら、心の中で奇蹟を求めている。それでいて奇蹟が起こっても、それを奇蹟と認

メン。

主よ、主よ

その日多くの者われに向かいて、「主よ、主よ、われらは汝の名によりて預言し、汝の名によりて悪鬼を追いいだし、汝の名によりて多くの力ある業を為ししにあらずや」と言わん。そのとき、われあらわに告げん。「われ断えて汝らを知らず、不法を為す者よ、われを離れされ」と。

（マタイ伝七・二二、二三）

イエスはここで、御子であるということとの栄光を示していたもう。彼は、なにものによっても、父と分かたれたまわない。彼が地上で最も愛したもうものによっても、分かたれたまわない。彼はその民を愛したもうた。そして、彼を告白し彼を主と呼び、彼が救い主であることを自分の行為によって世に示す者たちより他のものを、彼は欲したまいはしない。しかし、そのような者たちのために、彼が父のみこころを否みたもうということはないのである。

預言すること、悪鬼を追いいだすこと、奇蹟を行なうこと――それらのことは、それによってキリスト教の新しさがとくに明瞭に示された事象であった。なぜかと言えば、ユダヤ人は、そのようなことを信仰者の使命とは考えなかったからである。そして、イエスを信ずる者たちが、その偉大な行為をイエスのみ名と結びつけたために、彼らは、この新しい行為によって、激しい非難を受けたのである。彼らの働きに力を与えたのは、イエスのみ名であった。したがって、ほまれが帰せられるのも彼らにではなかった。イエスの偉大さとイエスの力が、彼らによって示されたのである。それにもかかわらず、イエスは、彼らに対して、「わたしは汝らを知らない。わたしにとって汝らは無縁の者であり、わたしと汝らの間にはなんの関係もなかった」と語りたもう。彼らはイエスを「主よ、主よ」と呼ぶが、彼は彼らを否みたもう。彼のみ名は彼らの行なう偉大な行為の上に掲げられているが、彼は彼らを「不法をなす者よ」と呼びたもう。

それはなにゆえであろうか。それは、イエスにとって重大なことは、父のみこころがなされるということであったからである。しかし、人がキリスト教的に活動して、しかも神に対して不従順であるということが、あり得るであろうか。そういうことが起こりがちなのである。常になさるべきことについて語るあの小さな誡めが、軽視されがちなのである。すなわち、「預言することができるのに、その上誠実である必然があるだろうか。悪鬼に対しても力を持っているのに、その上あのサマリヤ人がなしたようなことをしなければならないのだろうか。キリスト教というものは誠実などということよりも以上のものであり、愛は義よりも以上のものではないのだろうか」と、人々は言うのである。しかし、イエスにとっては、神の誡めに対する従順に代わる代用品はなかったのである。キリスト教的代用品もなかったのである。

主キリストよ。あなたは、罰したもうときにも恵み深く、怒りたもうときにも栄光に満ちたまいます。あなたをあがめつつ神のみこころを軽んじる者たちを、あなたがいなみたもうときに、あなたは、父のみこころを行なう者たちを良しとしたもうのです。どうかわたしどもすべての者を導き、あなたによって退けられぬような仕方で、あなたに仕えさせてください。アーメン。

＜思いと祈り＞

シュラッター
井上良雄訳

収穫



目をあげて畑を見よ。はや黄ばみてかり入れ時になれり
（ヨハネ伝四・三五）

イエスは、もうかり入れするばかりに実った畑を、眼前に見たもうた。しかし、弟子たちは、そのようなものをなにも見なかったのである。ヤコブの泉からながめる広野は、弟子たちの目には、まだ冬景色として映った。それだけではなく、彼らは、このあたりの村村でイエスのなさるべき仕事はなにもないと考えたのである。サマリヤの土地での収穫などということを、イエスが考えたもうはずがなかったのである。イエスは、ユダヤ人に対するサマリヤ人たちの嫌悪を知っていたもうたし、自分たちがエルサレムとは宗教的に別のものだということに彼らがどのように固執しているかということも、知っていたもうた。たとえ、サマリヤ人がイエスのみことばを聞こうという心持になったとしても、イエスが彼らと交わりたもうということはあり得ないと、彼らは考えたのである。彼は、その使命によってイスラエルの王なのであって、したがってサマリヤでは、彼にはなんの収穫もないのであった。ところが、彼は、「汝らの目を開いて見よ」と語りたもうのである。「汝らが何の収穫もあり得ないと考えているそのところに、汝らには収穫の仕事がある」と語りたもうのである。

このヤコブの泉のほとりでの出来事は、単にイエスにとって「わが食する食物」（三二節）であっただけでなく、また単にサマリヤ人にとって新しい日の開始であっただけでなく、イエスの弟子たちにとっても、その生活を、新しい方向に押しやる強い衝撃の始めであった。そこで彼らに与えられた驚きは、彼らが知っていると思っていたものを打ち砕き、彼らの目を育てて、神のみ業を見ることを教えた。そのような驚きは、われわれにとっても、なんという祝福であろうか。そのような驚きは、もうかり入れするばかりに実っていると考えていた畑が、実は空虚だということが示されて、われわれを悲しませることもあるであろうが、われわれがもう絶望と考えているときにも、人間をみことばに対して用意させる神のみ業が示されて、われわれを喜ばせ、また力づけることもある。そして、この驚きは、人間の中にひそんでいるものを知ってでもいるかのようにできあがった判断で人とつきあうことを禁じるものであるから、いつも祝福に満ちたものである。

今がとり入れのときであるかどうか、穂が実っているかそれともいばらが繁っているのか——そのことを知りたもうのは、ただ人の心を知りたもうかただけである。それゆえに、われわれの奉仕とは、そのかたの導きに従うことと、彼が収穫物を実らせたもうときにとり入れの労働をすることである。

主なるみ神よ。わたしどもの心は、焦燥にかられて、あなたがなしたもうことを推測したいと願います。しかし、あなたは、み業が示されるまで待てと命じたまいます。どうかわたしに開かれた目を与えて、わたしが自分自身で賢明になるのではなく、み業をながめ、あなたがわたしを用いようとしたもうときに、またあなたが用いたもうままに、用いられるようにしてください。アー



鈴　木　正　久



武　藤　富　男

り金の問題ということが誤解をうみやすい。そういう意味からいっても、一日も早く独立すべきじゃないかと思います。もう一つは、戦争が終ったあと、とくに考えさせられたこと。それまでの日本というものは、極端に言うと、人のものをとってくるというところがありましたが、戦後の日本というのは、世界じゅうからもらうという、そういう気持ちがあるんじゃないか。強盗がこじきになるといっては極端ですが。(笑)こういう中で教会は、とにかく自分の足で立つということの模範にならなければならぬ。いまはことに日本全体が政治的、経済的にかなり独立してきたのに、教会はなんとなくほかのお世話になっているような感じがある。これでは、世の中を指導するというよりも、少しおくれているという感じがします。

国際的な交わり

斎藤　わたしは教会というもの、あるいはキリスト教というものが、本質的にはインタナショナル(国際的)なものである、エキュメニカル・チャーチ(世界合同教会)といわれるように、世界的なものであるということは、はっきりしていると思うんです。じゃいまの日本が、アメリカから金をもらい、いろんな形で援助を受けているということが、インタナショナルなことかというと、そうじゃない。というのは、ほんとうにインタナショナルになるためには、日本の教会というものが、一度ほんとうにナショナル(国内的)にならなければならない。そういう意味で、日本の教会が、この一〇年の間にナショナルな教会になるということに徹する必要があるんじゃないか。それはお金の面でも、神学の面でもそうです。そうしないと、ほんとうに日本の神学というものは生まれてこないんじゃないか。戦争中はやったような、ああいうインチキな日本の神学でなく、ほんとうの意味の日本の歴史、日本の社会というものから出てくる神学が生まれて、お金の独立、神学の独立がなされて、そのうえではじめてインタナショナルな教会、あるいはエキュメニカルな教会に、日本の教会がなれるんじゃないか。

お金をもらうということ

武藤　自主独立とおっしゃることには、非常に危険なものを含んでいる。キリスト教がアメリカのものであるという印象を与えることは、避けなければならぬ。これはそのとおり。それからこじき根性になってはいかん。つまりキリスト教を利用してお金をもらってそれで生活をたてようという態度は責めなければならぬ。しかし、信仰による好意を拒絶することは、貧乏人のひがみだ。自主独立ということばの中には、貧乏人のひがみが多分にある。金を前にすると、目の色を変える日本人の貧乏人根性というものが、自主独立という主張の中にニュアンスとして残っている。もう一つは、幕末の攘夷論というものがどこかに残っている。ことに日本の長老派(プレスビテリアン)は植村さんのおとうさんが旗本出身であるために、ナショナリズムが非常に強い。(笑)

鈴木　むかし内村鑑三さんの言われたことに、こんなことがありますね。知識は広く世界に求めることはいいが、自分の食っていく生活の資というものはなるべく自分でやるべきだ。やはり精神的独立というものの、具体的な最小限度のあり方というのは、経済的独立ですね。やはり経済的に独立して、そこから経済的にもできれば人をも助け得るように

座談会 日本の伝道をどうする

――クルセードをめぐって――

＜出席者＞

(日本YWCA会長) 植村環
(東京大学教授) 斎藤真
(西片町教会牧師) 鈴木正久
(教文館社長) 武藤富男



植村　環



斎藤　真

自主伝道をすべきか

編集部　きょうは、日本の伝道をどうするかという問題について、お話し願いたいと思います。とくに東京では、五月六日から六月四日まで一ヵ月間、七千万円とも二億ともいうアメリカのお金で、二〇万人を動員して、クルセードという大きな伝道がなされたわけです。そのクルセードと関連して、まず自主伝道という問題――クルセードだけでなく、日本の一部の教会は外国からお金をもらって伝道しているわけですが、そのことについて、お話し願えればと思います。植村先生の教会は、自主伝道の問題で教団からお出になったと聞いておりますが……。

植村　そればかりではないですが、それもあります。日本の伝道は百年前に外国の宣教師が来て始まったんですね。神の国の拡張ということは、国家の独立とか自主とかいうことと関係なく、それ自体のいき方でいかなければいけませんね。ですから教会の自主独立は国家主義とかなんとかいうことではない。ただ、外国の援助というものは、ある期間になされていいと思うんですが、あるときになったらそれを卒業して、それはなにも非常にせまい根性からでなく、日本のキリスト教を調子の高いものにするために、自主的な性格というものが信仰の健康のために必要ではないか。肩いからしてのことでなく、なにか信仰の性質上、自主ということが大事じゃないかと思っております。

鈴木　ぼくも、一日も早く独立すべきだとしょっちゅう主張しているわけです。一つは「日本のキリスト教は外国の宗教だ」と一般に思いこんでいます。もちろん、そういうことはないのであって、「これは実にわれわれ自身の生きるための真理なんだ」ということを、日本の人にわかってもらうために、やは

うほうが、気持ちがいい場合が多い。(笑)

斎藤　結果的には、要するに、伝道のために役だつかどうかという問題だと思うんです。隣りからもらうことが役に立つか、身内から出すことが役に立つか、長期的にみてですね。

大衆伝道のプラス・マイナス

斎藤　ごそっと何億円か持って来て大集会やって、短期的には、それで非常に効果があるかのようにみえるが、一〇年たってみたら、実はそんなことをやって集まった人というのは、全然根をおろさなかったということになると、金が非常にむだになるということです。かりに、身内でごくわずかな金を出して、細細とでもやっていた。それが一〇年たって、根をおろしていたということになった場合は。

武藤　むだになったというが、ひとの金だから、別にさしつかえない。(笑)

鈴木　それでは、好意もへったくれも、人格的なものは全然ないですよ。むこうの人の献金も、ひとの金だから、むだになってもいいというんでは。クルセードに祈りをもって捧げているというが、それは口先だけで、気持ちは認めないことになるんですね。

武藤　好意がむだになっても別に悪いことをしたわけではないから、それでいいんじゃないか。それでなにかにはなっている。わたしは大衆伝道というものについて、こういう考えを持っている。それは、第一義的伝道は教会でやるべきだと考える。一般の未信者の伝道は、その教会堂で、その教会の牧師のやるのがいちばんいい伝道である。しかしここにおもしろいことがある。たった一ぺん福音をきいて、直ちに信仰にはいっていく人がある。たとえば、ラクーアの音楽伝道ではじめて福音をきき、信仰にはいって、いま教会の長老をやっている人がある。賀川豊彦の話を一度聞いて感心し、洗礼を受けて教会の重鎮になったという人もある。だから、クルセードに効果がないとはいえない。

鈴木　だけど、クルセードの入場券には、別に伝道のことなんかちっとも書いてない。世界一流の音楽家が集まって、というようなことが書いてある。

武藤　音楽で人を引き寄せて、福音を語るのが、クルセードですよ。こうした大衆伝道においては、決心カードに記名した人が何千人、何万人あっても、そのうち信者になるのは、何パーセントかにすぎない。それでもなる人はある。過去の大衆伝道について、厳密に調査して結論を出すべきで、勘でものを言ってはいかん。

斎藤　なる人が何人かいるということは、当然そうです。逆にキリスト教というものはあんなものかということで、潜在的な信者になろうと思っている人を、逆に反発させるというか、阻害する面がある。長期的にみた場合にどっちがいいか。そういう一〇人とか二〇人という現実の数が出るのと、それと、こっちは元来何人が信者になるべきかわからない、可能性の問題。一〇年たって比べてみたらどうか。よほど考えてみないと、マイナスのほうが大きい。

武藤　クルセードに来た人が反発を感ずる場合もあるが、そのことが、各個教会がやる伝道に害を与えるとは考えられない。各個教会がやっているところの伝道にクルセードが害悪を与えて、日本の伝道を阻害しているという結論は、ちょっと酷じゃないかな。

くず湯かそば粉か

鈴木　ぼくはそういうこともあると思うんですよ。クルセードは幸いにして計画通りにいかなかったから、たいして害はないが、最初に計画したとおり、都の体育館で毎日一万人ずつ集まって、仮に千人の決心者が出る。月に一万人の決心者が出て、東京の三百ないし四百の教会に一教会当たり百人ずつ、そういうクルセードで決心された求道者が配給される。これが一度二度でなく、ずっと繰り返して行なわれる場合に、東京の教会の体質というものは変わる。それとクルセードの一つの問題は、クルセードという一つの教派があって、自分たちの教会をあれでつくるならばいいです。クルセードというのは、教派でなく、教会でなく、日本の教会、東京にある教会が自分たちの仕事としてやってもらいたい。ぼくらの主体性において、ぼくら自身の伝道計画として、ああいう方法をやってもらいたいといったわけです。その点から考えて、第

なることが、精神的独立の一つのあり方になるんじゃないか。そこで、やはり、日本の教会が、経済的な意味で、一方的に受けるような状態から一日も早く脱却すべきだと思うんです。宣教師が地方に行って伝道しようと思うと、まわりの困っている人に二千円だ、三千円だとお金をあげる道具みたいで、まじめな宣教師は非常に失望して帰ってしまう。お金を出す道具みたいになってしまっては、ほんとうの友情が逆に阻害される。お金をあげることによってほんとうの親しさというものは生まれなくなる。これはよく考えてみると、日本と海外の教会との間にもあるんじゃないか。日本の教会が、神学その他にも、よき意味においてエキュメニカルな貢献をするためには、ほんとうに自主性を持っていないとだめだ。金もらっているということがあると、こっちも遠慮があり、むこうも遠慮がある。知らず知らずに、交わりが阻害されているということがあるんじゃないか。

植村　いつぞやキリスト新聞の後援で中国に行きました。そのときに、中国の人が、しきりに「自立、自擁、自伝」ということをいうんですね。わたしは、日本だってそういう人たちはたくさんいると言ったんです。中国だって政府のお世話になって「自立、自擁、自伝」はないねと言ったんです。とにかく、ほんとうに自分の立場をはっきりしないで、人と提携するということは、むこうの人たちに対してもよくないのではないか。

好意は受けるべきか

武藤　人が好意でくれるものは、サンキューと言って受けることのほうが、実は自主独立だと、わたしは考える。真の自主独立は、自主独立を意識しないことだ。

鈴木　与えるほうも、なければいけない。

武藤　もらうのが悪いなら、与えるほうだっていいとは言えない。もらうことにひがみをもつ者は、与えることによって傲慢になる。

斎藤　好意は受けるべきだという問題は、そう簡単じゃないんじゃないか。善意というものに対して、お宅は全く善意だが、実は結果としてはいい結果にならない。したがって善意はわかるが、お断りしますということが場合によっては、こちらとしてほんとうの善意だということもありうる。ただ好意だから受けるべきだという論旨は成り立たない。

武藤　信仰による好意は、受けるべきだ。

身内からもらうか他人からか

植村　武藤先生のおっしゃるのは、よくわかる。だけど、そういうことを幸いにして、卑屈な根性を起こす人もあると思うんです。

武藤　そういうふうな卑屈な根性を起こすような人に、もらうなもらうなと言ってもだめ、自主独立だからもらうなもらうなと言っても、卑屈を増大するだけだ。教会とは霊的取引場というのが、ぼくの教会観。牧師が霊的なものを豊かに信徒に与えるからこそ、信徒は献金する。そこで初めて教会経済が成り立つ。教会経済を成り立たさない牧師をつくっておいて、自主独立といっても成り立たない。だからほんとうに独立するなら、その霊的取引場の経済を成り立たすような牧師をたくさんつくらなければならぬ。それをやらずに、もらってはいかんと言っても、それは現象を押えるだけ、対症療法にすぎない。ことは牧師養成、神学校問題に関する。(笑)

鈴木　そこには、抽象的な仮定が、いくらも含まれている。というのは、いまの神学校が武藤先生がいわれるところの霊的取引場を成立させないような学生ばかりつくっているとか、現在の牧師がそうであるとか。

武藤　つまり自分で牧師をやっても、なかなか経済が成り立たない人が、もらいたい心を起こす。先生方のようなりっぱな牧師さんで、信徒が十分ささえてくれて教会が成り立つならば、だれがそんな気を起こしますか。

鈴木　だから、それを解決するためには、教会全体としてもらわないほうにいくんだということを決めて、お互いに助け合って、いまもらっている人自身も、そういう気持ちをなくさなければならぬという原則を、はっきり打ち出さなければならぬ。

武藤　それは、外国からくる資金を、国内資金に変えたにすぎない。

鈴木　家族の中でやるのと、隣りからもらうのじゃ大分違う。(笑)

武藤　身内からもらうより、他人からもら

っていこうという時点で、ああいうことが起こったということが非常に大きな意義を増幅的に持ってくるわけです。

武藤　クルセードはなかなかよいと思う。ぼくは動きがとれないような考え方はしていない。反対もいいし賛成もいい。神の摂理は奇しきものかなと思っている。

鈴木　まるで神さまみたいなことを（笑）。神さま的というのは、悪魔的だということだよ。（笑）

クルセードは反共か

植村　ほんとうにピアスさんは、アメリカで、日本が共産化するのを防ぐ意味で伝道するというようなことをおっしゃったのですか。

武藤　これについては、わたしは証拠をもたないからなんとも言えない。わたしの友だちのラクーアなんかでも、アメリカにおいてスタンレー・ジョーンズが「もし日本に三千人の宣教師を戦争直後に送っていたら、日本は共産化されなかった」と言ったなどと言ったことがあります。だから、ピアスもそういうことを言ったかもしれぬと推定はできますね。しかしピアスは伝道集会中はこの問題にふれない。ふれても抽象的にしか、ふれませんね。

斎藤　抽象的であるから政治的でないというふうに考えることが、非常に危険じゃないか。教会というのは、好むと好まざるとにかかわらず、いまの世の中にあれば、やはり政治的たらざるを得ないわけです。自分の意志で政治的でなくとも。仮に政治的に中立だといっても、それは中立だということにならない。その意味でクルセードは、仮に主観的には政治的でないとしても、客観的には大きな政治的効果というものは出てきます。それゆえにキリスト教というものが、そういう政治的な効果というものをねらっているものだというふうに、国民に思われてしまうわけです。それは、これからの教会にとってマイナスだと思うんです。

武藤　プラスもうんとあるな。プラス・マイナスで残るところが多いんじゃないかな。

鈴木　日本の教会の問題は、いったい教会はこの世界でなにをすべきかということを、はっきりしていないということですよ。そしてなにか人の集まり方を多くすればいいぐらいに、頭ではそうじゃないが、心の中では、どうも教会という団体が、それ自身、自己目的化して、そしてほんとうに教会の世における使命、たとえば教会に人が集まらなくてもこういうことをやればいいんだということを考えていない。こういう点、クルセードは、そういう世における使命に対する無自覚さというものを目ざまさないで、逆に無自覚というものを増加するおそれがある。

自立するための条件

編集部　クルセード問題はこのくらいにして……。あと何年かかるかしれませんが、どういうことをやっていったら自主独立の体制になれるかということ、そのことについて具体的にお話し願いたいと思います。植村先生の教会はいま自主伝道をやっていらっしゃるんですか……。

植村　わたしの教会は、うちでひとりの大学生に聖書研究を指導しまして、それからだんだん人々が洗礼を受けるようになってできたんです。わたしが外国にいたことがあるものですから、西洋の人がときどき訪ねて来たりしますが、たいへん友好的にしてわたしを尊敬してくれて、ささえるなんていうことを言いません。むろん献金するといえばもらいますが、それは、わたしたちと同じ立場において献金してくれればもらうわけです。それから日本キリスト教会というのは、西洋の人たちと提携する伝道というのをいたしていません。

編集部　たとえば開拓伝道が、海外から金が来ないために伸びないということはありませんか。

植村　むかしから日本キリスト教会というのは教団にはいる前から、外国からお金をもらわない方針でしたよ。西洋の人たちが伝道しておられて、協力伝道をし、それを自分たちの力でささえるというような方針できましたわね。いま日本キリスト教会になってからは、——一九五一年ですが——はじめ三九だったんですが、いま一〇三の教会になっている。開拓伝道はずいぶんつらいのです。みん

一にあのような導き方が、ぼくら自身のいまの日本、ことに東京における一つの導き方としていいかという問題があると思うんです。いまの状況における日本や東京において、キリスト教の真理が明らかにされるということは、教会が世の光、地の塩になるということは、ああいう形をとるかということ、これは非常に真剣な問題なんですよ。ですからぼくはクルセードが予定どおり行なわれたとしたら、日本の教会の歴史とか社会に対する使命というものを非常に稀薄にして、要するに教会が頭数をふやしさえすればいいということになる。しかもクルセードのようなやり方で一つの教会に何百人という求道者が集まってきた場合には、東京の教会それ自体の戦闘力が弱ってしまう。変化をきたす。だから非常な危険があると思うんです。だからぼくは反対なんです。

武藤　求道者を割り当てられた教会の牧師が、その人を変えていけばよい。クルセードはインヴィテーションにすぎない。教会のためのインヴィテーションであるから、結婚にたとえれば、橋渡しですよ。まだ見合いまでいかない。

鈴木　それはとても問題で、ぼくは牧師になって何年かたって考えたんですが、おかしな例ですが、くず湯をつくるには、初め冷たい水でよくといて、それから熱いお湯をシュッと入れればいいんですが、初め生ぬるいお湯を入れるとツブツブができて、あといくら熱いのを入れてもだめだ。最初のスタートというのがほんとうにかんじんで、いい加減に引っぱり込んだら、あといくらやってもだめですよ。(笑)

武藤　しかし、そば粉は熱湯でとかなければ、いいそばはできない。粉による。なんでもくず湯でいってはいかん。(笑)

クルセードは悪くないか

植村　クルセードの目的は何か。ほんとうの真理を紹介する目的か。それともムードとか雰囲気をつくるという目的でしょうか。

武藤　音楽はムードをつくるんだけれど、ピアスの説教はムードでなくて、理論です。ピアスのはムードどころじゃない、猛烈なでかい声をしてたたみかけてくるような説教です。

植村　どうしてそんなに理想的なものを音楽などで水増ししたんですかね。

武藤　それは人を多く集めるため。これが最良最高の伝道じゃないので、せっかくやろうというのだから、悪いことじゃないからやらしたらよい。

鈴木　もしそのくらいなら、ぼくらがまじめに考えて反対したからやめたらいいんじゃないですか。

武藤　ほかに熱心な人々があるから、その人たちが教団なりNCCなりと結びつく場合に、やめてしまうということになると、問題が起こるから、やったほうがよい。初めからやらないならそれもよいが、一ぺんNCC常議員会で引き受けてやろうとしたものを、途中で反対があるからといってやめるということは傷が深くなる。やっていくなら、反対があっても、それはかすり傷ぐらいで、かさぶたができたら落ちてしまう。

鈴木　ぼくはそういう考え方にほんとうに反対なんです。ということは、結婚にしても、だいたい男だからいいじゃないか。一度結婚しちまえ。いやだったらまた別れればいいじゃないか。そんなことをいったら非常にバカにされる。

武藤　いいかげんの問題をたいせつに考えすぎているんじゃないかな。(笑)

鈴木　クルセードの反対論者は、みなまじめに反対する論拠があるのに、クルセードの中心にいる人は、ほんとうにクルセードをやろうという論拠がなくて、始まったからやっているとか、そのまわりのことしか考えない。善良な信徒が祈ったりしているんだから、中心だった人は罪深いですよ。

武藤　クルセードの中心人物はみな確たる論拠をもってやっている。鈴木先生の非難がわたしに向けられているなら、わたしはそれを受けます。わたしの罪は深いですよ。(笑)

鈴木　神さまに裁かれますよ。おたがいに地獄で会うかな。(笑)

斎藤　あるいはそれ自体の問題は大きな問題じゃないかもしれぬが、要するに日本の教会、ことにこれから日本の教会が自主的にな

なんだ、要するに神に奉仕する学という意味においての神学として、たとえば、日本の政治とか、歴史とか、農村事情とかいうものをやっていかなければいけない。

鈴木　日本の教会では、ニーメラーだとかカール・バルトだとかいう、本で読んだようなことを考えて、実際に目の前にあるものに真剣にぶつからない。だから神学が生まれてこない。実際に目の前にあるものにぶつかるようになると、それを教団全体では止めるようなところがある。たとえばこんどのクルセードでは、意見が分かれるから「基督教新報」にも書かないでくれなんて達しがすぐやってくる。こういうぐあいに事なかれ主義で目の前をおさめていこうとして、目の前にある問題は、安保問題でも何か意見が分かれるようになると、まあまあというようなことになってしまう。ところが意見がぶつかるようなことに信仰をもってぶつかることによって、はじめて神学が生まれてくる。それなのに、教会は実際のやり方において、ほんとうに信仰をもって目の前にある問題にぶつからないようにしている。教会を守るつもりで、非キリスト教的な、この世的な、一つの団体が割れないようにおさめていこうというような経営学的なものに、戦争中からずっと堕している。そして、教会を守ると言って、いつのまにかキリスト教以外のスタンダード（基準）に立ってしまっている。その意味で、クルセード問題でも、安保問題でも、火花の出るほど論じたほうがよかった……。その点、教会は自分を危険にさらす覚悟がなければ、伝道はできないですね。

武藤　法律の世界には六法全書がある。学説がある。最高裁判所の判例がある。下級裁判所の判例がある。たとえば民法一七七条なら一七七条に関する判例がたくさんある。それを勉強しなければ法律はわからない。ところがキリスト教の世界にはいってみると聖書はある。そして聖書に対する理論はずいぶんある。ところがそれが現実に日本人社会に適用されたときにどういう問題かという判例に当たるものがない。それがほしい。こんどのクルセードでも、聖句にもとづく、いくつかの判例ができたね。これは非常によかった。

鈴木　金使ったかいがあったですね。（笑）

なにをしたらいいのか

編集部　最後に、自主伝道をやっていくために、われわれクリスチャンが、どうすればいいかということについて……。

鈴木　おのおのおかれた場所で自分の足で立つような人間になれということだな。

植村　それぞれの会員ができるだけ自分の家で小さな集会でも開いて、友だちを招くとか、職域の人を招くとか、そういうことをするということですね。それによって、自分の信仰が伸びてきますし、人を導くことにも貢献していけますね。自分の家庭を開放して集会をやるということは、いいことですね。

斎藤　信徒（レイマン）の生活というものを、教会と社会というふうに分けないで、教会は社会の中にあるんだから、結局レイマンとしての生活は、それ自体教会生活なんだ、ということ――なにも祈りをいっぱいしなさいということじゃない。自分のやっている職業なら職業、学生なら学生として、いろんな勉強を含んだ学生生活、社会生活というものを常に誠実にやる人になる。いわゆる道徳主義じゃない。それにもっと徹底することが、同時に教会生活というものを豊かにすることじゃないか。社会生活というものをまじめにできない人に、ほんとうの教会生活はできっこないんだと思います。

武藤　献金ということだな。献金をケチケチしないで、できるだけ教会に献金しなさいということですよ。たとえば月給二万円取っている人だったら月に千円、少なくとも五百円は献金しなさい。礼拝に行ったら、五〇円や百円の礼拝献金はするような心がけが、結局日本の伝道を盛んならしめる。尊い金だから、ほかに使うよりも、伝道のために献金するということがいちばんたいせつだな。

鈴木　もらうよりは、自分が出すことを考える。それは精神にまで影響しますよ。少しでも出してみたら考えがだいぶ違ってくる。

なアルバイトしながらやっていますね。

編集部　やはり大きな教会がささえて…。

植村　大きな教会から家庭伝道ですね。家庭の集会が大きくなって教会になっていくという方針です。

大教会が開拓伝道をささえる

鈴木　根本については植村先生に全然賛成です。自分の教会に関する限り、とにかくやってみなければならぬので、安城という土地を選んで、五年計画で伝道してきたんです。日本人の手で開拓伝道をやる、そしてそこで教会ができて会堂も建ったし、まだ借金がちょっとかたづかないで、七年目ですが、月々些少ながらですが送っております。ほかに金額はたいしたことはありませんが、地方の二つの教会をささえて、合計三つの教会に少しずつ金を送っているわけです。したがって、牧師給もあまり多くもらわないようにして、アルバイトをやったりして、とにかく日本人の手で日本の教会をささえるということを念願としているわけです。ぼくの心の痛みというのは教団自体のことです。教団全体のパーセンテージから言うと、それほどのものではないですが、地方開拓伝道費というものが、ミッションからの金でまかなわれているわけですよ。それを、どうやって独立してやっていけばいいかということが一つの大きな問題で、ぼくはちょっと無理があっても、スピーディにこれをいちおう独立するように考えていって、方法はそれから先に考えることにしてもいいんじゃないかという気持ちがしています。

植村　わたしの父は、会員が結婚いたしますと、こういう地方にいかないか、あっちに家を探して、きみの家で家庭集会を始めろ、それが次第に教会になっていく。あそこは近所に教会がないからねというような調子で、だんだんたくさん教会をつくったんです。わたしも結婚したとき二週間目から、わたしのところで家庭集会を始めて、それがいまの教会です。そういうふうに家庭から始まったんです。わたしなどもいま、結婚した人の家庭で集会しますね。

神学校と献金と

武藤　日本の教勢を盛んならしめる第一の問題は、神学校問題を考えなおして、いかにして人を選ぶかということです。第二の問題は、なんといっても、信徒の献金の率をふやすということですね。信徒がもっと献金するというくせをつけなければいけない。これは日本の教会の重要問題ですよ。おさい銭思想で、コーヒー飲んでも五〇円惜しまないくせに、一〇円の献金を惜しむ。どうしていつごろからこういうふうになったか。

植村　東北には、日本の旧日本キリスト教会の、ミッションの教会がたくさんあった。それが戦争のあと、献金しないからだいぶつぶれましたね。日本人は、献金しないくせがついている。

教会の時代に対する使命

鈴木　単に教会を援助しなければならないだけだったら、あまり金を出す気にならないと思う。やはり、教会の時代に対する使命とか、主張とかいうものがほんとうにはっきりしておれば、信徒は、われわれは少数だが東と西の間にあるこの日本の問題というものを考えると、ボヤボヤしてはいけないということから、金を出すようになるかもしれない。その点、いまの日本の教会では、多くの教会がほんとうに主張というものもないし、使命もない。牧師が飢え死してはかわいそうだから出そう、というような同情心では、一時は出しても長続きしない。そういう意味からいって、牧師が、「飢え死しても、おれはこういうことを言いたい」、そういうものを持たないといけないと思うんです。そういう点で、クルセードは、そういう歴史とか、社会とか、世界の問題とかいうものを考えない者をつくる危険性がありますね。

斎藤　日本の神学の致命的欠点というのはいまの日本の社会状況と結びついていないというところにある。あれだけ刻苦勉励していっしょうけんめいやっても、神学のほんとうの水準というのは高まっていないのじゃないか。神学校における一般教育というものを、広い意味での神学としてやるという姿勢を、神学大学の先生がたも、生徒も、それが神学

できるでしょう。

　このようにして、女性が男性よりもより多く不安を持っているということから、女性が感性的であることを知ることができるのですが、そのほか生理学的に女性の肉体的構造によってとか、美学的に女性のおしゃれによってとかしても、そのことをうかがうことができると思います。たとえば、女性が美しくなろうとするときには、必ず自己の感性的な肉体を示す仕方で美しくなるものであります。二、三の例をあげてみますと、女性はハイヒールをはきますが、あのハイヒールはそれ自体として美しいものであるよりも、それを契機にして、感性的な足の存在をめだたせ、その美しさを指し示す働きをしていると言わねばなりません。それから女性が口紅を塗るのもそうであります。口紅それ自体が美しいというより、口紅を塗ることによって、感性的な唇の存在をめだたせ、その美しさを指示しようという意図がそこにあるのであります。あるいは、耳飾りの場合など、耳飾りそれ自体が美しいというより、耳飾りをすることによって、小さな耳や、耳のうしろから首のうしろにかけての柔かなえり足とか、髪の毛などの、感性的な肉体の美しさをめだたせよう気づかせようという意図があるのだと思います。つまり、ハイヒールとか口紅とか耳飾りとか、女性が美しくなろうとするときに身につけるもののすべては、それ自体で完結したものではなくて、他人に自己の肉体を気づかせるための契機であったと解することができるのであって、それらはみな女性の感性性を証明するものにほかならなかったのであります。

2　オイディプス王

　だが、男性は女性のような仕方では自分を美しくすることはできません。男性がハイヒールをはいたり、口紅を塗ったり、耳飾りをしたりしたらどうでしょう？　女性のようにのばしたかみの毛にパーマネントをして、スカートをはくことを提唱し、みずから勇敢にもそのごとくしておられる花森安治というかたがいますが、いつか出会ったときはなはだこっけいな、グロテスクな感じがいたしました。男性は、女性のように感性的な存在ではありませんから、自己の肉体を指し示す仕方において男性的であったり、あろうとすることはできないのであります。反対に男性の本質は、肉体的・感性的なものを突き破って行く〈超越〉にあるということができます。

　前回、話が抽象的にならないために、〈魅力ある女性〉の例として、シェークスピヤの『お気に召すまま』のヒロイン、ロザリンドのことを取り上げましたが、今回もそのように、わたしにとって〈魅力ある男性〉のイメージを与えるものとして、具体的にソフォクレスの『オイディプス王』をここで取り上げてみましょう。

　オイディプスは、スフィンクスという怪物のなぞを解いてそれを退治したため、約束によってテーバイの王となり、亡くなった前王ライオスの妃イオカステと結婚して、二男二女の父親となっている英王でありました。ところが、長い平和のあとこのテーバイに恐ろしい疫病とききんが襲来し、そのための国民が塗炭の苦しみにあえぐようになりました。もちろん、国民がそのことを訴える前にオイディプスは、その原因がどこより来たかを、デルフォイの神殿に占ってもらうようにいたします。

あわれな子らよ、そなたたちが何を望んで来たのかは、わたしにはわかっている、よくわかっている。

　そう言って、妻イオカステの弟クレオンが神殿からその占いをもって帰るはずだと告げるのですが、やがてもたらされたアポロンの神の神託によれば、不幸の原因が、先王ライオスを殺害した下手人がまだこの国に生きているがゆえであって、これを探し出して、殺すか追放するかせぬうちは、神の怒りは解け

恋愛論・第二回



男性の魅力

高木幹太

1　女性における感性的なもの

前回にわたしは、女性の本質は〈献身〉にあると述べました。だが、どうしてそのように、女性の本質が献身だと言えるのでしょうか。思うにそれは、女性が男性よりも多くの〈不安〉を持っているからであります。だがどうしてそのように、女性が男性よりもより多くの不安を持っていると言えるのでしょうか。それは、女性が男性よりもより〈感性〉的だからなのであります。感性・不安・献身この三つは、相互に深く連関しながら、女性的なるものを形づくっているのだと言えるでしょう。

ケルケゴールによれば、人間は霊的・理念的なものと肉的・感性的なものとの総合としての精神でありました。平たく言えば、たとえば、だれかが疲れて電車に坐っているとします。ところがそのひとの前に、ひとりの老人が立ったとき、〈よし〉と心の中で決心して、立ち上がってその老人に自分の席を譲ってあげたと仮定してみましょう。この人の行為を分析すると、次の三つの要素からそれが成立していることがわかります。第一は年寄りをたいせつにせねばならぬという、霊的・理念的な気持ち。第二は疲れているのだから坐ってラクをしておりたいという、肉的・感性的な気持ち。第三は、第一の霊的・理念的な気持ちを第二の肉的・感性的な気持ちに関係づけ、そこにおいて〈よし、席を譲ってあげよう〉と行為にまで決断する自由の精神。つまり、霊的・理念的なものと、肉的・感性的なものと、その二つを関係づけ総合する精神の自由、という三つが、なんでもないような、老人に席を譲るという人間の行為の中に存在するのです。人間が霊―肉の総合としての精神であるとケルケゴールが規定した意味は、こういうふうに考えるとだれにもよくわかると思います。

ところで、女性は男性に比べて、より肉的・感性的であるために、男性と同じように霊―肉の総合としての精神として規定されていても、精神における霊―肉の総合は、男性に比してより困難となり、霊―肉の分裂の可能性がそれだけ深刻になると考えることができます。たとえば、女性は分娩・出産において女性的なものの頂点に達するわけですが、この場合女性は、いっぽうにおいて霊―肉の総合としての精神という人間としての根本的構造を持つとともに、いっぽうにおいて、あまりに肉的・感性的な方向が強烈になるため、そのような霊―肉の総合としての精神にはなんの仕事もなくなって、それがいわば無力化される、という結果に陥ることになります。そして、このような霊―肉の総合としての精神が、その働きを遂行したいのに遂行できないというおののきが、出産を前にした女性の〈不安〉にほかならないのであります（ヨハネ一六・二一参照。なおケルケゴールは、出産の不安と死の不安とは対応していると申しております。）それゆえ、女性が男性よりもより多くの不安を持っているということは、女性がより感性的なものでありながら、しかも男性と同様に、本質的に精神として規定されていることによるものであるということが

ふりかかろうともたじろぐことのない、オイディプスの激しい真実に向かっての〈超越〉と、そのゆえの悲劇性とにわれわれが心を打たれるからにほかならないのであります。

オイディプスは、かつて酔えるひとりの男から身の素性を教えられたときに、遠慮せずそれを父母に聞きただしました。さらにそれでも不審がはれないとなると、父母にないしょで、デルフォイの神殿に行ってまで、その真相を知ろうと努めました。彼はたとい、自分の幸福を打ちくだいても、真相を知らずにおれない誠実な人間であったのでした。それは、次第に事実が明白になって、恐ろしい予感がしたときに、妃のイオカステが、運命に翻弄せられてなに一つはっきりわからぬ人間にとって、なにも気にせずに暮すことにこそ幸福の存在することを説き、いさめたとき、それをもさえぎって、真実を追求するのをやめないオイディプスの態度に、はっきりあらわされています。ひとたび手がかりを得た以上、オイディプスは真実をおおい隠してそのままにしておくことができないのです。

いいや、このことを突きとめぬわけにはゆかぬ。

ああ、なんという恐ろしい、激しい超越せんとする心でしょうか。

いったい、なにかを認識するためには、知の主体である者が事態から離れ、超越する必要があります。もしそうしないなら、その事態が、その事態と連関している多くの事態―一般性、の中でいかなる位置を占めているかを知ることができないからです。まさにこのような、ある事態を一般性の中で位置づけることが、それを認識するということであったのです。たとえば、認識を最も縮めて言えば「AはBなり」という〈判断〉の形になるものですが、Aにあたる主語の部分は個別的であり、Bにあたる述語の部分は一般的なものでありました。〈高木は人間である〉という判断では、主語にあたる高木は特殊な個別的存在であり、述語にあたる人間はもっと広い普遍的な一般的存在なのであります。したがって、判断（すなわち認識）というものは、主語的個別的なものが、述語的一般的なものにおいてある、あるいは包まれてあるということにほかなりません。このことは、認識するためには、認識の主体が事態から離れて一般性にむかって〈超越〉することが必要であることを示すものです。オイディプスは、彼の位置が感性的には快適な環境にあっても、真実を認識するために、それがさまたげになるゆえに、あえてその環境を超越したのであります。そしてこのようなやむことなき〈超越〉が、男性に対して、女性の知らない、利己的に発達した〈自己〉の観念と、決定的な意味の〈知性〉をもたらしたのだと言うことができます。超越をその本質としている男性は、彼が男性的であればあるだけ、いかなる事態にあっても、無限に自己を超越的に冷たく見つめる別の自己――利己的に発達した自己の意識――を持つようになり、したがってまた、悲劇的結果に陥るほどの決定的な知性の持ち主となるに違いありません。ケルケゴールが言ったように、もちろん男性も、女性と同じように自己をなにかに捧げるでしょう。そして、そうしないような男性は真の男性ではありませんが、しかしそのように献身しながら男性は、自分の自己をいつも背後に残しておき、〈ほかでもない、この自分が献身したのだ〉というふうな自己意識を持っているものなのであります。

ヤスパースが言ったように、思うに人生は迷妄であり、幻想の美しいベールを断てば、人間は没落せざるを得ないものであります。だからこそ、あのイオカステのように、なにも考えずに、ごまかしの美しいベールに包まれて生きようと人はするのです。だが、オイディプス――真の男性は、たとい破滅にいたることがあったとしても、たじろがずに〈超越〉してやまない存在だったのであります。

（次回は「男と女」）

ない、というのでありました。敬虔なオイディプスは、うやうやしくこの神託を受け、下手人を探して罰することに全力を注ぐことを誓い、かつこのことについて盲目の予言者ティレシアスを招いて意見を求めます。すると彼はなぞのように、

おお、知恵がなんの役にも立たぬときに、知恵をもっているということは、なんと恐ろしいものであることか！ さよう、このことはおれはようく知っていたが、忘れてしもうた。それでなければ、ここへは来なかったであろう。

と言うだけで口を閉ざし、いくらオイディプスが尋ねても答えないのです。ついに彼のそのような態度に業を煮やしたオイディプスは、この老予言者が、表面聖者らしく装っていても、実は先王ライオス殺害に加担したために、明らかに告げることができないのだと疑って、そのことを口にしてしまいますと、怒りを発したティレシアスは、オイディプスこそ下手人であり、またけがらわしくも肉身と結婚している者だ、と言いきってしまうことになります。それからオイディプスは、このことが、自分をおとし入れる妻の弟クレオンの王位をねらう策謀であると思い、怒り狂うのですが、クレオンと争っている所に妃のイオカステが登場して、予言など信ずるに値しない、と言って、その証拠に先王ライオスが殺された当時の模様を話します。彼女はこう言います。ライオス殿はかつて、自分の子によって殺されるとアポロンの神託を受けたが、彼が実際に殺されたのは、ある三筋の道の合っている場所で、盗賊どものためであったではなかったか。しかも、父を殺すという予言を受けたその子は、生まれて三日とたたぬうちに山に捨てられて死んでしまっているのだ、と。しかし、妃が何気なくこのように話したことばを聞いてオイディプスは深い疑惑に襲われるのです。というのは、まだだれも話したことはないのですが、彼はかつて、自分がテーバイの隣国コリントの王ポリュポスと王妃メロペとの間の王子であると思っていたところ、青年のころ、酒に酔ったひとりの男から、おまえは実はほんとうの王の子ではないと言われたことがあったのです。彼はもちろんそのことを父母にただしてみるのですが、簡単に否定されてしまいます。しかし父母に隠してデルフォイの神託に伺いをたてたところ、彼の問には答がなく、ただ汝は母と交わり、呪われた子の親となり、また生みの父親殺しとなるだろうという恐ろしい示しが与えられたのです。それで彼は、故郷コリントに帰ることをやめて放浪の旅をしているとき、三筋の道の合っている所で、車に乗った老人と出会い、道を譲る・譲らぬということから争いが起こり、ついにその老人を殺したことがあったのでした。

おお、これはどうしたことだ。どうやらおれはたったいま自分に恐ろしいのろいをかけて、それを知らなかったようだ。

このことを発端として、やがてこの劇はオイディプスが、父を殺し、母と交わってのろわれた子の親となったことを、息づまるような悲劇感のうちに描いていくのです。かくして事実を知って自分のへやに駆けこみ、みずからくびれ死ぬイオカステ、――生みの母にして、しかも自分のいとしい妃の死骸を抱いたオイディプスは、彼女の衣裳から黄金の留針をとり、みずからの両眼にむかって、

見てはならぬものを見、おれが知りたいと願っていた人を見わけることのできなかったおまえらは、今後は暗闇のうちにあるであろう。

とのろいの歌を繰り返しながら、いくたびもその両眼を突き刺して盲目となるのであります。

3 男性の本質

しかし、このオイディプス王のどこにわれわれは＜魅力ある男性＞を感じるのでしょうか。思うにそれは、いかなる結果がその身に

いう女の人たちは、廃業するのに簡単じゃなかったらしいですね。みんなが寝静まるのを見はからって、二階から帯をたらして、それにぶらさがってたびはだしでもって逃げだした。しかし、警察に行って手続きをしなければならぬものですから、そんなふうにして、朝から晩までなにも食べないで、夜になってへとへとになって、婦人ホームに着いたなんていう記録がございますからね。それから、婦人ホームも当時は婦人救済所といっていたらしいんですね。たいへん危険にさらされておりまして、父の山室軍平なんかは、くるわで頭をぶたれたこともあるんです。その後もかなり危険が多かったらしくて、外に出るときには、いちいち交番に断っていかなければならないんですって。それだものですから床屋さんに行くのに、「ちょっと行ってまいります」と断らなければならなかったので、めんどうだったと申しておりました。お世話をしている婦人たちの中に、人妻なんですけれども身持ちがよくないというので、ご主人にたいへんいじめられて、送られてきた人だったそうですが、気が変になりまして、当時救済所にあったガラスというガラスをみんなたたき割ったそうですよ。窓でも鏡でもね。みんながキャアキャア言うし、ひとりの婦人がわたしを背負って、交番目ざして走ったそうですがね。その背負ってくださったかたは、なにかお家の事情で婦人ホームにきていたかたですって。大きくなってお目にかかって、お話を承りました。その女の人が血だらけになって、そこいらをたたきこわして回るものですから、わたしをおぶったまま交番に駆け込みながら、自分のげたが思わず二間ほど飛んだという話をしておりました。

幼稚園時代は女中寄宿舎

そういう中で育ったんですね。それからわたしが幼稚園に行っていた時分には、こんどは女中寄宿舎と当時言っておりましたけれども、東北のほうにたいへんききんがございまして、貧農の子供たちがみんな売られてくるんです。救世軍では現地に人を派遣して、現地で解決つくのはなるべく解決するようにしたんですが、現地においては、どうしても危険なのは連れてきて、その寄宿舎に入れたんです。女中寄宿舎と申しましたけれども、男の子もだいぶきておりましたね。わたしは、その子供たちといっしょにいたんですがね。ずいぶん年の若い子もいましたし、相当年配の子もいましたが、だいたい二十前後でしょう。

覚えておりますことは、みんながおなかをガツガツ減らしてきたんですね。それでごはんをみんな楽しんで食べるんですね。あまり楽しんで食べるものですから、ごはんが足りなくなりましてね、よくわたしなんかあと回しにされましたから、身にしみて覚えています。はっきり一つ覚えていることは、あるとき商売をやっている人が来られまして、母にこういう話をしているんです。「奥さま、あなたのようにごはんを食べさしてはだめですよ。あなたは食が進んでたまらないような塩ザケとか食べさせておられるが、あんなものはだめです。子供には梅干とかすっぱいものでもやらないと足りなくなるでしょう」こういう話です。そうしたら母が、「みんなおなかをすかしてくるんだから、食べるものだけは、こちらもたいへんだけれども、十分食べさしてやる。そして、健康をとりもどしてやらなければならぬから、これからもいまの方針は変えない」と、こういうことを言っていたのを覚えています。

それで宗教教育といえば、その時分、前後一五〇人ぐらいの男の子、女の子がきたわけですね。ききんのときだけの臨時の施設でしたが。そこで、夜、集会がありまして、覚えていますが、山室軍平が作った歌に十戒を数え歌にしたものがあるんです。「一つとやひとりのほかに神はなし」というわけでね。それをある晩、模造紙かなにかに書いた歌を見

＜わが信仰の生涯＞

〝キリストはわがもの〟

（語る人）　（救世軍書記長官）

山室民子



婦人救済所で生まれる

編集部　先生のご家庭でお受けになった宗教教育について伺いたいですが。

山室　家庭教育というのは、学校の教育と違って、時間割が決まっているわけではないし、カリキュラムがあるわけでもないですから、ただ毎日の生活の中でということになりますね。わたしは、母が経営しておりました救世軍の婦人ホームで生まれました。当時いまの本願寺さん、築地のあたりにあったんです。娼妓の自由廃業ということが始まった時代のことで、母が遊郭からのがれてくる婦人たちの世話をしていたんですね。もちろん小さいときのことは、わたしの記憶にないんですが、当時の話を聞いてみますと、非常に恐ろしいことがあったらしいんです。そう

キリスト教に関係のない子供たちがいますから、どうしてもそこで習ったことが断片的になっていたような気もします。それで、学校で朝々聖書を筋を立てて習ったことは、たいへんよかったと思いますね。

しかし、十代というころは、男にとっても女にとっても、むかしからむずかしい時代だろうと思いますね。わたしも十代になりましたころには、たいへんいろいろ迷ったり、それから一種の反抗をいたしましてね。その一つは、つまり、わたしども小さいときからお気の毒な人たちといっしょに住んでいたんですね。そして、そういう方々と同じようなものを食べております。ことに女の子で、服装のことについては人並みにきれいなものが好きだったんですね。親戚の者などは、女の子だからといって、わたしのところに、ほかのお嬢さんたちの着るようなものを持ってきてくれたりなんかするんですけれども、わたしの母は自分の子供にだけそういうものを着せたり、はかせたりしないんですよ。せっかくもらったものではあるけれども、これを着ることによって、みなが悲しい思いをしなければならぬということはいいことではない。それから、わたし自身としても、そういうもので彼らよりも、ちょっと偉いような気持ちになることは好ましくないことだと申して、それはわたしもよくわかっていたんですが、だんだん大きくなるにつれまして、お友だちがみなさん、なかなかきれいな服装をなさるし、それからみんなおしばいにいらっしゃったり、いろいろ生活を楽しんでいらっしゃるのを見聞きするにつれまして、なにかおもしろくないような感じがしましてね。お気の毒なかたが世の中にいらっしゃるのも事実だし、そういう人たちに、だれか奉仕しなければならないのはわかっているんだけれども、わたしだって人並みに楽しんだり、若い年ごろの時代を、もっと愉快に過ごしてもいいんじゃないかしらんと思ったり、そしてキリスト者の生活というものは、こんなに苦しいものかとそのころは思ったんです。こんなにがまんしなければならぬことがあるのか、ちょっと苦しすぎるのではないかしらんと考えたりしました。

それに、わたしは小さいときからたいへんに本が好きでしたから、十代のころには、自分で図書館などに行ったりして、相当いろんな本を読んだりしておりましたから、ちょっと生意気でございましてね。いろいろ理屈をつけたり、それから信仰していらっしゃるかたを批判的な目でみたりというけしからん時代があったんです。

そのころのことでしたね。わたしも女の子のことですから、反抗するといってもあまり人にはそれほどわからなかったかもしれないですけれども、心ではなかなかどうして反抗していたんです。しかし、それは母にわからないことはなかったですね。わたしは反抗していた時分には、小さいときから教えられて怠らなかった朝晩のお祈りなんかもやめていましたからね。お祈りをしないで寝床にもぐり込んでしまうわたしを見ていまして、心配していたんです。それでもわたし、別に人間としての権利というようなことや、それから生活を楽しむとかいうような、そういうようなことをいくらか考えていたものですからね。それでもそれでいいと思ったし、信仰のことは迷っておりました。

徹夜で祈る母の姿

そういうときでしたが、わたしの母が、救世軍の療養所を建てなければならぬと思ったんですね。だれに頼まれたわけでもないし、救世軍のほうから、別に任命を受けたわけでもないんですけれども、自主的に、どうしてもそれを自分の責任として実現させたいと思ったものですから、非常に無理をして、その運動をしたので、命を縮めたといえばいえるんですけれども、なにしろ、結核予防法という法律もない時分で、大正の初めですから、世の中の人の、結核に対する理解も薄い時代ですから、母もみなさんの援助を得ようとしても、実際容易なことではなかったですね。

せながら、母が子供たちをズラッと並べて、オルガンをひいて教えていたんです。そうしたら男の子が「そうじゃない、神さまはひとりじゃない」と言うんです。それで、ほかの子供もワアワア言い出して—そういうことはあの時代は珍しかったんじゃないかと思いますがね。いまの子供だったらよく理屈を言いますけれども。わたしの母はそういう質問とか発言を許しておりましたので、子供たちも自分のほうの村に行けば、不動さまだの地蔵さまだのいろいろ神さまがいるので、ひとりだというはずはないという意見だったんです。それで議論が沸騰していましたよ。でもいま思い出してもたいへん愉快だったと思います。その子供たちが、それぞれ就職いたしましたり、のちに結婚したりしまして、お正月とかお盆には、ほんとうにいっぱいになるほど出入りしたこともありますね。わたしもそういう子供たちの素朴な問答とか、いまも自分の頭の中に残っていて、これはわたしにとってプラスだと思うんですよ。

宗教教育といっても、そういう実際のいろいろの問題の中でもまれながら、自然と自分の身についてくるようなものだったんじゃないでしょうか。

神さまは見ている

婦人ホームと女中寄宿舎の間に、短かい期間、わたしの母がちょっと休養しているときがあるんですね。つまり、父がイギリスに行って、彼女も婦人ホームであまりいじめられたものですから、いくらか健康を害しておりましたものですから、三田のほうの小さい長屋みたいな家でしたけれども、そこに住んでいたことがありまして、わたし、数え年五つですから、いまだったら三つか四つですね。そのころはっきり一つ覚えていることがあるんです。それは、母がわたしにうそをついてはいけないという話をしたことがあるんです。安普請の家でしたから、あちこちガタピシしているんですよ。手洗いの戸がよく締まらないんですね。それで、子供たちは締めないでいることが多かったんじゃないでしょうか。たぶんそうだったと思うんです。あるとき、子供たちが外で呼んでいるものですからわたしが、よくさんをかけないで飛びだしたんですね。そうしたら、うしろでガタガタ風が吹いて戸があいたんですね。わたしは呼び返されたんです。「いつも言っているように、かけて出なさい」と母は言ったんです。わたしは小さいときからおしゃまでしたから、かけたのにあいちゃったというふうに言って、飛んで行こうとしてとめられたんです。母は見ていまして、「かけないで飛びだしたからあいた。小さいことだけれども、うそを言ってはいけないということと、うそというのは、ほかの人が見ていないでも神さまが見ていらっしゃるということ、ときにだれも見ていない、おかあさんだって知らないことがあるかもしれません。しかし、神さまは見ていらっしゃる。神さまの前でおわびをしなさい」と言われておわびをしたんですが、なにかとても悲しくなって、オイオイ泣きながらお祈りしたのを覚えています。その記憶がたいへん強くわたしに残っておりましてね、それから困ることがあっても、うそはつかないということを身にしみて感じましたね。

十代の反抗期

そんなふうにしてわたし、大きくなって、やがて学校は小学校から女子学院にはいったんです。これはミッション・スクールですね。わたしどもがまいりましたころは、まだ文部省の検定も受けておりませんでしたから、かなり自由なキリスト教教育があそこでなされていたと思いますね。文部省の検定を受けてからは、少しおもしろくなくなったような気がするんです。そのころの教育が、やはり、わたしには意味があったように考えられます。朝々、聖書の時間がございまして、聖書を系統的によく教わったことが、たいへん助けになったと思います。日曜学校にも、小さいときから行っていたはずなんですけれども、どうも一週間に一ぺんですからね。それに全然

悪い人というのがあって、そういうかたは、だいたいうちに来ているんです。アメリカにいましても、そういうかわいそうな、気のどくな人たちの顔が忘れられないですね。で、だれかがほんとうにそういう人たちのお友だちにならなければならぬ。だれがそれじゃそういう人たちの友だちになるかといえば、やはり小さいときから、その人たちといっしょに育ったわたしのようなものこそ、お友だちになるべきで、自分ひとりのわがままを追い求めるということが、なにか申しわけないような気がして、人間の生きる権利はいったいどういうことだろうかということを、反省せざるを得なくなったのでございますね。

そんなことからわたしは、アメリカでノーベル平和賞をもらったヘレン・アダムスというかたがいらっしゃいます。このかたは、シカゴで、とくにアメリカに移住した人たちで所を得ないでいた人たちのために、たいへんお尽しになって、第一次大戦中もそういう人たちをお守りになって、ノーベル平和賞をおもらいになったすぐれた婦人ですけれども、そのかたが、シカゴで経営していらっしゃるハル・ハウスという有名なセッツルメントがございます。そこにしばらくおいてもらったりして考えて、それで救世軍の士官になることを決めたわけで、イギリスの救世軍の士官カレッジにはいったんです。

救世軍士官学校で回心

そこで訓練を受けているときに、わたし、全くなんとも心配でたまらなくなったんですよ。伝道のために、あるいは社会に奉仕するために、学校にはいり、救世軍の士官になる決意は一応してみたんですけれども、自分の霊的な貧弱さ、それから伝道の生活の厳粛さというものを考えましたら、自分の任じゃないし、といってあともどりもできない。全くなにか大きなカベに突き当たったような感じがしたことがありましてね、わたしも少しフラフラになって、病気みたいになってしまいまして、しばらく士官カレッジに病舎があるんですね、そこに休ましてもらったんです。

それである静かな晩、ひとりでおりますと、向こうのほうで一番隊の人たちが、たいへん美しい声でお祈りの歌をうたっているんです。キリストはわがものだという歌ですね。それでその歌を聞いておりますときに、わたしの問題というのは、自分の個人的な宗教生活があるんだということ、いろんな問題はありますけれどもね。キリストはわがものだという確固たる信念というか、ほんとうの体験がまだまだ浅いんじゃないか。ほんとうにわたしがキリストこそわがものである。自分のキリストといえる、その確かなものがあるのかしらん。それなくして、こういう学校にいるということは、また伝道とか、キリスト教の名による社会奉仕というのは、全く問題にならないと思いまして、その晩、ほんとうの意味の回心をしたんです。自分の小さいときから、ほかの日本の人たちにくらべて、霊的にどれだけ多くの特権があったかわからないんですよ。そういうものを非常におろそかにしていたということ、それから、自己を主張することが近代人だと思っていたけれども、それは非常にわがままが多かった、利己心が非常に強かった。そういう自分の罪が、しみじみと考えられたわけです。それで、暗いところでベッドからすべり落ちて、ひとりで悔い改めをしました。

わたしはいつもふり返ってみて、自分にしも、クリスチャンとしての生活があるとすれば、そのときから始まっていると思うんです。わたしは、クリスチャンホームの宗教教育は大事だと思うんですが、結局は神とわたし、わたしとキリスト、そういう個人的な体験の上に立っていかなければならないじゃないかしらんということですね。

髪の毛に酒、シガーの匂い

それからイギリスの学校を出て、しばらくイギリスで婦人社会事業のほうに任命を受けまして、そこで働いていたわけですが、いま考えてみれば、イギリスの悪いとこばかり見

その時分のこと、わたしはある晩、夜中に目をさましたら、離れで母が祈っている声が聞えるんです。父がそのとき留守だったと思います。一つ一つのことばは聞かれないとして、実際旧約聖書の中に神とすもうをとるということばがありますね。そういうふうに、実際神さまにすがりついて、力を得ないならばここをどきませんというほど熱烈なお祈りをしているのを聞いたわけですね。そのとき、徹夜をしてたいせつなことと戦っている祈りに深く心を打たれましてね、そのとき自分が悪かったと思いましたよ。それで、こういう人のそばにいながら、自分の不信仰であったこと、それを非常に悲しく思ったんです。またわたしは、自分では祈れないとしても、冷たい心で信者の信仰をみるのでなしに、なにかいまはそれを失っている自分というものを、非常に寂しく思ったのでした。

そういうような時代もございました。そののちに母が亡くなりましたがね。その時代にわたしの反抗しましたことは、中央公論かなにかのアンケートでもって、わたしの父が、ほかのかたがたとごいっしょに書いたものだったと思うんですが、自分の子供たちが、できるならば伝道者になることを希望するというようなことを書いたんですね。それでわたしの友だちの中には、それをなにして毎日のようにわたしをからかったり、悪口を言ったりするんですね。それで、わたしの反抗をあおり立てたような気がするんです。意地になって、わたしは伝道者なんかにならないというようなことを、バカなことですけれども、一四、五のころ考えたこともあるんですね。

自由にあこがれアメリカへ

それから東京女子大にはいりまして、東京女子大を出たんですがね。そして、アメリカに行ったんです。アメリカに行った一つの理由は、わたしはほんとうに自由になりたかったんです。というのは、これは牧師さんをおとうさんに持っていらっしゃるかたがたにはよくわかると思うんですけれども、別に人はそう思っていらっしゃらないでしょうが、なにか自分に、周囲から当然、親のようになるべきだというふうに、特別の期待をかけられているということ、そして、自分はどうしてもそれにはついていかれないんだ、というようなことから、非常にわたしは、親のそばにいることが苦しかったんです。自分として、もう少し親とか救世軍というものを離れて、自分というものを育てもしたい。ほんとうに自分がどこに行くかを探してみたいような気がしたんですね。勉強も一つの理由、そうしなければいかれませんから。

アメリカの大学を出まして、出たときには就職の話もございましたし、いろいろな話もあったんですが、そのときにわたしは、確かにキリストにとらえられたものだということを、いろいろの意味から考えさせられたんですね。それで、親からも離れているものですから、もう少し自由に考えられないこともなかったですけれどもね。それで、あるかたがたは、女で救世軍なんかにはいったらたいへんでしょうと同情したり、もう少し、こういう道もありますからどうでしょう、お手伝いしましょうというような、親切なかたがあったんでございますけれどもね。そういうときに不思議に、「鼻から呼吸をする人に頼るな」というみことばが、わたしの心によみがえってきまして、こういう人たちに相談するのでなく、もっと上からのみことばを聞かなければならぬと思いまして、それからまた、「全世界を得ても、命を失ったらどうするんだ」という句が聖書にありますね。それが、わたしの記憶の中に強くなってまいりまして、そういうふうにして―それにわたしは、アメリカのカレッジのライフが十分に楽しくて、いいことはたくさんあったんですけれども、自分がしあわせであればあるほど、日本の気のどくな人たち―お話をしませんでしたけれども、父についてよく貧民窟に行ったものですから、そういうことや、女中寄宿舎や、婦人ホームをしていないときでも、どうしてもほかにやっても役にたたないような、ぐあいの

で、英語でもって軍の了解を得なければならないものですから、それにはわたし、いくらかアメリカの教育を受けておりますものですから、アメリカ人とのかけあいには役にたつこともあったんじゃないかしらんと思います。

それからなお男女共学が始まりかけているときの視学官といたしまして、あれをいい方向にもっていくために尽させていただきましたし、それから女子大学の昇格ですね。そういうときにもいくらか文部省におりますと、機会がございましてね。させていただいたんじゃないかと思うんですがね。そんなことでたいしたことはできていないですが。

父軍平の思い出

編集部　軍平先生の個人的な思い出を少し……。

山室　だいたい、わたしども小さいときには母任せだったんですね。ほんとうに忙しかったらしいですからね。だからこんなエピソードがあるんです。小さい借家に住んでおりまして、ときどき変わるときがあったんです。母は引越しの手伝いなんかさせない。家のことは任せてもらう、むしろそれを誇っていたんです。父が社会のために忙しいから、家のことなんかで心配させてはいけないということでした。

だからあるとき引越しをしたんですが、どこに引越すか父は知らないんですよ。それで「何々町のこういうところに今晩は帰っていらっしゃい」と言って図を書いてもらって、「よしよし」と言って父は出かけて行ったんです。ところが夜になって帰ってきたんですが、どうしても家が見つからないんですね。仕方がないものですから交番に行って、巡査とだいぶそこら中回ったそうですが、夜中になってやっと見つけて帰って来たというようなこともあるくらいで、子供のことも、家のこともほとんど任せきりだったんですが、そのうちにもっと自分の子供のために尽さなければならないと感じたらしいんですね。それで土曜日の晩は東京にいるかぎり子供といっしょに食事をして、それで夕拝をするということに決めたんです。そのときには、必ずなにかおみやげを買ってくるから、なんでも注文を出しなさいということになりましたが、小さい者はたいへん喜びまして、なんだかリストを作って、こんどはカステラとか、次の週はお大福とか、いろいろ注文を出しました。そうするとよく覚えていまして、だいたい注文に近いものを持って帰ったものです。

そういうアトラクションがあったものですから、土曜日は家族の者もなるべく早く帰ってくるようにしますし、母も少しご馳走をして、それでうちの者がくつろぐことができるようにしておりました。食事をしまして、それから家庭で集会をよくいたしましたがね。それで土曜日に持ってくるおみやげのことを土曜みやげといって、これは救世軍の人たちの間にも評判になったそうです。山室が土曜日にはいつも「忘れてはいかん」と言ってみやげを持って帰ると言って。

これからの救世軍

編集部　いまの救世軍は、どうですか。つまり、社会福祉の面なんか、国家がだんだんどこの国でもやるようになったんですか。

山室　それは確かにそうですが、イギリスあたりに行っても、社会福祉というのは政府がすべてをするということじゃないですね。やはり、いままでやっておりました民間団体とか、宗教団体に対しては十分協力を求めているわけですね。それに救世軍は伝道が主体になっているわけですから、社会事業をやらないでいい時代がきたら、いつでもそちらをしないで、伝道を自分たちの対象とする民衆に対してすればいい。しかし、社会事業をやらなければならない面があるし、ずいぶん協力を求められている点もあるので、福祉国家の国々でも相当いっしょにやっているようですね。

てきたような気がします。学校を出て、いまの二六、七のころです。イギリスにもずいぶん悪い女の人もいますしね。つまり未婚の母ですね。私生児のおかあさんたちの施設にしばらく働いていましたし、わたし、日本人としてひとりで、そういう女の人たちを連れて裁判所に行ったりなにかするようなこともしなければなりませんでしたし、あるいはピカデリーなんていうところがロンドンにありますが、そういうところを、深夜救世軍の婦人士官や婦人警察官と回って歩いたり、それで悪いところを救世軍の士官は木戸ご免で出たりはいったりするものですから、夜中歩いて明け方帰ってきて髪をときますと、シガーの匂いや、お酒の匂いが髪の中にしみているんですね。いま考えてみて、よくもあんなところを通ってきたと思いますね。戦争のずっと前のころから、イギリスには社会保障制度というものが整いつつありましたから、よほど日本とは違った点もありました。

こわかった日本帰国

わたしは日本へ帰ってくるのがほんとうはこわかったんですよ。と申しますのは、山室軍平という人はよく知られておりましたし、そして実際すぐれた人だったと思います。よい仕事をしておられました。そこへ帰ってきて、わたしは全く不肖の子だものですから、いったいどれぐらいの仕事ができるかしらん。むしろ日本でないところで働きたかったんです。そういうわけにいかないから、日本へ帰ってきまして、おぼつかないことをやっている。いまでもそうなんです。両親のことなど考えますと、自分はまだまだ足りないと思うし、いたらないと思います。自分は非常に欠点の多い人間でございますからね。顧みてたいへん申しわけないと思うことが多いんですよ。ずいぶん思い違いをしたり、知恵も浅いものですから、早のみこみでつまらんことをしでかしたり、そういうことばかり多くて、申しわけないと思います。

ですけれども、こんな者でも神さまが生かして命を与えていてくださるならば、せいいっぱい毎日お導きを求めながら、これ以上あやまちをしでかして、そして神の国のマイナスになるようなことをしないようにしたいと思っています。

編集部　日本にお帰りになってから、すぐ救世軍の士官としてお働きになっているわけですか。

山室　そうですね。救世軍の士官学校を教えてまいりました。それからまた婦人と子供の社会事業の責任をもちました。それで、なんだかいろんなことをやったこともありますが、そういう自分のお世話したお子さんなどもよく覚えていて、いまでも会いますと、いろいろ思い出話をしますと、「そんなことをしましたかね」と言うんですけれども。児童のホームにいながら、夜になるといなくなって遊びに行くんですね。そういう困った子供がいま落ち着いていまして、ずいぶんあのときは申しわけありませんでした。叱られるかと思ったら、町でその子を見出して、熱いうどんを食べさしたそうです。そのうどんが非常においしかったそうです。そんなお話をしまして、りっぱな奥さんになっている人もいますしね。だからたいしたことはできなくても、わたしとしてできるだけのことをやっていくというようなことですね。

編集部　そうするとずっと救世軍のほうにいらっしゃったんですか。

山室　戦争のあと、文部省によばれましてね。そのときは救世軍が教団といっしょであって、まだ新しいスタートをしていないときだったものですから、「それじゃしばらくお手伝いに行きましょうか」と言って、お手伝いにあがって長くなっちゃって六、七年、文部省の視学官、社会教育施設課長というのをやりました。これは婦人だけではないですね。社会教育施設課というのは、全国の図書館、公民館、博物館、いろいろそういう施設ですね。わたし、図書が好きだものですから、施設課長をしておりましたときに、図書館法というのを出しました。また、なにしろ占領下

かぎり、苦悩の重量感から脱することはできなかったのである。わたしは、大学を卒業する日までと思いつつ、親に愛されない子としての自らの嘆きと兄弟のそれを忍び続けた。キリストの愛と救いに対する単純な信仰が、逆境に堪える力となったのであると思う。

　やがて迎えた卒業の日、その日をわたしは主が定めたもうた解放のときと信じて、ふるさとを遠く離れた。働きつつ、あるいは学びつつ、わたしは人間の本来の生き方をもとめ続けた。模索と求道の七年の歳月は、深い人生苦とともに、限りない神の恩寵を徹底的に体験させてくれたのである。

　「父なき子は育たない」とペスタロッチが言ったように、わたしは父に深く愛されることを願いつつ、ついに愛されることなく精神的な不具者になってしまったのである。神はそのような者を、七年の歳月を費していやしたもうたのである。神はいかにして、愛に飢え渇いた孤愁の魂を愛したもうたか。さらに、いかにして神を愛する者にまで造りかえてくださったか。仕事を変え、所を変えて行く先先で、すぐれたキリスト者が、わたしを待っていてくれたのである。見えざるバトンを受けついでもいるかのように、信仰の人が友として、あるいは師として現われたのである。

　最後に？　神が出会いを許したもうたキリスト者、その人の名はミス・アケンバックという。宣教師として母校に来られた先生との交わりを与えられたのは、四年前のことであった。片言の英語で始まった交わりは、あるときは、ふたりだけで食卓を囲み、またあるときは聖書をめくりつつ、人生の意味と目的とを語り、さらに恩寵のたしかさを語りあうという、深いものに進められていった。心の中に、よみがえるような悲しみと苦しみを覚える折ふし、わたしは先生のもとに足しげく通った。先生はいつも優しく慰めてくださり、強く励ましてくださった。先生の笑顔の中の輝きは、わたしの心の中にふしぎな火をともした。愛の対話をなし得る親なき子にとって、先生は心の母となった。病めるわが子を胸に抱いて離さぬ母のように、先生は、心病めるかたわなわたしを、キリストの愛に満ちた心の中に堅く抱いてくださったのである。先生のもとで、わたしは生かされる喜びを深く味わった。そして、神の愛の深さとたしかさを体験させられたのである。こまやかに、そして深く愛された思い出は、あまりに豊かで書きつくせない。

　子として、親に愛されることを悲しくも断念した者に、ミス・アケンバックは、神により神の子として愛されることの深い喜びを与えてくださったのである。

　いま、わたしの心の中には、肉身の親に愛されなかった苦痛も悲哀ももはやない。ただ神に愛されているたしかな喜びと、感謝だけがあふれているのである。

　「見よ、神の幕屋が人とともにあり、神が人とともに住み、人は神の民となり、神自ら人とともにいまして、人の目から涙を全くぬぐいとってくださる。もはや、死もなく、悲しみも叫びも痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである」。

　キリストに従った偉大な人たちを通して、わたしにそそがれた神の愛は、わたしの苦悩に勝利したのである。わたしはただひたすらに神を愛したい。そのために、残りの生涯のすべての日が恩寵の証しのために、十全に用いられるように日々祈り願っている。

　「神は愛である。神はそのひとり子を世につかわしてそれによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛してくださって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、み子をおつかわしになった。ここに愛がある」。

　神を愛する者になったのは、たしかにまず神に愛されたからなのである。

祈り

　きわみまで愛したもう神に栄光が限りなくありますように。主の忠実なしもべとして、しんしにしかもけんそんに、不具な者を愛してくださった気高い人々の上に、祝福が豊かにありますように。小さきしもべの生涯が、全く潔められ、みたまの住みたもう宮となって、恩寵の証しをたてることができますように。

（『月刊キリスト』愛読者）

読者の証し

親に愛されぬ子として



中沢三千子

満三〇才の誕生日をま近に控えて、歩み来たりし方を顧みるとき、まことに感慨無量である。三〇年の才月の前半はなにごともなく過ぎたのであるが、その後半は執拗な苦悩と信仰との戦いなのである。

わたしが自らの生を自覚したころ、同時に一つの悩みをも自覚した。それは親に愛されない子としての悩みであった。親と名のつくすべての人間にとって、子はかけがえのないいとしい存在であるにちがいない。しかし、わたしの親は四人の子を持ちながら、子を平等に愛することをしなかったのである。そのような親の偏愛と無知に、徹底的に反抗した苦痛と汚辱の日、それがわたしの青春の日であった。親の愛――それは愛の名に値しないのだが――が狂っていたがゆえに、わたしの青春は灰色に塗りつぶされている。

愛の対話のない人間関係ほどに苦痛でやりきれないものはない。ましてそれが肉身という間がらになると、さらにさらに堪えがたいものになる。親であり、子でありながら、わたしは自分の父とよぶ人間との心からの対話を知らない。父はわたしの苦悩に最も深い関係を持つ者でありながら、わたしの苦悩には最も縁遠い存在であった。一つ屋根の下に、心からの対話をなしに過ごさねばならない親と子、そんな親子が世界のどこにいるだろうか。わたしは、父がなぜ長子以外の三人の子供を愛さなかったのか、今もなおその理由を知らない。もう知りたいとも思わない。

生き地獄のような家の中で、小さな胸の中に巣くっていったものは、親への呪咀とさらにわたしの生そのものへの懐疑であった。自分はなぜ生きなければならないのか。愛されない子は、自らの存在の意味をもとめて苦しむのである。わたしは、あの古代ギリシャの厭世思想を深く愛するようになってしまった。「人間にとって最もよいことはこの世に生まれてこないこと、その次によいことはできるだけ早く世を去ること。」幾度か自らの存在を葬ろうとする誘惑にも会った。けれども、ふしぎなことに、そのような苦悶の中で、わたしの心の中には「救い」を求めるひそかな願いが起こり始めたのである。そして、対象のわからない祈りを心の中に覚えたのは、そのころのことであった。

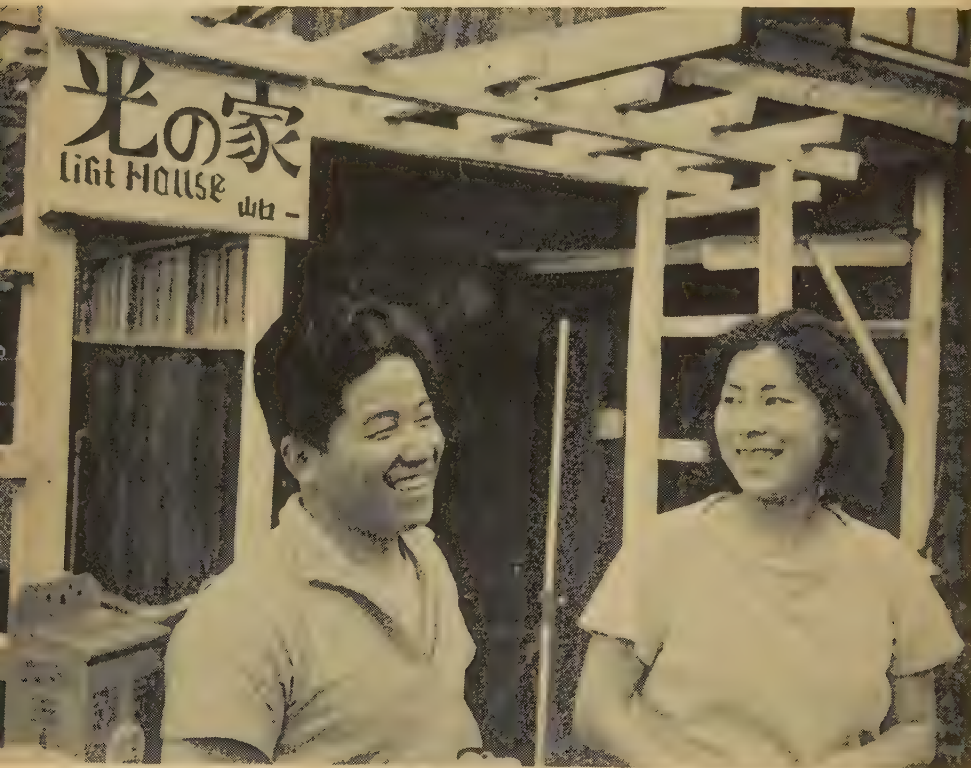
それ以来、ふしぎな出来事――それは奇蹟とよび得るのかもしれない――の連続であった。わたしはだれに誘われるともなくキリストの教会の門をはいった。今にして思えば、あの日こそ、みたまなるキリストがご自身の永遠の臨在を病める魂にお示しになったのである。それは、今からちょうど一四年前のことであった。いささかのつまずきを覚えることもなく、わたしは、ぐいぐいと身をひかれるように、聖書の示す救いの世界に導き入れられていった。一六才の少女は毎日早朝のミサに行った。

やがて、プロテスタントの学園に学ぶようになり、わたしはプロテスタントの信仰を告白した。それは一九才の年のことであった。「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」との主のみことばのように、自分の苦悩の和らげられるのをたしかに感じた。けれども、同時に苦しみ悩んでいる兄弟の姿を見ると、新たな悩みに迫られる思いがしたのである。信仰を告白したのちも、家にいる

<信仰に生きる7>

ここに"夢の家"あり

―薄幸の子らと生きるタクシー運転手―



丘の上のあの家は……

その辺になると、めっきりいなかめいて、舗装道路もなんとなくそそけた感じ──日光街道が埼玉県にはいるかはいらぬかのうちに左手に折れ、バスの停留所三つも行くと、そういうことになる。

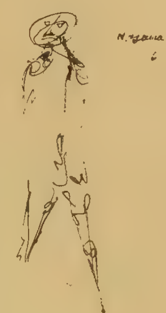
「この辺はなんという所ですか?」「大和町ですよ」「東京都ですか」「いや埼玉県で」「あ、もう埼玉県ですか」「さようで、北足立郡ですナ」

道はたに一軒たっている荒物屋の主人に聞くと、たいくつそうに答えた。

「ふん、そうですか、町とはいえ、てんでいなかですナ」などと、ひとりごとを言いながら、さらに上り坂の道をぶらぶら行くと、急に目の前が開けて、初夏の陽がさんさんと降りそそぐ広々とした麦畑。

右側の道端に電柱が一本、そして、ほぼ目の高さに、横長の白ペンキぬりの方向板が打ちつけてある。明るい太陽と麦畑と、そしてふとカリフォルニアあたりにきたような感じがするのは、そのしみるような白さの板に、これはしゃれた横文字が墨黒々と書かれているからだ。いわく── TOKYO LIGHT HOUSE ORPHANAGE ──すなわち、「東京光の家孤児院」というわけか

宇宙時代



　少年時代、天文きちがいといわれたことのあるわたしは、ガガーリン氏の壮挙を祝することと人後におちないつもりである。しかし、残念なことには、近ごろのジャーナリズムの「ついに宇宙征服」などということばには、どうにもついていきかねている。というのは、宇宙旅行の規模は、わたしどもの想像をはるかに越えるもののようだからである。

　今後、地球の引力圏脱出の速度一一・二キロをもって太陽系の周辺にある冥王星まで往復するとすれば、三〇数年かかることになるが三〇年も宇宙船内に閉じこもる志願者があるだろうか。それは、終身刑で地下に幽閉されるより、はるかに苛酷ではなかろうか。次に太陽系を脱出して、秒速四二キロ以上でいちばん近い四光年の恒星まで往復すれば、なんと五万数年かかることになる。さらに光の速度、一秒に三〇万キロを人間が持つことは、現在はもちろん将来もできないそうであるが、かりにそれで、いちばん遠いとされている五〇億光年さきの星雲まで行けば、どうなるであろうか。考古学者のいう人類の歴史を、かりに五〇万年とすれば、それを二万倍もしなければ帰って来られない勘定になる。宇宙征服などということは、少なくともそのへんまで考えてから言ってもらいたいものである。それは小学生でもできる計算なのだから。

　もうすこし計算してみると、こうなる。北海道のはて、稚内から鹿児島までの鉄道の長さが、だいたい三千キロであるが、それを先の五〇億光年にあてはめると、一光年はわずか〇・六ミリとなる。いっぽう太陽から冥王星までの距離を、光速度で二時間とみれば、この〇・六ミリの中に太陽系が二千二百も並べられる。こうしてみると、軽卒に人間の偉大さを自讃することは、つつしむべきであることがわかる。すなわち、たかが地球のまわりを回ったり、金星に近づいたりしたくらいで優越を誇ったり、一ミクロンにも満たない程度先を越されたということが、大国の威信にかかわるといってあわてたりするのは、みっともないはなしである。もちろん、こういうことをわたしが書いたからといって、科学の進歩を冷笑しているようにとられては困る。ただ人間というものは、優秀な頭脳の持ち主でも、小学生にも劣る場合があることを言いたいだけのことである。「あに、精神年令一二才は、日本人のみならんや」。ねがわくは、宇宙船が三百年ほど旅して帰ったときに「もといた町も国もなく」といったような浦島太郎氏を作らぬように、平和のために、気を確かにしていたいものである。人の心は宇宙をも含むことができる地上にへばりついている小さな考えを捨てようではないか、と言い得るところの宇宙を、わが胸におさめたものの精神年令は、控え目にして五〇億年と言おうか、雄大きわまりなし。

　次に言いたいことはこれである「神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない」(伝道の書三・一一)すなわち、人間が宇宙をふみ荒しても、神さまはみ当たらないだろう。そうしてみると天文学者になりそこねて、牧師にされたことは喜びである。宇宙のはてまで行かなくても宇宙の創造主の愛、真理が身近かに迫っていることを知ったからである。(申命記三〇・一三)

　最後に右の計算の検算は、及第した天文学者にお願い申し上げたい。

（高戸竹二・茅ケ崎恵泉教会牧師）



（整頓された本が子供たちを待っている）

家具として目につく。女の子がふたり、それを見ていた。

「とにかく、にわか作りですからね。お金ができたら、その分だけ少しずつ、つぎ足して建てていったもんですから、けっきょくこんな妙な家になったわけですよ」

なるほど、妙と言えばこんな妙な家はない。夏だけ利用される、安手の山のハウスを想像すればいちばんてっとり早い。船室に通じるようなせまい階段を昇ると、ちょうど、さっきの「読書室」の上、六畳間が、院長さん夫婦のへやだ。

六畳間といえば聞こえはいいが、これがまた山小屋同然。もちろん家具などはひとつもありはしないし、なにより天井が屋根の形に斜めになっている。なんのことはない西洋で言う屋根裏べやなのだ。板壁をへだてて、隣りが女の子の小べや、ここも天井が斜めに流れていることは同じ。

通路にせよ、階段にせよ、すべてが体いっぱいのこじんまりしたまとまりを見せていて、しかも、お金ができたたびのつぎ足し建築のせいか、各へやがそれぞれ独立している。同じ二階でも、ちょうど階下の「教室」の上になる二へやは、壁で一枚へだてられているだけでありながら全然離れた別の階段を昇らなければならない。それが、実際はとてもたのしい。せまい通路や階段をあちこちたどると、いつのまにか、遊園地の迷路を歩いているようなわくわくした気持ちになる。なるほど、これだけでも、ここは〝夢の家〟なのかもしれない。

だが、全部で八つのたのしいへやを持つこの家は、けっしてその建てかたや構造のおもしろさで〝夢の家〟なのではない。ここには、この若い〝院長さん〟夫婦の生きる願い、愛と善意が、いっさいこめられているからだ。

入口の扉を開けると、目の前の壁にはられていて、すぐ読めるようになっているマジックインク書きの「光の家規則」は、そのことを示しているであろう。

「ここは施設ではありません。大型の家庭です。皆で助け合い、明るい生き方をみつけるためにできた家です。

1、両親のない子供　2、保護者のない児童　3、育てられない子供　4、施設・病院を出ても行く先のない人。

三才から二一才までの人が利用できます。

（ただし、事情あればこの限りでない）

この家を利用する人の守ることがら

1、自分がしてほしいことを他の人にする

2、すべての人に親切に、自分のことを自分でする……」

この一念で育つ

「夢の家っていうのはね。子供たちにとってもそうであるようにということはもちろんですが、まあ、なんて言ったらいいですか、わたしら夫婦の夢がこもった家ということなんです、ほんとうは……」

若い院長さん、ちょっぴり笑って、かたわらの奥さんをふりかえった。

「さいわい、これが助けてくれますから、わたし自身の夢が、実を結んだというわけで」

それならば、この人の〝夢〟とはなんであったのだろう。それはどのようにして育ったのだろう。

「わたし自身が、親がないままで成長しましたから……」

そう言うこの人、院長さんならぬ山口一（はじめ）さ

その白い板が示す通りに、畑のなかの小道にはいると、もう完全に別世界の空気だ。波打つ麦、その黄ばみはじめた大麦小麦のうれた匂い、土の香り、どこにいるのか、そっちこっちで無数のひばりが鳴きかわす声――「空は青空よい天気、みんな元気に歩きましょう。きょうは遠足うれしいな……」、そんな古い小学唱歌が思い出されるような風景だ。さっき歩いてきたアスファルト道を、遠くダンプカーやオートバイが、ときどきすさまじいひびきで走って行くのが、ふと都会の近いことを思わせるくらいで、あとはどこまでものどかな田園の昼下がり――

畑のなかの小道を二つばかり曲ると、すぐに行き当たるのが、まばらに立ち並んだ家で、どれもキャンプ場のバンガローといった感じだ。雑草の茂る土地が広くて、家と家との間が離れていて、ゆとりがありすぎるせいかもしれない。新開地のような道を進めば、そんな数軒の家のなかから、頭に十字架をいただいた、山小屋のような感じの一軒はすぐ見つけ出せる。そこにも小さな白い木札――

LIGHT HOUSE

――ごめんくださァーい

あんまり小屋のなか、いや家のなかがしんとしているので、大きな声で呼んだら、バタバタッと足音がして、一五、六の女の子が顔を出して、東北弁なのだろうか、ひどく聞きとりにくいことばで、

「あ、そごあ裏口なもす、玄関ごっちだじゃい、だれ？　今呼んでくる」

すばやくそう言うと、またバダバタッと姿を消して、奥のほうで「おじさまァ」と呼ぶその女の子の声が聞こえてきた。

ここは「夢の家」

「いま収容しているのは、収容してるなんて言うのは変ですが、一二才の女の子、一六才の女の子、一九才の女の子、二〇才の女の子、一八才の男の子の五人と、わたしども親子三人、これが全家族です。が、タクシー運転手の収入では、このくらいがせいいっぱいってとこですね」

ポロシャツ姿で、そう言っては失礼かもしれないが、フランキーなんとかいう喜劇俳優にどこか似たようなたのしさと、屈託のなさであらわれた院長先生（？）は雑誌記者などの訪問を受けて、これまた喜劇よろしく大いにテレるのだった。

――これが孤児院ですか、そうですかねえ、どうもピンときませんね、なんだかこう、ひどくたのしい家みたいな……

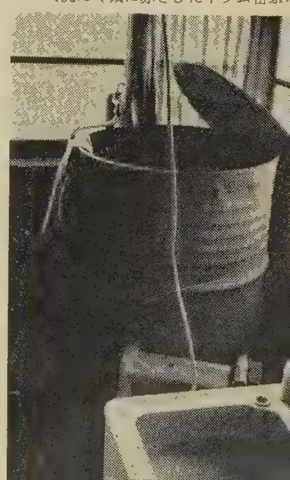
まことに、ハウスとしゃれて呼ぶにふさわしい白い小さなアーチをくぐり、熊の子そっくりのかわいい黒犬に迎えられて、入口の扉を開いた最初の印象を言ったら、この人、もうすっかりよろこんで、

「そ、そ、そうなんです。わたしらだって孤児院だなんて言いやしません。第一、そうも思っちゃいないんですよ。ただの家、いやみんないっしょに暮すたのしい家、わたしらの夢の家ですナ」

まるで、鼻唄でも出そうなたのしさだ。

この〝夢の家〟の広さは約四〇坪、二階建で、入口をはいってすぐ、「教室」と書いた紙片がはってある一〇畳のへやが、この家の中心だ。奥隣りは、板の間で五坪ばかり、「読書室」と書いた紙片が見える。そこには、児童図書が二〇〇冊ほどと、オルガンが一台。その左隣りの奥まった所が、勝手と風呂場と、小さな居間。その居間などは、もう天井が低くて、まるで小さな小屋にでもはいったような感じだ。テレビが一台、唯一の家具らしい

（洗たく機に赤さびたドラム缶ぶ





[illegible]じめ[illegible]

[illegible]

わけでもなし、オレのどこが不服や…∨

[illegible]

[illegible]オレはオレの腕で∨

山口さんは、親しかった[illegible]と、小さな[illegible]

[illegible]会社を作った。青年の血気にはやる商[illegible]

[illegible]

[illegible]るくらいになった[illegible]

「[illegible]を通ってやるからな」[illegible]

[illegible]、ハンドルさ[illegible]かに[illegible]

[illegible]

悲しみをわけ合って

[illegible]

の成功をおさめてしまえば、[illegible]

[illegible]ほどのことでなかった[illegible]

[illegible]

んは、大正一五年一一月、大阪に生まれた。当年三六才の、腕っ節の強い働き盛りだ。陽気で明るいこのおじさまには、しかし生まれたときから母がなかった。父は父で、芸能人であったせいか、しばしば不在で、いずれは、ゆくえも知れずなりにけるかな、というわけだった。だから、山口さんは、生まれ落ちたそのときから、他人の手に預けられて育ったのだ。

生まれ落ちたということばは、まさしく山口さんの場合に使われて生きてくる。山口さんは、まさに生まれ落ちたのだ。すなわち、生まれたそのときから、自分のいるべき場所を持たない人間、人の子であれば、だれもがそこにいてあたたまるべき場所から落ちてしまった人間、はじき出された人間、したがって、どこにも安心して休む所を持たない人間――それが山口さんだった。

そのへんのことを、山口さん自身はけっして多くを語らない。一身同体なのだから当然だろうが、奥さんが代弁してくれるところによれば、小学校時代さえ、山口さんにはあまり楽しい思い出はないらしい。奉公に出たこと、苦しまぎれに、その奉公先をとび出したこと――などという。

小学校時代から、独力で生きていかなければならない者の人生哲学――それは「なにくそ！」の一語だった。痛めつけられれば痛めつけられるほど、逆にたたかう勇気が出た。

中学には、大工の弟子をつとめながら通った。親方が、仕事の上できびしいだけではなかった。ひとつひとつの仕打ちが、冷たいとげを含んでいた。

「これ持って、はようメシ食ってこい」

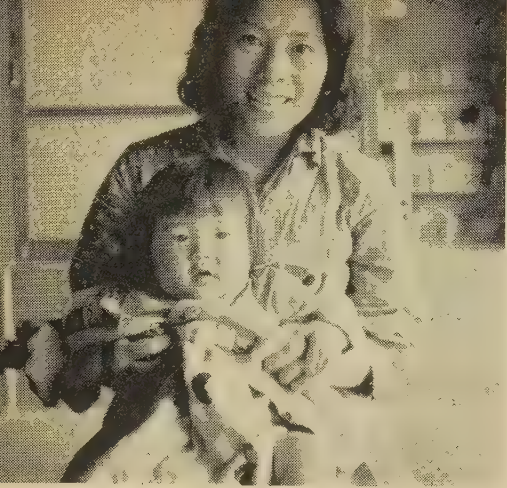
ぽんと出されたバラ銭を握ると、空腹の山口少年は、一散に食堂に向かって走る。だが、そのころの大衆食堂は、そろそろ大東亜戦争のあおりで、だれでもいつでも自由にというわけにはいかなかった。食堂前は、その限られた食事時間をわがものにしようという人々が長蛇の列をなしていた。ともかく、並んでいれば食べることはできるのだが、親方からきびしく定められた時間があった。つまり、その定められた時間内でなら食べてもよいという意味だった。だが、大衆食堂では、絶対にそれだけの時間では食べることはおろか、席をとることさえできないということを、なによりも親方自身が知っているのだった。それだからこそ、わざと金をあたえもしたのだ。

並んでいるうちに時間がきて、けっきょく空腹のまま帰る山口少年にとって、黙ってまた続けなければならない仕事がどんなにつらかったことだろう……中学卒業とともに家出したのも、あの「なにくそ！」のあらわれだった。

あとは、おきまりの戦争、一九年一月に出征、まもなく捕虜の身をサイパンに送り、二二年一〇月に内地に復員した。一八才前後の多感な時代を、山口さんは兵隊としてすごしはしたが、内部にひそむあの闘志は、けっして消えたわけではなかった。内地に帰っても浮世の風はいよいよ冷たい。

当時、少年警察官をつとめると、その後、奨学金を受けられる制度があった。別にそれを当てにしていたわけではないが、山口さんはやがて、その少年警察官からいわゆる官費依託学生として大阪外国語大学に入学することになった。英語は、サイパンでの捕虜生活中、アメリカ人との接触で興味を持っていた。多少は耳で覚えたそれを、しっかりと身につけるには絶好の機会だった。山口さんにしては、はじめて安心して学べる最初にして最後の恵まれた期間だった。

こうして、二五年から二九年までの四年間を、学生としてみっちり学んだ山口さんは、さて就職という段階になって、ハタと行きづまってしまった。すでに警察官はやめていたから、新しい職場をさがすといえば、どこも就職試験、そこまではいいとしても、そのあとに控えているのが身許調査――だいじょうぶと確信している最後の段階で、山口さんは



（わが子だけの母ではいられませんと、若きおくさま）

に、奥さんとしても文句のあろうはずがなかった。

「こういう子たちが、一度社会に出されると、行く所がないんですねえ。わたしたちは、だから施設出身で職のない子を世話することを最初の目的にしたんです。ですが、だんだんこういうような子供たちのいこいの場を持とうというささやかな願いになったんです」

そう山口さんは言う。だが、その願いは美しくあればあるだけ、人々には受け入れられなかった。新宿淀橋のアパートにいたときのことだ。結核第三期の子供がいたり、施設帰りの子がいるこの山口さん一家に、近所から非難があがった。淀橋消防署裏にみつかった小さな土地を土台に、ささやかなホーム建設の夢も、実現という段階で、横ヤリがはいった。不良のたまり場はまっぴらごめんというのだ。

おれたちは、どこへ行ってもこれなんだ……どこかに、おれたちひとりぐらい安心できる場所はないのかなあ……

追われゆく者の悲しみは深かった。

はてしなく夢は輝く

三四年一〇月二五日、埼玉県北足立郡大和町白子一九五五番地に、リビングキッチンそのままの、畳三枚がやっとはいる小さな木造バラックが完成したとき、山口さんは奥さんとともに思わずバンザイを叫んでいた。

新宿以来一ヵ年、ついに最初の夢は実を結んだのだ。ここにいたるまでの紆余曲折は並たいていではなかった。上板橋に、人の好意で借り受けた土地が、思いがけず都の公有地だったり、やっとのことで建てたバラックが、あっというまに台風で一掃されたり……たまたま、山口さんの孤軍奮闘ぶりが、某新聞の都内版に小さく出たおかげで、それを読んで感動した大和タクシー社長新倉文次郎氏が、自社のある営業所を新築したさいにでた古材木の無償提供を申し出てくれた。その上、社長みずから土地を求めて、これの無期限貸与という二重の好意——感激した山口さんは、勤務のあいまに古材を使っての建築にはげんだ。中学時代、大工の弟子で苦しんだ経験が役に立った。こうして、この日のめでたい完成となったわけだが、さらに翌三五年二月には、この苦心談を聞いた大阪のある建築屋さんが、大工数名を上京させて、残っていた古材を使って、現在の一〇畳の教室と、入口にトイレまでを作ってくれた。

「この家は、オレたち作ったんだなァ……」

感慨深げにでき上がりをながめて帰ったひとりの大工さんは、体からイレズミをとるとなにを感じたか、ヤクザの足を洗ってしまった。感激した建築屋の主人は、再度その人たちを送って、本年三月、奥隣りに読書室などを建て増ししてくれた

「とにかく、三年間でこれだけできるとは思わなかったですねえ……」

山口さんは、大和町一帯を遠く見おろす丘の上の、四〇坪二階建てのこの家をながめながらしみじみとそう言う。かたわらで奥さんがにっこり、じつに晴れやかな顔で立つ。

わざとふれなかったが、山口さんがキリスト者になったのは、二三年サイハンから復員して虚脱状態にあったとき、二三才だった。奥さんは生まれたときからのクリスチャンホーム。山口さんよりは信仰歴は長い。この"歩

た。大阪市教育委員会にそっくり寄付したのだ。あの自家用車までをそうしたのだった。

意地を張って事業に打ちこんだものの、しかし、ほんとうにやりたかったことは、

「人に相手にされないような仕事です。世間から相手にされないような者のためにね。自分が親がないということだけでいつも世間からポンと放り出されたから……」

ちょっぴり洩らした胸のうちが、全資産寄付の美談とともに、朝日新聞に載った。山口さんはすっかりテレた。が、それは山口さん自身の深い悲しみにふれた願いだった。

新聞記事になってから数日して、愛らしい女文字の封書が山口さんの手もとに舞いこんだ。浜松市の一病院で療養中の、うら若い女性からだった。新聞拝見し、たいへん感激、ベッドにいてはなにもできはしなくても、あなたさまのご計画なんとかお手伝いできるなら、さいわいこの上もございません。――そういうことが書いてあった。

「うわあ、ありがてえ！」、そうとび上がったわけではない。書かれた文字はまだ幼いし、よくありがちの少女の感激、山口さんはそんな程度に考えた。が、いつのまにか、そんな程度の手紙のやりとりが二度、三度重なるうちに、山口さんも自分の心にあるプランを序序に打ちあけるようになっていた。こうして、二年ばかりの手紙のやりとりが続いた。

「ひとりでやるつもりだったんですがねェ」――山口さんは、頭をかいて苦笑するが、すでにもうそんなつもりは崩れてしまっていた。山口さんの胸には、〝ふたり〟で築く新しい夢が明るくともりはじめていたのだ。

二二年の春、山口さんは単身上京した。〝相手にされないような者を相手にする仕事〟を胸に、さし当たって、東京に一軒残してあった自分の美容院におちついた。ところが、そこもついに安住の場ではなかった。弱いものにつけこむ悪人は、どこへ行ってもいるものだ。ただ一軒残してあったその店が、知らないまに売りとばされていた。

それならそれで別の生きかたがある……山口さんを起こすものは、いつでもどたん場に際してのしぶとい闘志である。

――悪どいたくらみをもって売りとばされたその美容院の向かいが、都内三大タクシー会社のひとつ大和タクシーの板橋営業所だった。上京してからの山口さんが、ひしひしと痛感したことはなんであったろう。どこの会社へ行っても、身許保証人がないため、最後のところでソデをふられるというにがい体験だった。ところが、タクシー運転手という職業は、一万円の保証金を積めば、身許保証がなくても就職できるという利点があった。これよりほかに生きる道はなかった。やるからにはどこまでも……そんな覚悟で大和タクシーに入社、はじめてハンドルをにぎった最初の客がこうだった――

「お客さん、おかしいなァ、さっきからもう五、六ぺんですぜ、あっちこっち……」

「いや、運転手さん、こんどはほんと、たしかまちがいないんだがなあ……」

一五、六の少年、どうも素ぶりがおかしい。やっと目的地というので降ろして、かなりのメーター金額を請求すると、やにわに逃げ出した。新米タクシー一日目の黒星とあっては山口さんも必死、つかまえて事情をきくと、それが施設を出たばかりの子供だった。もとの勤め先にもどったところ、親方にあっさりことわられ、やむなく、友人のおぼろげな住所をたよりにきたのだという……。ほかにたよるところはない。親も兄弟も……。

「そうかァ、きみも。おんなじだねえ…」

少年を黙ってつれて帰ったのがはじまり、こういう境遇の子供にはじっとしていられなかった。あちこち歩いては就職の世話をした。もとの職場主に、自分が保証人になるからと懇願してもみた。

三三年八月には、浜松のかの女性が退院して上京した。すでに、胸から胸への話はついていた。ほどなく結婚、山口さんのすること

現代のカルテ

アイヒマン裁判

もはや戦後ではない、と叫ばれてからすでに久しい。しかし、まだ第二次大戦のあとしまつが、事務的にも、道義的にもすんでいない部分が多く残っている。

中国人を日本に連行して、強制労働をさせ七千人を殺した「中国人俘虜殉難事件」もその一つ、今度のアイヒマン裁判もそれである。今次大戦の傷跡の深さをしみじみと思わずにはいられない。

敗戦の痛手から立ち直って、めざましい経済的繁栄の中にある西独や日本に対して、こうした暗い過去が指摘されるのは、ロング・ヒットを打って三塁に達したバッターが、審判から一塁をふんでこなかったことを指摘されたときのようなものでもあろうか。

ナチの行なった六百万人にのぼるユダヤ人殺害の詳細から、アイヒマン逮捕のいきさつに至るまでは、すでに今日広く知られているが、ユダヤ人とほとんど関係のない日本人にとっては、ナチと同盟を結んだことにうしろ暗さを感じても、直接ユダヤ人迫害に加担した責任を自覚する人は少ない。

しかし、アイヒマンが、ナチの幹部として辣腕をふるっていたころ、日本の言論界にも、鬼畜米英の宣伝と重複して、反ユダヤ主義の主張が大手をふって横行していたことを忘れるわけにはいかない。

「米国的平和主義とは何か〈中略〉一つは基督教を通したユダヤ思想であり、他はアングロサクソンの民族的経験である。ユダヤの民族神エホバは嫉妬の神　憎悪の神　復讐の神　鏖殺の神であった。



〈中略〉ユダヤ的世界観に於ては民族保存・異民族の鏖殺・殲滅戦・エホバの命令・戦争嫌悪・永久平和の六つは不可分の一体として感ぜられた。〈中略〉右のユダヤ的戦争平和観はアングロサクソンの民族的経験によって更に深められ、彼等が米大陸に移住し、インディアン鏖殺の上に米合衆国を建設するに至り、牢固として抜くべからざる民族的信念となった。彼等の平和は異民族の鏖殺を前提とする。〈中略〉我の正面の敵は米国的平和主義そのものである。」(『改造』昭和一八年五月号・松下正寿「米国的文明に対する闘争」)

支配者は国民の不満が自分のほうに向かうのを恐れて、憎悪の対象を国民に与える。キリスト教徒はネロ皇帝によって、ユダヤ人はヒットラーによって、米英人は東条軍閥によって人々の憎悪の対象にえらばれた。

支配者と、これに追従する人たちによって憎悪すべきものの罪悪が宣伝される。それは常に中傷と曲解に満ちたものであり、国民の無知と偏見と狂信とが、さらにその憎悪を助成していった。こうして人々は、本来憎悪する必要のない人を憎悪し、殺す必要のない人を殺してきた。それは人間の歴史の中の最も不幸な部分を構成する

アイヒマンは、いま裁判にかけられている。しかし、アイヒマンを生み出したその背景はまだ清算されていない。それを清算していくものは、裁判ではなく、ひとりひとりの英知と勇気のみである。

旧約聖書の神を、異民族皆殺しの神と断定して反ユダヤ主義を宣伝した。その粗雑な思考方式が、いまの日本にまだ残ってはいないだろうか、中傷と曲解に基づいて、特定の思想を罪悪視する風潮は清算されたであろうか。わたしたちは、第二のアイヒマンをわたしたちの中から出してはならないのである。

（安藤　肇・保田教会牧師）



（この丘に花さき、〃夢の家〃はきょうもほがらか）

の家〃実現にいたるたたかいの背後には、その隠れた信仰の力が……とおふたりにおうかがいすると、「それは、もう……」と異口同音、当たりまえといった感じ。子供の指導は、もっぱら福音書の話だそうだ。なるほど、この家の屋根の上には、二つも白い十字架がついている。入居者いっさい無料もそのゆえか……

だが、ふたりとも、いわゆるクリスチャンはきらいと公言するほどざっくばらんで人間的。昭和一〇年生まれという奥さんがふるっている。

「同情なんてことはできはしません。よくわが子同様にめんどうみるなんて言いますけど、どんなエビス顔の慈善家だって、わが子同様なんてことはないです、ぜったい。だって、きのうまで他人だった子が、急にきょうわが子同様なんて……でも、そうしなければならないんですけどね。たいへんなんですよ」

奥さんの名はひとみさん、名前通りに明かるい。結婚以来、ふたりの生活なんてものはないと語る山口さんは、このごろは少しおとなになって、めったなことはしませんがと、自分の背広でもなんでも人にどんどんくれてしまったり、かわいそうとみればやたらだれでもつれてくる愛妻の純真さを、苦笑とともに話してくださる。去年生まれたという女のお子さんの名がアンネちゃん。おめずらしいと言ったら、ちょうど『アンネの日記』読んでいて、わたし感動したもんで……と奥さん、キラキラとひとみを輝かせて、まことに美しい。「これだから、こんなことも女の身で続くのでしょう」とは山口さんのよきダンナぶりである。

―お手紙のやりとりで結婚にいたったそうですが、そのころご主人からの手紙はちょいちょいきましたか？

「ええ、二日か三日に一ぺんはかならず」

―そういう奥さまは、毎日ですか

「ええ、まあ、そうです」

まことにあけすけで気持ちがいい。どんなことを書きましたかと言ったら、さすがに笑って、ぽっとほおをそめた。

午後三時すぎになると、近隣の小中学生がこの家にワイワイと押しよせる。〃光の家学園〃の生徒だ。週に三日、山口さんが児童の予習復習の面倒をみる無料開設の学習塾だ。小中学生が終われば高校生の時間もある。

この家の住人である一九と二〇才のお姉さんは、都内にお勤めに出ているし、一八才のA君は今年キリスト教主義の大学にはいった。

一日おき勤務の山口さんも、児童の勉強のほかに、大和町青少年補導委員・少年保護司、常時五、六人はいるこの家の子たちの世話など、この上なく多忙だ。さいわい体は丈夫、基本給八千円のタクシー運転手ではたいしたことはできないが、おふたりの夢は、鉄筋コンクリート三階建ての、ほんとうの〃夢の家〃を作ることだという。

ここには、貧しいながら夢がある。東京から三〇分。こんなところがあったのかとだれもが驚くだろう。美しい丘の上に、夢の家はたしかに存在する。一度行ってみるとよい。

信ずることは生きること、ここには美辞麗句を排して、まともに生きることを身にひき受けた人の姿がある。

（撮影　児島昭雄）

福原　そういう借金は、ただ生活費に使ってしまうんで、意味なさないけど、事業資金に使うというのなら、生産的だから。加藤さんは、貸してあげたおカネを姉さんがどう使うか、つまびらかにすべきですね。ルーズな生活しててておカネが足りない人、しまりのない人、いろいろありますからキチンとしないと……。相手が、ただ依頼心をおこしてしまいますね。



加藤　主人にないしょでやってたのがいけない、と言われましたが……。

石島　うちでも、女房は、ぼくにないしょで借りたり貸したりしてるらしい。やむを得ないんだろうけどね。

加藤　わたしだったら、借りたおカネは一〇円でも、返さなきゃという気持ちになるんですけどね。

佐藤　返してもらうなんてことアテにしないで、いっそあげてしまったら、どうなんでしょう。

福原　借りるほうでも、責任を感じなきゃ。責任を感じないような人は、借りる資格なしですね。

佐藤　わたし、前には、借金のことなんか考えたことありません。父なんかに、貸してと言っても、これは、返すことなんかないんですから。（笑）

中島　ぼく、友だちのとこへ行ってたとき、もうひとりの友だちが、その友だちにカネを借りにきたんです。その友だちは、おカネはもってましたが、しぶって出さなかった。ぼくは持ってなかった。けっきょく借りずに帰っていったんですが、あとで、電話で、つめたいヤツだ、と言ってきた。

石島　貸してくれと言いだしてうらみ、借りれば借りたでなんとか言い、返せと言えばさかうらみされる。（笑）貸すほうで、かえって気をつかったり。それじゃ、立つ瀬がないな。

加藤　おまけに、自分は、神さまにそむくことをしたのではないか、なんて考えたりして……。

福原　けっきょく、おカネのじょうずな借りかたは、自分をよく知ってくれてる人のとこへ行くことです。

石島　よく知ってたら、とてもあぶなくて貸せない、なんてこともある。（笑）

福原　ひとりの悪いヤツにコリゴリさせられると、もうだれにも貸すまいというような気持ちになりますね。

石島　こわいもんだ。信頼を裏切られると、もう善意をもつことなんかすまいと、自分の気持ちを閉ざすようになる。

信仰者と金

福原　信者のなかにも、金銭の点でルーズな人がありますね。

石島　教会だからというので、愛とかなんとかいって、かえってルーズになるようなとこがあるんじゃないかな。

佐藤　クリスチャンだからって、おたがいにあまえるとこがありますね。

加藤　家庭もおなじで、小さいことでも、キチンとしないと、だめですね。わたし、信仰の持ちはじめには、すべては神だと思って、家計簿もつけないし、財布なんかへやのまんなかにほうり出しておいて、なくなれば神さまが与えてくださるなんて……。

でも、さいごはダメですね、キチンとハッキリさせてないと。ルーズってことは、なににおいても、うまくいきませんね。

中島　教会にきて感じることは、人間を忘れていることです。人間として当然なすべきところに、すぐ神を持ちだす……。

佐藤　クリスチャンであることにあまえ、それを利用するようなとこがありますね。

《聖句をめぐる座談会(7)》

愛の貸し借り

（司会）石島三郎

【出席者】

福原友治（53）電気商
加藤富美子（45）主婦
中島寅雄（23）教会奉仕
佐藤治代（22）英文タイプ

【聖句】

「互に愛し合うことの外は、何人にも借りがあってはならない。人を愛する者は、律法を全うするのである。「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」など、そのほかに、どんな戒めがあっても、結局「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」というこの言葉に帰する。愛は隣り人に害を加えることはない。だから、愛は律法を完成するものである。」

（ローマ人への手紙一三章八～一〇節）

金の貸し借り

石島　愛すること以外には、借りてはならない――というんだから、さしずめ、借金なんてことが問題になりますね。

福原　カネの貸し借りをするな、ということだと、みんな利己的になっちゃうんじゃないでしょうか。わたし、こないだ、K新聞に融資をたのむ広告を出しましたら、クリスチャンのくせして借金をたのむとは何ごとか、という投書があったそうです。広告の継続をたのみに行ったら、広告係りが、そういうわけで載せるわけにいかない、と言うんです。わたし、フンガイして、文面をよく見てくれ、一おう担保もある、いつわるわけじゃないって。それで、また載ったんですが、キリスト者が、愛だのなんだの言って、人が困っているときに手をかさないというのでは……。

加藤　貸すのが愛か、貸さずにその人の立ちあがるのを待つのがいいか、むずかしいですね。

福原　担保もなしに、ただ貸してくれというんじゃないんですからね。

石島　K新聞は信仰の新聞だから、カネのことなんか、けしからん、と言うんだな。

福原　K新聞だって、社債を募集している。おなじことです。カネのことがうまくいけば、人間関係もうまくいく。わたしが不義理をすれば別ですが……。

金と人間関係

石島　「ハムレット」のなかに、「カネを貸すな。カネといっしょに友情を失なう」というようなセリフがあるが……。

加藤　わたしの姉は、しょっちゅうおカネを借りにくるんです。かわいそうで貸してましたけど、返す意志がないんですね。きょうだいですから、とくに悩みます。ある牧師さんは貸すのが悪いんだ、と言われましたけど……。



スチャンなんて、こまるな。

中島　秩序を守るためにその子をどけてしまってはかわいそうです。その子がいなければ秩序ある学習会ができるんですけど、追いだしたんでは教会の意味がないし……。

石島　理想的なことをいえば、いっしょに包んでいければいいんだけどね。家でも教会でもハジかれたんじゃ、かわいそうだ。しかし、愛するということは、野放図にケジメがなくなることじゃないでしょうね。愛することも、愛されることも、きびしいことですものね。こんなにも愛されているということがわかったら、いい気になって図にのるってわけにはいかない……。

愛ということ

中島　〈愛しあう〉、だから、愛も貸し借りなんでしょうかね。

石島　でも、いつも借りているんだ、負ってるんだ、だから返さなきゃいけない、なんて愛はいやだな。愛ってのは、おのずから湧きでるものでしょうからね。クリスチャンは、よく、コチコチになって、これは罪になるのではないか、などと思いながら、愛そうとする。不自然だね。

福原　未信者の人には、〈愛する〉なんて、キザにきこえますね。(笑)

石島　若い人ならともかく、いい年して、愛するなんて言うのはね。(笑) あんまり、こんなことば、言わないほうがいいのかもしれない。

加藤　ほんとの愛というのは、からだにしみついたことばになり、にじみでてくるものでしょうね。

福原　愛というと、なにか高いもののように思うけど、われわれの身じかに通じるものじゃないでしょうか。

石島　そして、自然なもので、しかも、努力していかなきゃならないもの。

愛し得るか

中島　自然さがないから、技術的になっちゃう、きらいならきらいと、ハッキリしていけばいいことも適当にやってしまう。



祈りのなかでは、つぎは愛していこうと思っていながら、いざ会うと、できなかったり……。ですから、愛するということは、現実のなかでためされるんですね。頭のなかでなら、なんでもできるんだけど。

石島　ところが、手足がうごかない。

中島　高校生に質問をうけたんです。ほんとに愛をもったら、クリスチャンは金持ちになれないはずなのに、金持ちの人がたくさんいるのは、どういうわけか、って。ぼくこまってしまいました。

石島　その高校生の純粋さは、たぶんに観念的なものなんだけど、しかし、いたいとこついてるね。つきつめれば、そういうことになるんだから。ぼくなんか、どうしたってほんとに愛することなんかできっこないから、はじめからサジ投げて、居直っているみたいなカッコウだ。これは、まちがっています。できなくたって、いっしょうけんめいやらなくちゃ。

佐藤　愛と憎しみとは、紙一重ですね。感情的には、すぐ他方へうつる。

石島　かわいさあまって憎さが百倍。(笑) そういうはげしいものが、われわれキリスト者には欠けてるような気がしますね。憎むほどの愛。ぼくたちには、わからないことだらけですね。なにが愛なのか、この場合どうすることが愛なのか、与えた結果はどうなるのか、なにもかも、わからないですね。けっきょく、その場その場で、自分にできることを、一心にやるほかないんでしょう。

(次回は「生くるも死ぬるも主のために」)

中島　クリスチャンの雰囲気のなかにいるとラクに生活できるように思うけど、キリストの愛をまじめに考えると、むずかしい。

福原　クリスチャンが、カネのことで、ひとから指弾をうけるようではこまる。おたがい金銭のことはいちばん気をつけないと。

中島　カネってのは、自分を守ってくれるものですから、みんな大事にする。

石島　カネには魔物性がある。刃物みたいに無けりゃこまるが、まちがうとあぶない。ぼくなんか、すこしたくさんおカネもつとでかい気持ちになる。あさましいね。(笑)

中島　人間と神というふうに考えるべきところを、現実的には、人間とカネという関係でみるような気がしますね。

石島　カネで動くからねえ、すべてが。しかも、それを、愛のしるしにさせようなんてするから、いっそう大へんだ。「貸せ」とたのまれると、貸しても貸さなくても、こっちに問題がのこってしまう。

福原　反対のばあいもありますよ。なぜあのとき貸してくれと言わなかった、ひとこと言ってくれたら、って。(笑) カネとなんとかはたまるとキタナイと言われるように信仰もカネもケジメをつけなきゃ。われわれに言わせると、牧師さんは、おカネの苦労を知りませんね。われわれは、汗水ながして得たカネなんで、そんなカンタンなものじゃない。

石島　ところが、牧師には、経済の苦労がはなはだしい。カネの苦労がなくて経済の苦労がある……。(笑)

反応をもとめる

佐藤　わたしは、ほんとに愛するってことがわからないんです。ミッション・スクールにいたとき、朝の礼拝で、先生が、人を愛することはできないって言われて、その姿に感動しましたが、よくわからなかったんです。でも、社会にでてから、わかりましたね。むずかしいことだって……。やはり、反応がほしいですし、一ぽう的に愛するって、むずかしいですね。キリストがどんなに大へんだったかと……。



石島　恋愛だったら、よくやるけどね。磯のアワビの片想いなんて。(笑)

佐藤　愛したことによって反応をもとめるというより、裏切られることのつらさ。神さまへのわたしたちの態度も同じですね。

加藤　やはり、ほんとの愛だったら、もうなにもいらないという、無の境地で……。けれど、愛すれば強く言うようになるし……そうでなく、だまってじっと待つのがほんとなのか……。わたしの母は、その子のために、忍耐強くだまっていたものですが、すると子供は立ちあがれないし……どっちがほんとなんでしょうかね。

きびしさ

中島　いま、ぼくらの子供学習会に、施設から父親にひきとられてきた小学校三年の子がいますが、これがたいへんなんです。大きな声でおこると、近所の人に、クリスチャンなのにと思われるし、だまっているとイタズラがひどくてこまるし……。

佐藤　C・Sなんかでも、C・Sの先生はおこらないものだって観念が、こどもたちにありますね。

石島　一ぱんにも教会にも、クリスチャンは怒らないものって考えがあるんじゃない？

福原　わたしは、中年で信仰にはいったせいか、シャバっ気が多くて、クリスチャンらしくいかないところがあって……。

石島　それはけっこう。(笑)

福原　だから、おこるときにはおこる。

石島　絵にかいた優等生みたいな模範的クリ

のある方が仰しゃる方へ、附いて参りますが、つまり悪いことをせぬ方には、幽霊という物は決してございませんが、人を殺して物を取るというような、悪事をする者には、必ず幽霊が有りまする』といっている。

さすがに一世の名人、円朝はうまいことを言ったものだと感心した。

2 人間本来の要求

わたしが神学校にはいったとき、これに反対してわたしの兄が、「おまえは神さまが、わかっちょるか？ 神という字はなんと書いてあるか、ネて申すと書いてあるぞ、ネて申すことは、ねごとである……」と言った。

ねごとであるか、どうかは知らんが、もしここに毎晩、王さまになった夢をみるこじきがあるとすると、夢であいかわらずみすぼらしいこじきのさまをみるよりは、王さまになる夢をみるのが、どんなに楽しいかしれない。

それが夢でなしに、ほんとであったら、どんなにすばらしいことかしれない。

神があるかないか、これが問題になるのは実は人間の夢を、その希望を、現実にしてくれるものを求めているからではあるまいか。

そういう神があることを予想しているからこそ問題になるのではあるまいか。

人間のほうでそういう神の顔を拝みたいという要求のあるのは、その相手方にそういう神が人間をながめているからではなかろうか。なんだかそういうように感ずるのは、わたしの錯覚であるだろうか。

むかしの日本人は、神を「かくりみ」「隠身」とよんだ。からだをかくしているかたであると考えたようだ。

夏になって軒先にすだれをつるす。そうすると町をゆく人、庭で仕事をしている人たちが、すだれの内側からよく見える。しかし、すだれの外からは、中にだれがいるかわからない、内から見るとなにをしていても、手にとるようにみえる。知らないと思っていてもみんな知られている。このように、われわれは隠身の神に見られているが、神を見ることはできない。見えないが、神はたしかに在すと、古代の人々は信じていたようだ。

盲目で、つんぼで、唖の三重苦を負うたヘレン・ケラー女史の伝記を読んだ人は、みな知っているだろう。

家庭教師のサリバン女史は、ヘレン・ケラーの七才ごろに、片手にりんごを握らせておいて、反対の手のひらにりんごという字を書いて教えた。お人形をもたせたり、パンをもたせたりして、字を教え、次には唇にさわって、口でもの言うことを知らせ、自分でもそのまねをして、ものが言えるようになった。こうしてイギリス、フランス、ドイツ、さらにギリシャ語までわかるようになり、大学を卒業するに至った。

しかしサリバン女史は、どうして神さまのことを教えるか、手でさわって知らすわけにはゆかぬ、ことにまちがって教えてはたいへんだから、しばらくの間は教えなかった。

しかしある日、有名なヒリップス・ブルックス牧師を招いて、お話をしてもらったところ、それを聞き終って、ヘレン・ケラーは

「ブルックス先生、わたくしはすっかりそれを知っておりました。ただそのおかたを、神と申し上げることを知らなかっただけでございます」と言ったそうだ。

われわれは、自分の努力で食欲や性欲を創造するのでない。それは、生きているわれわれの中から本能として出てくるのである。それのように、神に対する要求は、われわれの本能として、われわれの中にあることが、このヘレン・ケラーの実例でわかるのではあるまいか。

3 神なしでは説明がつかない

神があるということを、ちょっと筋道をたてて話してみよう。

よく言われる例だが、ここに卵がある。こ

＜キリスト教のいろは＞　＜第七回＞

神はあるか

島村亀鶴



1　有や無や（うやむや）の神

「神とはなにか、わかりやすく話してくれないか」とある国の王さまが、国中のえらい学者にたずねた。数日のゆうよをもらって学者たちが、たくさんの書物をしらべた結果、しらべればしらべるだけわからなくなり、

「王さま、神さまとはわからぬものでございます」と、おそるおそる答えたそうである。

これはカルビンというえらい神学者の書いた『基督教綱要』にのっている話です。

神を瓶の中に金魚を入れて見るように、見ることができれば、わからぬこともあるまいし、また神があるか、ないかなどと言わないでもすむわけであるが、神をつかまえて見せるわけにいかぬから、こまってしまう。

『霊魂』といふもの、果して有るのか無いのかある医者がある坊さんと問答をした。

「それは目で見られるものですか」「見られんですな」「耳で聞けるものですか」「聞けんですな」「舌で味はえるものですか」「味はえんですな」「鼻でかげるものですか」「かげんですな」「手でさわれるものですか」「さわれんですな」

そこでその医者は、人間の五つの感覚のどれをもってしても、つかまへることのできぬものの存在などは、ちょっと信用できかねるといって、声をたてて笑った。

すると坊さんが急に不審そうな顔つきをして、

「あなたはいま、なにかごらんになられたか」「いいえ」「なにかお聞きになられたか」「いいえ」「なにかおめしあがりになられたか」「いいえ」「なにかおかぎになられたか」「いいえ」「なにかおさわりになられたか」「いいえ」

そこで坊さんは、これは妙だと大声をたてて笑った。人間の五つの感覚のどれをもってしても、つかまへられぬものに、おかしさをお感じになられたとみえる。存在もせぬものでお笑ひになったのは、どうなされたわけかな？

この問答、どちらが勝ったか、負けたか……

これは高田保著『いろは歌留多』にある文章を、ちょっと拝借したが、霊魂を神と置きかえて読んでみても、同じくおもしろい。

神はあるとも云えるし、無いとも云える。一休和尚は、「釈迦といふいたづらものが世に出でて、おほくの人を迷はするかな」と歌った。有や無や（うやむや）では、まことにこまる。

落語の名人、三遊亭円朝は「真景累ケ淵」を演じて、『ごく大昔に断見の論というのがあって……眼に見え無い物は無いにちがいない……ということを説きました。

するとそこへ、釈迦が出て、お前のいうのは間違っている、それに一体無いという方が迷っているのだ、といい出したから、ますます分らなくなりまして、

「ヘエ、それでは有るのが無いので、無いのがあるのですか」

というと

「イヤそうでもない」

というので、つまりどちらか、たしかに分りません。……私どもはどちらへでも、知恵

ません。しかしわたしがせいいっぱいはたらいていることは、イエスさまが知っていてくださいます」と書いてあった。だれにもわかってもらえぬとき、自分の真実を知ってくれるのは、神さまだと思うのは人間の至情であると思う。

第五にわれわれは、絶対者にあこがれる情をもっている。自分以上のものに依頼しようとする感情をもっている。

外部よりの害悪を守ってもらいたいために力ある神に依りたのみ、自分の内部的の弱点や、罪を犯した場合の救いのために、愛ある神を求め、未来の不安に対しては、全知の神に祈りをささげる。

神に祈らずにはおられない人間である。人間のあるところは、どこにも祭壇がある。祭壇なしには生きられない。人が自分以外のものを求めるのは、自分だけでは生きられないからである。人は愛を求めて自然界に、人間に向かってゆくが、ついに神にまで行きつかねば、心の満足は得られないのである。

4　この人を見よ

めくらが象にさわってみた。象の鼻にさわった者は、細長いといい、腹にさわった者は、象とは平べったいものだといい、象の脚にさわった者は、酒樽みたいなものだと言ったとの、たとえ話がある。

いくら有神論証をしてみても、みんなあて寸法であって、最後のきめ手にはならぬ。

いよいよ最後になれば、ほんものの神が、出て来なければ、きまらない。

神が天にいるとしても、愛があれば人間のほうへ近よって来ねばならぬ。神がご自分の姿を表わして、隠れていないで、すだれの外側へ出て、現人神すなわち、人間になって出て来てくだされば、いちばん早くわかるはずである。

人間に神があるか、ないかを、知らすのには、人間の姿になって来られるのがよい。なぜなら、人間は人間に対していちばん近親感を覚えるからである。

天の使では肉情的ななやみを知らないだろうし、また人間以下の畜生ではわれわれの道徳的苦闘や、霊魂のさびしさや、罪責のくるしみがわからない。神が人となることは、国王がこじきとなることよりも、さらに低くなるわけだが、そうでもしないと、われわれは神をよく知ることはできない。天使だと敬遠するだろうし、動物だとばかにするだろうから、どうしても人間となって、神の神たるすがたを示していただかねばならない。

神が人となって表われてくれたのが、イエス・キリストであると、聖書に書いてある。

われわれは太陽の光によって、太陽を見ることができるように人となったイエスによって、神の実態を知ることができる。

「神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいる、ひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである」とヨハネ福音書一章一八節に書いてある。

「われはここに神はいづこにましますや星のまたたき淋しき夜なり」と伊藤白蓮女史は歌った。しかし神はどこにましますかと、空を仰がなくても、「わたしを見た者は、父を見たのである。」（ヨハネによる福音書一四章九節）に、イエス・キリストは申されている。

わたしが神であるか、ないか、よくしらべてみてくれ！　わたしは口先ばかりで、そう言っているのではない。わたしの毎日、毎日行なった行為をみたうえで、わたしが神であることを信じるがよい！　とイエスは申された。

神があるか、ないかは、まずこのイエス・キリストが神であるか、いなかを、たしかめるところより初めねばなるまい。

これが神の存在の、最初にして最後の決め手である。

（次回は「ここに神がいる」）

れは鶏の生んだもの、その鶏はどうしてできた？　卵から、その卵は？　鶏から、それでは卵がいちばん初めにあったのか？　それとも鶏が最初にあったか？

　その最初にできたもの、第一の原因は、いったいなにによって存在したのであるか。他のものに依存して（他のものを原因として）でなく、すなわち絶対的に自存するものがなければならぬはずである。単に一つの卵だけでなく、万物が存在している。その万物の終局的に一つなる原因がなければなるまい。

　これは結果からみた原因としての神の存在を証明しようとする考え方である（宇宙論証）

　次に、暴風や地震や津波などのあとをみると、それこそ目茶苦茶に乱雑になっている。ところが、その波や風に荒らされたあとに、畑をつくり、家をたてると、そこには秩序があり、規則があり、決して乱雑ではない。一定の目的にそうて整頓せられている。

　ワシントンがまだ少年のころ、彼の父が種を蒔いた。それが大きなGeorge Washingtonという字の形になって表われたので、これをみたワシントンはびっくりして、その父に「裏の畑にわたしの名まえ通りに草が生えています。草が偶然にああうまく生えるはずはないからだれかがきっと植えつけたにちがいありません。おとうさん、あなたがお植えになったのでしょうね」と言ったので、その父は「おまえの名まえ通りに生えてさえ、偶然でない、だれかが種を蒔いたに違いないと判断するくらいなら、まして秩序整然とした、万事申分なくできている天地のいっさいのものは、どうしても真の神が、その全知全能によって創造されたものと悟るべきではないか」と言って、教えたそうである。

　この自然界でも、人体でも、あまりによくできている。衣裳をこしらえた者、立案者、立法者が、この宇宙になくてはならぬと考えるのは、当然ではあるまいか。（目的論証）

　第三には、デカルトなどの哲学者の言いだした説に、実体論証というのがある。

　これは観念があれば、それに相応ずる実体がなければならぬという。石、木、机、手、これには一つ一つそれに伴なう実体がある。物質的でない精神的な観念、親切、勇気、こころなどにもそれに対応する実体あるいは典型がなければならぬ。神という以上、その実体があるはずだという。一万円財布にあると思えば財布に一万円ははいっており、おれは親切な人間だと思えば、それで親切の実質があり、おれは神だと思えば神になれるというわけにはゆかぬ。

　もちろんそう簡単にはゆかぬが、しかし実質、実体の予想や仮定、あるいは拠りどころがなくては、観念は生まれるはずはないから、これによって証明の力を得ることにもなろう。

　第四番目には道徳論証というのがある。

　仏教でも諸悪莫作、諸善奉行という。悪いことはするな、善いことをせよ、とは人間の生まれながらの内心の声である。自分の勝手な心で消すことも、暴力や権力でこれを除くこともできない。自分にも他人にも、絶対的命令としてせまってくる良心の声である。これにそむくと自分が、人間でないとさえ思うようになる。わがうちにあって、われを支配するもの、これがわれと同時に他人にもある。男女、階級、国籍をこえて、この絶対的至上命令にみんな服さねばならぬと、思うている。

　この至上命令者の存在を信じているからこそ、身をすててまで、善に生きようとするのではないか。人は知らずとも、人にほめられなくても、この善の至上命令者に従うのを、こころより喜ぶのは、人間の歴史の証明によって明らかではあるまいか。

　わたしの知っているひとりの娘さんが、信州から出て来て、東京で奉公した。まじめに勤めても、そのうちの奥さんの気に入られないので、なやんでわたしに送って来た手紙の中に、

「どうしても奥さまが、やさしくしてくれ

営を暗くとざしている深刻な危機感である。昨年の安保闘争と三池争議が（内部にはさまざまな弱点をかかえていたにもかかわらず）日本の内外の保守勢力をふるいあがらせ、深刻な危機感におとしいれたことは事実である。今秋に予定されていたアイクの来日が、とつぜん中止されたいきさつからみても、保守勢力のいだいている危機感は、われわれの想像をはるかにこえるほど深刻である。

この危機感を理解するために、若干のてがかりを参考にしてみよう。昨年、安保闘争がした火になった九月一五日から一〇日間、陸上幕僚監部第二部長（情報）広瀬栄一陸将補、同練馬分室長高杉恭自一佐ほか数名の自衛隊幹部が、ハワイにあるアメリカ太平洋統合軍司令部に出張して合同情報参謀会議をひらいた。この会議では、つぎの二つが議題となったとつたえられている。①安保闘争の推移にかんがみ、戦後成長した日本の民主勢力を一挙にくつがえすために必要な日米の軍事量を検討すること。②東南アジアの軍事情勢を分析し、これに対処する方針を検討すること。――これは自衛隊とアメリカ太平洋統合軍司令部とのあいだに、ひんぱんにひらかれている合同会議のひとつにすぎないのであるが、そこで議題とされている内容は、われわれ国民にとって重大な意味をもっている。なぜならば、極東の政治・軍事情勢とむすびつけて日本国内の治安問題が検討され、しかも日本の労働者と国民を基盤とする民主勢力を敵視する治安対策が討議されているからである。われわれは、ここから日本の保守勢力がいだいている深刻な危機感と、それに対処していこうとする異常な決意の一端にふれることができるとおもう。

さらに昨年の八月一〇日、九州管区警察局の村井順局長は、福岡市で北九州の財界人をまえに講演をおこなったが、そのなかにつぎのような一節がある。「今日の安保反対闘争や三池争議をみて、日本では集団暴力は手に負えなくなるのかと不安をもつ人がいるようだが、しかし、集団暴力にたいしては、最終的には自衛隊の出動が当然考えられるのであって、将来の日本の（治安）は警察と自衛隊の総力をもってすれば、かならず解決できるものと考えております。」しかも、この村井局長のことばは、いまでは架空なものではなく、自衛隊の「治安行動（草案）」として着着と具体化の速度をはやめ、「暴動鎮圧訓練」という名目で、すでに自衛隊員への訓練が始められているという。自衛隊と警察との協力によって治安を維持しようという保守陣営の決意が、いかに深刻なものであり強靱なものであるか。政防法が姿をあらわしたいま、われわれ国民は冷水三斗の思いを新たにして、事態の重要な意味をよみとらねばなるまい。

ところで、このような治安対策をささえる保守勢力の考え方には、今日の国際政局の特徴である根ぶかい反共思想が母胎となっている。大はケネディ政権から小は自民・民社両党の思考様式をつらぬくものは、共産主義にたいする深刻な憎悪感と、力（軍事行動と弾圧）によって共産主義の脅威を地上から一掃しようという決意である。日本の保守勢力は破防法を立法化することによって共産党の活動を規制してきた。しかし、破防法は、内乱とか外患の教唆（外国に通じて日本に戦争をしかけさせること）などといった、そうやたらに起こりようのないことを取締まるものであった。しかし政防法では「政治的暴力行為」という新しい概念をつくりだし、共産主義活動ばかりではなく、すべての自衛的な国民の表現活動を政治的暴力と認定して弾圧できるまでに拡大されたのである。これでは言論の自由、批判の自由は完全に奪われるであろう。批判の自由のないところに民主主義はありえない。戦後はじめて根をおろした日本の民主主義は、いま文字どおりの決定的瞬間に立たされている。

（6・4記）

（東京都立大学教授）

社会を見る目

政防法の背後の黒い影

阿部行蔵



六月二日の夜から第三八通常国会の審議は大荒れにあれた。衆議院の法務委員会から本会議へ、さらに舞台は参議院にうつって、会期末にせまった国会議事堂の内外は、一年まえの安保闘争の険悪な雲行きを再現した。台風の目は、いうまでもなく政治的暴力行為防止法（政防法）である。

こんどの政防法の国会審議をめぐって、われわれ国民の目には、割りきれないいくつかの点がみえた。そのひとつは、この法案にたいするマスコミ（とくに三大商業新聞）の態度である。マスコミは、この法案にかんするかぎり、報道に不熱心であるか、型にはまった一方的な態度でお茶をにごしてきた。ことに法案が国会に上提された五月一三日からは「よっぱらい防止法案」の特集シリーズを掲載するほどのスペースをもちながら、政防法案の審議の状況を詳細に報道する熱意を示さなかった。解説記事にするにも、社会党を批判することだけに終始して、自民・民社両党からの共同提案や、社会党案の内容そのものの分析の労をとらず、国民の自主的な判断をよびおこす啓蒙の努力を完全に怠ってしまった。かつて警職法改正のさいに「おいこら警官反対」という大衆的なキャッチ・フレーズをかかげて悪法粉砕への大きな原動力となったマスコミの勇気をふりかえるとき、なんとしても割りきれない感じがする。こんどの法案が国会に提出されたのち、自民党側が各新聞社、放送局などを歴訪して、法案内容を解説しないよう懇請したという話をきかされたりすると、公正な精神をすてて権力に屈した日本のマスコミの醜い姿こそ、特筆せねばならぬことのひとつである。

自民党側が、巧妙にかつ腹ぐろくたちまわったことも、めだつ特徴であった。民社党と手をにぎり、かつ民社党のかげにかくれて国民の監視の目をごまかそうと企てたのは、自民党の腹ぐろいかけひきであった。「左右の暴力論」という、ごまかしの理くつをばらまいて国民の判断を混乱させたのも、そのひとつである。「左右の暴力論」とは、右翼テロもよくないが、それを誘発する「左の集団暴力」もわるい。したがって右翼テロとともに「左の集団暴力」もとりしまる必要がある、という理くつである。しかもかれらのいう「左の集団暴力」とは、国民や労働者が日本国憲法で保障されている民主的権利にもとづいておこなう大衆行動をいうのであって、右翼テロなどと同列にとりあげるべき性質のものではない。にもかかわらず、この当然の前提を故意にくずして「左右の暴力論」という混乱した理くつをはんらんさせ、テロをにくむ国民感情を利用して国民の民主的権利を押しつぶそうと企てたのである。政防法成立への経過をみても、またこの法案の内容を分析しても、そこに妖気をただよわせているのは、このような自民党の常規を逸した姿である。それはまるで、ものの怪につかれたような異常な態度であった。

しかし、この自民党の姿勢を、一歩つきつめて分析してみると、そこには奇怪なムードが流れていた。それは自民党と池田内閣、さらにその背後にひしめいている日本の独占資本をふくめて、今日のいわゆる保守勢力の陣

ず相手が人間であるということを認識しておく必要があります。というと、そんなことは百も承知と申されるかもしれませんが、案外わたしどもはすべての人間が機械のように均一にできており、一定の条件のもとでは、一定の状態を呈するものと考えてしまうことが多いものです。ところが人間は個性がそれぞれあって、その反応の型もことごとく違っております。それを忘れると、自分がそうであったからまた他人もそうだろうと類推し、案外他人の心の内部を少しものぞこうとはしなくなります。そういう意味では、「同情」は多くの場合利己的動機に支配されることがあるのです。ですからわたしどもの伝道の場合、まず相手の心の内部を理解し、その中にはいりこむこと（共感）が必要ではないでしょうか。あなたの場合におけるその婦人の心理を考えてみると、突然ひとりの愛娘を失って悲嘆にくれているのですから、他者の慰めを受け入れる状態にあると思うとま違いで、かえってまわりに壁をめぐらして、わざわざ外からやって来て、愛娘の死という事実を想起させようとする人々をシャットアウトしようとしているのかもしれません。人は往々にして肉親の死を意識的に否定したり、忘れようと努めている場合がありますから。

　あるいはまた、それまでに訪れて来た〝宗教家〟たちが相手の悲嘆よりも、自分の宗教の売り込みにいっしょうけんめいで、それに懲りてしまったのかもしれません。そういう人々はおおむね、死別の痛手から回復するためには、悲しみの涙にくれる十分の時が必要なのだということを知らない型の人で、やたらに教義を説いたり、集会に引っぱり出そうとしたり、本を読ませたがります。それに対する怒りの反動が、その婦人をしてそのような態度をとらせたのだとは十分に考えることができます。

　そのほか、死別ののち、世を去った人に対してああすればよかった、あんな態度を生前とって悪かったという悔いの念を強く抱き、それが罪責にまで強まる場合があり、対人態度にもそれが現われます。

　とにかくショックのあとには人の心の動きはほんとうに複雑です。それをときほぐすには忍耐と時が必要ですから、あせらずに初めから伝道を旗印にかかげて乗り込まずに、ひとりの人間として、悲しみをともに担うという態度で自然に接してごらんなさい。そしてこちらでしゃべることより、相手のことばをよくきいて上げることがたいせつでしょう。相手は語りあえる友を欲していないのではなく、ほんとうは求めているのですから。

　そこで一度で懲りずに、初めはお花だけでも捧げるつもりで訪問し、弔意を表わし心からお悔みを述べれば、きっとそのご婦人の心も解けてくると思われます。日本のように、さきほど申し上げた魂のみとり（ゼールゾルゲ）というキリスト教の実践にほとんどなじんでいない国では牧師が初めから乗り出して行って、かえって〝宗教の売り込み〟と取られる場合も多いようですから、一般信徒のかたがある意味ではむしろ有利な面もあります。だんだんお互が心から打解けあって語りあえるようになってから、牧師を紹介したり、集会に誘ったりしてはいかがでしょうか。そのほか、昨年日本基督教団出版部から出された、『その人は慰められん』という本は非常にすぐれた内容を持っており、愛する者を失った人に対して、ほんとうの意味での慰めを与えるものですから、いつかそのかたに一読をすすめてみるのもよいと思います。

　しかしいずれにせよ、伝道はその対象が生きた人間であり、複雑な心の動きをするものなのですから、こちらの伝達しようとする福音の内容がいかにすぐれていても、タイミングが悪かったり、方法が拙劣だったりすれば伝達はできないのですから、そのことをいつでも考えて、忍耐をもってことに当たっていただきたいものです。

（青山学院大学講師・牧会心理学専攻）

人生相談室

不幸に沈む人をどう導くか

（回答者）気仙三一



【問】先日わたしは友人Aさんの訪問を受け、彼女の知人の家におきた不幸について相談を受けました。その話によれば、その家の一人娘が学校からの帰途交通事故にあい、ほとんど即死ともいえる状態で死んだのだそうです。彼女はその悔みに行ったところ、悲嘆のあまり、なかば狂乱状態になっている両親、とくに母親のありさまを見て慰めのことばもなく、辞去した帰り道、わたしの家に寄ったのでした。彼女はわたしがキリスト教信者であることを知っていますし、彼女自身も少女時代一時教会にも通ったことがあるので、このような際には、宗教による慰め以外に手段のないことを感じて、わたしにぜひその家を訪問して慰めてやってくれないかと頼みます。そこでわたしは、なんらかの慰めにもなるならばと思ってお尋ねしてみました。もちろんわたしは、その母親とは面識すらありませんでしたが、わたしも友人の善意に動かされて、ささやかでも善意をもってお尋ねしたのですから、好意をもって迎えられることを期待し、短かい時間でもわたし自身の肉親を失った経験とそのときキリスト教の信仰によって得た慰めなどお話するつもりでいたのです。ところが玄関に立って、簡単に自己紹介をし、友人から頼まれてきたことなどを話しますと、その母親は顔をこわばらせて、「不幸以来いろいろな宗教のかたが来てくださるが、今のところそっとしておいていただきたい」と言い、迷惑そうにそれ以上の会話を断ります。わたしもしかたなくそのまま辞しましたが、ほんとうに失望しました。わたしはすべてのキリスト者は、いろいろな機会をとらえて伝道すべきだと思いますし、結局はわたしの力が足りないのかとも思うのですが、どのようにすべきでしょうか。

【答】善意をもって人に接したのに、かえって悪く思われたり、伝道の熱意に燃えて訪問して、玄関払いをくわされたりするとほんとうに失望します。ことにあなたは友人の気持ちに動かされて、未知の人の所にわざわざ赴いたのですから、さぞかし落胆なさったことでしょう。おっしゃるとおりすべてのキリスト者は祭司の役を果たすべきものですから、お尋ねくださったのは大きく言えば、全教会の果たすべき魂のみとり（ゼールゾルゲ）を担っての行為というべきものです。牧会ということも、単に牧師のみに帰せられるべきことではなく、全教会員、全信徒が参与すべきことでありますから、あなたはほんとうに良いことをなさったのです。

　さてそこで伝道の場合に、わたしどもはま

ウ、青いヒスイもちりばめて、山のてっぺんのほらあなからも、キラキラ美しく望まれる。

　りょうしのクープエはリペルダへ、てっぽうの筒をみがきながら、

「――うらみの深いドーフエだが、夕陽に照ればあのように、やしきの屋根はきれいだね。もとはといえば山賊だが、いまではアレッポの人たちも、ドーフエさまの家来だし、この世の事はどんなことも、ドーフエ大将の望みのまま――ああおれたちは情けない、こんなさびしいほらあなで、あと何十年待つのだろう？」

「いいえ、もうすぐ――もうじきよ。」

　クープエの妻のリペルダは、ゆでたジャガいもをつぶしながら、ふしぎなほおえみをたたえて言う――

「クープエ、あなたは気がつかない？　ドーフエ公のおやしきの、屋根のかわらがきれいなのは、ホンの夕陽がさすときだけ。わたしは毎朝ほらあなから、恋しいアレッポの村を見る――朝陽のひかりがサンサンと、アレッポの屋根を照らすけど、ドーフエさまの屋根だけは、灰色にくもって光りませぬ。夕陽のときだけ光るのは、ドーフエの身に近々に、変わったことがあるからよ。」

「ドーフエなんかどうでもいい――」

　りょうしのクープエは、にくしみの、片目を光らせ歯をかんで、

「十年前のいまごろさ――アレッポの村の粉ひき屋の、赤んぼポウリヤを助けたのは。……ところが、かわいいポウリヤは、いまではドーフエの奥さまの、お小間使いに使われて、なんだかあぶない身の上だ。やさしいむすめポウリヤは、ドーフエさまの目をぬすみ、ろう屋の人を助けている。もしもドーフエに知られたら、ポウリヤもろう屋へ入れられよう――まだ十になったばかりだのに、ドーフエやしきの地下ろうへ入れられたらばおしまいだ。オリーブあぶらのしぼり役、それも一〇年二〇年、あわれなむすめポウリヤは、クープエ、おまえの苦労より、何十倍だかわからない。なんとか助けてやらないか？　なんなら、うでにおぼえのある、このてっぽうが役に立つ――いまこそおまえとふたありで、ドーフエやしきを襲おうか？」

「クープエ、あなたは気短かね。わたしは二〇年三〇年、いままでがまんしているのよ。ポウリヤのことはだいじょうぶ、ろう屋へ入れられることはない――あの子はわたしの生まれかわり――いざとなってもだいじょうぶ、すべてを失うときにこそ、あの子はすべてを得るのです。わたしを疑うのはやめてちょうだい。ポウリヤだってそう言うわ――疑りながらほろぶより、信じて信じて信じぬいて、その果てにほろびるものならば、そのほうがどんなにきれいで





創作童話

アレッポの乞食むすめ

文・太田博也
絵・岡林茂生

後編　第六章　すべてを失うその日まで

1

くるくるまわれ　月も日も
つたなきいのち　いだきしめ
　くるくるまわる　月も日も
きのうとあしたの　間だけ
くるくるまわれ　月も日も
よろこび悲しみ　たしかめて
　くるくるまわる　月も日も
十年過ぎたら　またもどる
くるくるまわれ　月も日も
ひとりの赤んぼ　見守って
　くるくるまわる　月も日も
おまえの影を　なつかしむ

ゼベルカランテルの山つづき、オレンテ山のいただきに、ともしびともして、だれかが待つ。――待つ待つ待つ待つ、リペルダが、りょうしのクープエとふたありで、あわれなむすめポレッテの、生まれかわりのふしぎな日を！

　オレンテのふもと、アレッポの、ドーフエ公のおやしきなら、屋根のかわらも赤いメノ



薄い下着だけのポウリヤは、さすがに小さく恥ずかしく、ドーフエさまの前に立ち、

「おゆるしください。ご主人さま。わたしはおくさまのごきげんを、そこねてしまったのでございます。これからどのようになりますか、神さまのおぼしめしにまかせます。それといっしょにおくさまの、おぼしめしにもまかせましょう。いくら形はほろびても、心の形は変わりませぬ。」

「ほほう、心の形とは、いったいどんな形じゃね?」

ドーフエ公はふしぎがり、ドーフエおくさまはいら立った――

「そんな心の形なぞ、だれにもあるものじゃありません。それより表の形です。いいかい、ポウリヤ、きょうからは、おんぼろぼろの服を着て、豚小屋の番人になるんだよ。」

と言っておくさまは、灰色の、ぼろぼろの服をポウリヤへ、むりやり着せて、ほおえんだ――

「おやまあ、ほんとに、にあうこと！　生まれながらのポウリヤは、豚小屋のむすめにふさわしい！」

ドーフエ大将もそれを見て、ビール腹をゆすりながら、

「わっはっはっは、これはゆかい！　まことに、りっぱな思いつきだ。わしも心配していたが、これでどうやらまにあった。あとがまの役にはちょうどよい――わしのやしきのだいじな豚の、豚番のばあさんが死んだので、どうしようと思っていたのじゃが……あのばあさんのぼろ服も、ポウリヤにどうやら着られるな。わっはっはっは、ちょうどよい！」

さて――その日から、ポウリヤは、きたない灰色の服を着て、つぎのあたったエプロンして、ドーフエやしきの豚小屋の、豚といっしょに住みこんだ。なにしろ豚番の役目なら、一から十まで豚のせわ――だから豚小屋に同居して、夜ねるときも豚と寝る。

ろう屋のようなサクの中に、カギかけられて、ポウリヤは、豚小屋の中で豚のせわ。

ときどき、ドーフエおくさまは、はなをつまんで豚小屋へ、見まわりにきて、ポウリヤへきびしく命令するのだった――

「いいかい、ポウリヤ、なまけずに、お豚さまのせわをするんだよ。いちにち三どはお豚さまの、からだをブラシでこするんだよ。バラ色のシッポも忘れないで、きれいにこすってやるんだよ。」(続く)



しょう？　それが人間というものの、ほんとの勇気というものだし、それが信じて待ちもうける、勇気ある人のたいどでしょう。」
「ああ、リペルダよ、はずかしい。信じて、おれも待つとしよう。それが勝利というものだな。」
鉄ぼう打ちの名人の、黄色いぼうしのクープエは、ふしぎな妻のリペルダへ、あたまをたれてそう言った。

2

いっぽう――ドーフエやしきでは、クープエが心配したように、小さな女中のポウリヤは、ろう屋へ食べものを、コッソリと、運んでいたことが露見して、ドーフエおくさまに呼びつけられ、
「ポウリヤ、おまえはわたしの愛を、よくまあ裏切ってくれました。おまえにはとくべつに目をかけて、わたしの女中にしてやった。それだのにおまえは裏切って、わたしの主人まで取ろうとした。いいえ、べんかいはゆるさない――その証こには主人から、黄色いリボンをもらったろう？　わたしのゆるしも得ないまま、まるで得意にそのリボンを、あたまに結んでいたじゃないか？　そればかりではありません――わたしたちへ仇をした、地下ろうの罪人たちへまで、ポウリヤおまえは味方して、わたしのごちそうの残りまで、囚人たちへ運んだのだ。もう、こうなってはおまえの身も、いままでのようにはしておけぬ――わたしの女中だからと思えばこそ、きれいな服も着せていたし、おいしいものも食べさせた――けれどもきょうからは違います。おまえはクビです。いままでの、だいじな役目はさせられぬ！」

おくさまにそう言いわたされ、小さなむすめポウリヤは、なぜか、うっすらほおえんで、
「ありがとうございます、ではおくさま、わたしは生まれた時のままの、粉屋のむすめになりましょう。」
「なんだと？」
と、ドーフエおくさまは、くちびるをふるわせて、どなりつけた
――
「このアレッポの者たちは、わたしの命令どおりです。おまえらがどんなになりたくても、思うようにはなりませぬぞ。わたしに反抗したそのバツに、きょうからおまえは地下ろうの、囚人のひとりになるがよい。いまは一〇才のむすめだが、これから三〇年四〇年、お日さまもささぬ地下ろうで、オリーブあぶらをしぼるがよい――それがおまえの報いです。」
「はい、そうほうがよろしいと、おくさま、わたしは思います。前にもそのように申しました。自分自身の考えを、考えられるなら地下ろうも、わたしにとっては天国です。からだの自由はきかないでも、こころの自由がありますもの！」
おちついて、ポウリヤはそう言った。するとおくさまは、ふんがいして、いまの命令を取り消した。
「ふふん、心の自由だなんて、なまいきを言うなら、しかたがない――ろう屋へ入れるのはやめにしよう。そのかわり別の役目にする。とにかくポウリヤ、いますぐに、着ている服をおぬぎなさい。これからの役目のいしょうにはそれではりっぱすぎるからね。」
おくさまは下男たちを呼び、むりやりポウリヤをはだかにして、ドーフエ公のへやまで、ひきずるようにつれて行く。

たところにあるように思うのです。近代的個人主義といってもいいでしょう。自己を他者から孤立化するところで、自己を自己たらしめる「自我」という抽象的原理を見出し、その自我を無限に追求し発展させていくところに自己の幸福があるのだという考えかたであります。ヨーロッパにおいては、それはあのマックス・スチルナーの『唯一者とその所有』に典型的に示されるように、それはついに「自我教」というような宗教性にまで高められてしまいました。自我の絶対化であります。しかも、他者と孤立化されたかたちでそれが追求されるのですから、けっきょく、自我と自我とのぶつかりあいとしてしか、人間は他者との関係をつくり出すことができません。交わりというようなことはとうてい成り立ちようがないわけで、前回に紹介しましたドストエフスキイのいわゆる「孤独時代」とは要するにそのことにほかならなかったのです。芥川龍之介の初期の作品に『孤独地獄』というのがありますが、人間がお互いに孤立化して、どこにも共同の生が成り立たず、まるで地獄のような苦しみをしているのが孤独地獄ということです。小説のなかで芥川はつぎのように書いています。

> 仏説によると、地獄にもさまざまあるが、凡先づ、根本地獄、近辺地獄、孤独地獄の三つに分つ事が出来るらしい。(中略)その中で孤独地獄だけは、山間曠野樹下空中、何処へでも忽然として現れる。云はば目前の境界が、すぐそのまま、地獄の苦難(くげん)を現前するのである。自分は二、三年前から、この地獄へ堕ちた。一切の事が少しも永続した興味を与へない。だから何時でも一つの境界から一つの境界を追って生きてゐる。勿論それでも地獄は逃れられない。さうかと云って境界を変へずにゐれば猶、苦しい思をする。そこでやはり転々としてその日その日の苦しみを忘れるやうな生活をしてゆく。しかし、それもしまひには苦しくなるとすれば、死んでしまふより外はない。昔は苦しみながらも死ぬのが嫌だった。今では……

このように作中人物に語らせてから芥川は、作品の終りに、「或意味で自分も亦、孤独地獄に苦しめられてゐる一人」であると書いています。芥川を自殺にまで苦しめたのは、こういう孤独地獄の苦しみだったのかもしれません。わたくしはまた、太宰治のことを思いおこさずにいられません。彼がまだ弘前高等学校の学生のころに書いた習作のひとつに『無間奈落』というのがあります。無間奈落とは地獄のことですが、作品の中で重要な役割をしめる女のことをこう書いています。「本当に何の呪ひも有ってはならぬと只管彼女の此頃頓に孤独の淋しさの募って来た心を警めて居た。彼女は本当にひとりぼっちであったのだ」「うすら寒い蒲団の中で細長い両脚をこごめ、背を丸くし、両手の嫋やかな指を様々に組んではほどき組んではほどきしながら彼女は、身に犇々と迫る孤独の寂寥さを物凄い烈しさで感じて居るのであった。人々よ、これはどうした事だ。おさだは、自分を非常に幸福だと信じては居るらしいが、併し彼女は現に孤独地獄にみんごと落ちて了って居るのではないか」(傍点佐古)。してみると、太宰治の無間奈落も実は孤独地獄のことではなかったのでしょうか。人間失格にまで自己を追いやった太宰治の生涯は、実は孤独地獄の苦しみだったのです。

生きる意味について・第七章

連帯的人間

佐古純一郎



近代への懐疑　近代は人間性の自覚とそれの探究の歴史であったといわれます。人間は「神」というような超越的な実在者との交わりにおいて自己を形成していくのでなく、人間自身の内に生きる原理を持っているのだという、自律的人間の確立ということが近代のヒューマニズムの基調をなしてきたとも考えられましょう。もっともこれは主としてヨーロッパの近代のことであって、日本の場合にはもともと「神」との交わりというような生活があったわけではないのですから、それをヨーロッパの近代と同一に論じることはできないわけですが、しかし、日本の近代における人間の考えかたは、だいたいはヨーロッパのヒューマニズムを学ぶところから深められてきたのですから、両者はまったく異質だというわけにもまいりません。

　ところで、二十世紀の現代は「人間性喪失」の時代だといわれます。自己疎外といいますか、人間が自己を喪失して虚無的状況に陥ってしまっているともいわれるのです。実存主義というような思想はそういうニヒリズムを背景にして生まれてきたわけですが、どうもつじつまのあわない話ではないでしょうか。人間性を発見し、人間性を自覚し、そうして人間性を探究してきた筈の人間が、そのあげくのはてに「人間性喪失」の状態に陥るなんて、これくらい合点のいかない話はないようにも思われます。

　そこでわたくしたちは、もういちど謙虚な気持ちになって、近代における人間性の探究には、どこか致命的な欠点があったのではないかと考えてもいいのです。それを近代への懐疑とよぶなら、わたくしたちはいちど徹底的に近代的ヒューマニズムの考えかたに懐疑してみてもいいのです。

近代は人間を孤立的人間として探究してきた　わたくしは近代における人間性の探究の特色は人間を孤立的人間として探究してき

ことができましょう。自我の絶対化の方向に人間性を探究してきた結果、自我と自我がきびしく対立してしまって、どこにもバルトのいわゆる Mit-mensch（ともに生きる）という生きかたができなくなってしまって、そこにまったく人間性が破壊されてしまったのではないでしょうか。自我の絶対化がいかに人の人間性を破壊するかということを、するどく見抜いたのが夏目漱石でありました。自我を絶対化すればするほど人は「孤独の人間」(homo Solitarius) になるのです。漱石の『行人』の主人公は Einsamkeit, du meine Heimat Einsamkeit!（孤独よ、汝こそわが住居なり）とつぶやくのですが、そういう彼の根底には自我の絶対化がひそんでいたことを見逃してはなりません。

「自分を生活の心棒と思はないで、綺麗に投げ出したら、もっと楽になれるよ」と私が又兄さんに云ひました。
「ぢや何を心棒にして生きて行くんだ」と兄さんが聞きました。
「神さ」と私が答へました。
「神とは何だ」と兄さんが又聞きました。

『行人』の主人公一郎にとっては、神とは絶対の同義語にすぎなかったのですが、彼は「自己」の外に絶対なるものはないと主張します。

「神は自己だ」と兄さんが云ひます。兄さんが斯う強い断案を下す調子を、知らない人が蔭で聞いてゐると、少し変だと思ふかも知れません。兄さんは変だと思はれても仕方のないやうな激した云ひ方をします。
「ぢや自分が絶対だと主張すると同じ事じゃないか」と私が非難します。兄さんは動きません。
「僕は絶対だ」と云ひます。
斯ういふ問答を重ねれば重ねる程、兄さんの調子は益々変になって来ます。調子ばかりではありません。云ふ事も次第に尋常を外れて来ます。

自我の絶対化が人の生きる道においていかに危険なものであるかということを、漱石はすでに『行人』の一郎においてはっきりと見抜いているのです。則天去私という場合の「私」とは要するにそういう自我の絶対化のことにほかならなかったのです。この一郎の孤独がやがて『こころ』の「先生」の絶望に深まっていき、そうして自殺という運命にまで到達してしまったのですが、そのとき漱石が、人間性の回復はそういう「私」を去ること以外にありえないと考えるにいたったのは、まことに自然なりゆきだったといわざるを得ません。生の孤立化はついに生を破壊します。聖書はそういう生きかたのことを罪というのです。だからこそパウロは、「罪の払う代価は死である」といったのです。そのことについて熊野義孝氏はつぎのように書いています。「われわれを孤独ならしめる毒素は、いうまでもなく罪悪である。われわれは孤独だから罪を犯すのではない。罪を犯して孤独になるのである。アダムとエバは、罪過を負って神のおもてを避け、逃げ歩いたではないか。「罪の払う代価が死である」とは、彼がその犯罪によって仲間から断たれ、自分自身の存在もまた分解してしまうことをいう。主我的とか自分本位とか

孤立的人間はついに人間性を喪失する

孤立的人間はついに孤独地獄の苦しみに落ちこんでしまいます。それが現代における人間性の喪失の悲劇なのです。人間の自己疎外ということはそのことにほかなりません。それは人間が深いつながりのなかで生きることができないことです。人間性の喪失とは文字通り人間性〈ジンカンセイ〉を失うということです。すなわち、人と人との間で生きるという本来の生きかたを失うということです。

人と人との間で生きることが、わたくしたちが人間性（ジンカンセイ）を持つということであって、それが人間存在の根本形式であります。わたくしはそのことを人の間柄存在性とよびます。カール・バルトは共同人間性（Mitmenschlichkeit）とよんでいます。バルトは教会教義学第三巻の第二分冊において、そのような人間存在の根本形式としての共同人間性ということについてくわしく述べておりまして、まことに教えられることが多いのです。わたくしは英訳版で読んでいるのですが、英訳では Fellow-humanity と訳してあります。バルトのこういう人間観を学びうるものとして、ぜひおすすめしたいのは鈴木正久氏によってなされた教会教義学第三巻第四分冊の解説『キリスト教倫理』（新教出版社）です。とくにその第二分冊『交わりにおける自由』を読まれるといいと思います。鈴木正久氏は連帯的人間性と訳していますが、鈴木氏の文章でバルトの考えの根本を紹介してみましょう。

> 人間存在の特有な自然性であるヒューマニティとは、根源的に、この連帯的人間性に他ならないのである。連帯的人間性でないところの人間性は非人間性である。それはまた神の契約相手としての人間の規定にかなっていないだけでなく、それにさからっているのである。そもそも神は「孤独の神」（Deus Solitarius）ではなく、「三一の神」（Deus triunus）、すなわち、関係における神でありたもう。この神の似姿として造られた人間も、「孤独の人間」（homo Solitarius）ではない。

わたくしたちは、連帯的人間性、すなわちわたくしのいう「間柄存在性」を失って「孤立的人間」になってしまいますと、人生の意味をもまた失ってしまうのです。このことは、「生きる意味」について考えようとするわたくしたちにとって、根本的にたいせつなことがらであります。しかも現代に生きるわたくしたちは、芥川や太宰のように孤独地獄に陥っているのかもしれないのですから、間柄存在性などということが成り立たなくなっているのです。お互い孤独地獄にありながら、それでいて連帯社会を建設するなどということが、どうして可能でありましょうか。なんとしても、わたくしたちが「孤立的人間」であることをやめて、間柄存在性としての人間性〈ジンカンセイ〉を創造しなければなりません。それが疎外の克服ということであり、虚無の克服ということの意味なのです。バルトも、人間は連帯的人間かそれとも無である、といいます。ニヒルとは孤独地獄のことなのかもしれません。

人間性（ジンカンセイ）を破壊するもの

いったい人の連帯性をなり立たなくするものは何なのでありましょうか。なぜ人は近代的な生きかたのなかで人間性（ジンカンセイ）を喪失してしまったのでしょうか。わたくしはそれは自我の絶対化だと思います。自我の絶対化、それをエゴイズムとよぶ

じのぼってくるではありませんか。自分一人でさえ断れそうな糸にそんなに沢山の人がすがりついたのではたまらないと思った犍陀多は大声でどなりました。「こら罪人ども、この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰に尋いて、のぼって来たのだ。下りろ、下りろ。」その途端に今まで何ともなかった蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下っている所から、ぷっつりと音を立てて断れ、犍陀多はあっというまに、再び地獄に落ちてしまった、というわけです。

自分だけが地獄からぬけ出そうと考えた、その犍陀多のエゴイズムが罰しられたのです。これに似た話をドストエフスキイも『カラマーゾフの兄弟』の中に書いています。芥川はたしかに、人を孤独地獄に沈めているのは、エゴイズムという恐ろしい罪のゆえだ、ということを書きたかったのでありましょう。

人はエゴイズムを去ることができるか　自我を絶対化するとき、わたくしたちの間柄存在性はむざんにも破れてしまいます。漱石がイメージしたように、わたくしたちは「去私」という生きかたを見出すのでなければ、破れてしまった人間性（ジンカンセイ）を回復することはできません。しかしいったい、人はエゴイズムを去ることができるのでしょうか。エゴイズムのともなわない愛はありえない、と芥川は判断したわけですが、わたくしたちもまた芥川とともにそう判断しないではいられないのではないでしょうか。そうだとしたら、もはや、わたくしたちには、カール・バルトのいうような連帯的人間性は成り立たないのかもしれません。人の根本的存在形式は、完全に破壊されてしまったのかもしれません。わたくしたちは、自己に対して、他者に対して、もう望みを持てないのかもしれません。わたくしが昨年の『現代人は愛しうるか』で問うたのはそのことにほかならなかったのです。

もう連帯的生活への道がまったく不可能なのだとしたら、わたくしたちは孤独の深淵に徹するほか生きかたはありますまい。孤独地獄の苦しみにさいなまれながら、あの犍陀多のようにあがき苦しむほかいたしかたがないのかもしれません。それは耐えがたい苦しみです。だから、むしろ、もう、人であることをやめようと思うのです。それが、「わたしは貝になりたい」という気持ちのことではありませんか。あるいはもう、やけのやんぱちで、「有難や、有難や」と「有難や節」でも歌って、おもしろおかしく人生を楽しむほか、生きようはないのかもしれません。

だが、ちょっと待ってください。このへんでわたくしたちは、そろそろ本心に立ちかえってみなければならないのではないでしょうか。あの放蕩息子が、さんざん放蕩に身をもちくずして、どうにもならなくなったとき、「本心に立ちかえった」ように、わたくしたちも、このへんで本心に立ちかえってみなければならないのではないでしょうか。近代的な生きかたのなかで、人はけっきょく放蕩息子の道を歩んできたのではなかったでしょうか。遠い所に来てしまったのです。そうしてついに生きる意味さえわからなくなってしまったのかもしれません。わたくしはここで、あのイエスがお示しくださった『放蕩息子』のたとえから、その現代的な意味を汲んでみたいと思います。

（次回のテーマは『放蕩息子の運命』）

いわれる性状、つまり自己中心的ということが道徳的に支持しがたいのは当然であるが、それはただ人間どうしのつきあいを妨げるからわるいというだけではないのである。生命を破壊するからわるいのである。ほんとうに生命を尊重するものは、人間を孤独から救わないではやまないであろう」(キリスト教倫理学入門)

芥川龍之介の『蜘蛛の糸』について　芥川龍之介がまだ二四歳の青年であったとき、友人の恒藤恭氏にあてて一通の手紙を書いているのですが、それは『孤独地獄』を書いた前年のことでした。

イゴイズムをはなれた愛があるかどうか。イゴイズムのある愛には、人と人との間の障壁をわたる事は出来ない。人の上に落ちてくる生存苦の寂莫を癒す事は出来ない。イゴイズムのない愛がないとすれば、人の一生ほど苦しいものはない。周囲は醜い。自己も醜い。そしてそれを目のあたりに見て生きるのは苦しい。しかも人はそのままに生きる事を強ひられる。一切を神の仕業とすれば、神の仕業は悪むべき嘲弄だ。

僕はイゴイズムをはなれた愛の存在を疑ふ。(僕自身にも)。僕は時にやりきれないと思ふ事がある。何故、こんなにしてまでも生存をつづける必要があるのだろうと思ふ事がある。そして最後に神に対する復讐は自己の生存を失ふ事だと思ふ事がある。僕はどうすればいいのだかわからない。君はおちついてゐるかもしれない。そして僕の云ふ事を浅薄な誇張だと思ふかも知れない。(さう思はれても仕方がないが) しかし僕にはこのまま回避せずにすすむべく強ひるものがある。そのものは僕に周囲と自己とのすべての醜さを見よと命ずる。僕は勿論亡びる事を恐れる。しかも僕は亡びると云ふ予感をもちながらも此のものの声に耳をかたむけずにはゐられない。

この手紙は芥川龍之介において孤独地獄の苦しみが何を意味したかをはっきりと示しています。それはエゴイズムの苦しみだったのです。芥川が大正七年の四月に発表した『蜘蛛の糸』はその地獄の苦しみをイメージしたものです。

或る日のこと、お釈迦さまが極楽の蓮池のふちを独りでぶらぶら歩いていますと、その蓮の葉の間から地獄の様子が見えました。その地獄の底に犍陀多(カンダタ)という男が、外の罪人たちと苦しんでいます。お釈迦さまはふと、犍陀多が、人を殺したり家に火をつけたり、悪事ばかりした人間だったけれども、いちどだけいいことをしたことがあったのを想い出しました。ある時一匹の蜘蛛を踏みつぶそうとした犍陀多は、「いや、いや、これも小さいながら命のあるものに違ひない。その命を無暗にとると云ふ事は、いくら何でも可哀さうだ」といって蜘蛛を助けてやったことがあったのです。そこでお釈迦さまは犍陀多を地獄から救い出してやろうと考えました。

犍陀多がふと気がついてみると、銀色の蜘蛛の糸が、一すじ細く光りながら自分の上に垂れてきました。この糸にすがりついてどこまでものぼって行くと地獄からぬけ出せるのに違いない、と思って蜘蛛の糸を一生懸命につかみながら上へ上へとたぐりはじめました。地獄の血の池ももう遠くにしか見えないところまで蜘蛛の糸をたぐってきたとき、犍陀多がふと下をみると、蜘蛛の糸の下の方に数限りもない罪人が、まるで蟻の行列のように上へ上へと一心によ

日曜日だったからだ。調剤室の受付けの小さな窓はしまっていて、白布が垂れていた。日曜日だから、子供の生れるのもお休みだというわけでもないはずなのだが、その待合室は人気もなくガランとしていたのだ。私は、順子の夫が、あの運河へとび込んで以来のことを思いうかべた。だが、順子に対してだけでなく、残念なことだが、神に対しても、頓間というよりもむしろ頓狂でしかあり得なかった自分の姿しか思いうかんで来なかった。

『頓狂な五十男の姿なんか、自分もあまり好きじゃないな』と私は考えた。

お前は、自分で好んでわざわざ順子の事件にまき込まれているのだ、という声も私の心のなかに聞えないではなかった。

『全くその通りだ』と私は心に呟いた。『知らない顔をしてもすむことだったのにな』

しかし私にとっては、それだけだった。私は、古ぼけて汚れのしみ込んでいるようなベンチへ腰を下した。おそらくたくさんの夫や家族が、そこで新しい産声を待ち、あるいは難産への不安におののきながら待っていたにちがいないベンチへだ。しかもそのベンチには、また多くの女たちも、恐怖やら不安やら期待やら喜びやらを抱いてやって来ては、腰を下していたにちがいなかったのだ。私はあわてて立上った。看護婦が、一人、廊下からあらわれて来たからだが、しかし彼女は私の方も見ずにひっそり待合室を横切って、別の廊下の向うに消えて行っただけだった。

『明日また金がいるな』と私は、がっかりしながら考えた。

私は、順子の手術については何の心配もしていなかった。バアの女である洋子の呼んだ医者は、ばかげたことだが、内科で産婦人科ではなかったのだ。さすがの洋子も、医者が順子を一目で見るなりこれは産婦人科じゃないかと腹立たしげにいったとき、世にも気まずそうな顔になった。自分が女であったことを思い出したにちがいなかったのだ。それでなくても、人間の何かについて鋭い感覚をもっているらしい洋子としては、あまりにも間の抜けた失敗だったからだ。それでもその内科の医者は、ホルモンのそれらしい注射を打って、この病院を紹介してくれたのである。しかし私の方は、おかげで、その医者へと病院へと、医者へ払わなければならない費用は、二重になってしまったのである。

私は、順子のそのなかに消えて行った部屋のドアの前へ行った。そのドアを入れば、またなかで部屋が二つにわかれているらしく、部屋の右側に「分娩室」という名札がかかっていたが、左側には「手術室」という名札もかかっていたからである。そのとき、ドアがあいて、手押車が引き出されて来た。だが、その上にのっていたのは、順子の顔ではなく、五十近い女のそれだった。だが、その女は、看護婦に一言か二言何かいっていた。手術を受けたのでないことはたしかだった。しかし私は、何かいたましい気がしてその女を眺めた。もちろん私は、決して五十近い女が子供を生んではいけないといっているのではない。また、そのような法律もない。しかし五十近い身体の彼女が、もし子供を生んだのだとすれば、それは大変だったろうという気がしたのだ。すると、その車を運び出すのを手つだっていた看護婦の一人が、思いついたというような調子で私へ声をかけたのだ。

「あのう、笠城順子さんの附添いの方ですね」

私は、緊張しながら答えた。

夜警番の日記(7)

椎名麟三



7　赤ん坊の合唱

神がいつも私を笑っていて下さる、というのが、私のこのごろのいつわることのできない実感である。それはあるときは嘲笑であり、憫笑であり、皮肉をこめた笑いであるかも知れないが、それがどのような笑いであれ、神から笑われているかぎりは大丈夫だという気がするのである。この私にとって、ただ一つの願いがあるとすれば神に快よく笑ってもらうことなのだ。いわば私は、神を笑わすためだけの存在のようなのである。全く私は、あの笠城順子と知り合って以来、神に対してはそのような自分しかあり得ないことに気付かずにはいられなかったのだ。それはある意味で、いままでの私にとっては重大な変化だった。私は、国電の線路わきの、古ぼけたしかしそれでも二階建洋館づくりの産婦人科病院へ順子を運び込み、その搔爬手術を待合室で待っている間、私の心に繰り返されていたものは、次のような祈りだったのである。

『神さま、どうかこの私たちをお笑い下さい』

たしかに神の笑いは私だけではなく、順子をふくめての私たちに対してでなければならなかった。全く私は、少くとも私にとって、神に対してはもはやこのただ一つの祈りしかないことを、泣き笑いにも似た悲哀をもって実感していたのだった。そしてその悲哀が、泣き笑いに似ているということのなかに、あるなぐさめを感じていたということも事実である。でなければ私は、その悲哀に耐えられなかったにちがいないからだ。

私は、所在を失った人間のように、待合室の椅子に腰を下したり、うろうろ歩きまわったりした。その私をさまたげる誰もいなかった。

「その通りですよ」

「男なら女に対する目的というのは、いつもきまってるじゃないの。お役に立ちたいというような体裁のいいことをいっていても」

「わたしは、わたしは、つまりクリスチャンなんです」と私は彼女へ抗弁した。

突然、洋子は明らかな軽蔑を見せた。

「あんたは順子さんを救おうというの？　ほんとに順子さんを救おうとしてるというの？」

私は、玄関へ行って、スリッパを一足さげてもって来た。彼女が、何もはかないで、ストッキングのままじかに板敷の床に立っているのに気がついたからだった。

「すみません」と彼女は口早やにいった、「裏の通用門と書いてある方から入って来たのよ。あそこにはスリッパはないのね」

彼女は、ベンチへ腰を下した。

「人、一人すくうということは大変なことなのよ」と彼女は、いままでとは打ってかわったやさしげな声を出した、「あんたはそんなこと、できるとでも思ってるの？」

「いや、とても！」と私はあわてて首を振った、「わたしは、そんなえらい男じゃないんです」

「えらくなかったって、そうしなければ自分が生きられないときがあるわ。わたしの、別れた男がそうだったのよ。別に悪い男じゃなかったんだけど、競輪にこってね。工場の方は首になるし、わたしの姉からだけでなく、友だちやちょっとした知合さえだまして金を借り廻っているし、わたし、どれほどその男に苦労したかも知れないわ。その男の中学時代の先生が、丁度近くにいたので、その先生に説教してもらったことさえあるのよ。しかもその先生、クリスチャンだったのよ。たしかにその先生、相当きついことまでいって下さったわ。それでもだめだったのよ。そのときは、自分はわるい男だと素直にあやまるんだけど、先生が帰ってしまって気が付くと、その男の姿、もう家のなかには見えないの。裏からそっと抜け出して競輪へ行っているのよ。私は、彼がまじめだったとき、生活をきりつめてやっと買った家まで売って、彼の方々の借金のかたをつけなければならなかったわ。それでも彼は、やはりだめなのよ。どんなに泣いて頼んでもだめなのよ。おれは自分がどんなわるい人間かよく知ってるんだ、おれは自分なんか死んだ方がみんなのためになると思ってるんだ、だから死ぬつもりなんだとまでいうんでしょ。それでいて、わたしの留守に金目のものはすっかりもち出してるのよ。家を売ってからのわたし、一体何をしていたと思う？　錦糸町の駅前に立っていたのよ。だからさすがのわたしも、あの男をすくい自分をすくうためには、あの男を殺すよりほかに方法はないと思いつめたわ。だから眠りぐすりまで用意して待っていたのよ。でも、その男、今度は待っているというのにいくら待っても帰って来ないのよ。栃木の方で窃盗で警察にパクられていたのよ。警察からその知らせがあったとき、自分でその眠りぐすりを飲んだわ。死ぬためにではなく新しく生きるためによ。三日ぐらい眠っていたらしかったわ。でも、おかげで、あの男なんか何でもなくなって、自分の住所をくらますために、去年、いまのアパートへ越して来たのよ」

それから彼女は断言した。

「人間が、人間をすくうということは、結局のところできないことなのよ。わたしには、そのこと骨身にしみたわ」

ますか？」
「ええ」
「入院していただかなければなりませんが、その用意はできていますか？」
私は、思わずたずねた。
「そんなに重いんですか？」
「ひどい出血でしたからね。くわしいことは係りのお医者さんに聞いて下さい」と看護婦は答えた。
私は、身を引いた。五十近い女をのせた手押車は、その私の前を通って廊下の向うに消えて行った。私は、待合室へ引返した。私は、待たなければならなかったからだ。だが、そこにはどこから入って来たのか、思いがけなく洋子が立っていた。これから店へ出かけるのか見ちがえるほど美しく盛装していた。しかも安香水のにおいさえぷんぷんさせているのだ。瞬間私は、病院の消毒薬のにおいがその甘いにおいに入りまじっているのを改めて感じた。彼女はいった。
「どうなの、順子さんは？」
「まだ、手術室から出て来ないんです」と私は答えた。
洋子は、腕時計を見た。小さな金色の金属の光が、その手首のあたりに光った。必要もないことだが、私は高価だろうな、と思った。
私は、眼を落した。私は、自分の過して来た生活のせいか、黄金の色に本能的な畏怖をもっていた。まるで黄金というものが、私に対して近寄りがたい権威でももっているかのようにだ。するとパチンという金属の音がした。むろんそれは洋子のハンドバックの止金の音だった。洋子は、何かを私に差し出しながらいった。
「わたし、三十分ほど待ってみるけど、もし順子さんに会えなければ、これ、順子さんにわたしておいて」
それは四つにたたんだ千円札だった。だがそれはしわだらけなのだ。といったって彼女に何の関係もないことだ。すると突然彼女はいった。
「あんたは、順子さんと一緒になるつもりなの？」
私は急いで首を振った。
「いいえ、ただ、順子さんの旦那さんがなくなったことに責任があると思って、それで……」
「それで、何なの？」
「困っていらっしゃるなら、少しでもお役に立ちたいと思っているんです」
「順子さんは、手癖がよくないようね」
それは私にとって思いがけない事実だった。順子の夫がそうであったとしても、彼女もそうであるとは思っても見なかったことであるからだ。彼女は、ふいにだまった私をあわれむように見た。
「そんなことはいいわ。口紅一つのことだから。まちがうということもあるからね。でも、順子さんのお役に立ちたいって、お役に立ってどうしようというの？」
「どうしようって、別に目的はありません」
「でも、あんただって男でしょう？」
私は、必要もないのにとまどった。それから自信のない声になって答えた。
「そりゃ、ごらんの通りですが」
しかし彼女は、うたがわしそうに私を眺めまわすようにしていった。
「男らしいわね」

「親じゃないわよ、あの人は死んでしまってるのよ。ただ、わたしが行けばけんかになるから、あんたに行ってもらいたいと思ってるのよ」

私は、他人との交渉事というのは苦手だった。だが、私はそれをしなければならないだろうし、またするだろうということを、ぼんやり感じていた。そしてはじめて私は、先刻から耳に入っていた赤ん坊の泣き声に、改めて気がついたのである。哺乳時間と見えて、その病室にいる産婦のところへ、どこからもって来るのか、赤ん坊が一人ずつその母親のところへつれて来られていたのだ。その部屋の十数人いる女たちは、そのほとんどがどうやら産婦らしい様子だったのである。そしてどの母親も、惜しげもなく胸をひらき、ある女は生真目な顔で、ある女は嬉しそうに赤ん坊に乳をふくませていた。夫らしい人やその赤ん坊の兄や姉らしい子供たちも来ていて、歓声をあげながら、母親のベッドをとりまいている一組も見られた。

『ひょっとしたら、流産やこの病院の雰囲気が、彼女の母性愛を目ざめさせたのかも知れない』と私は考えた。

しかし私は、そのときその私の考えがどんなあまい考えであるかに気付いていなかったのだ。それにもかかわらず、私は、彼女の心に一つの光がさし込んで来たのだという気がしていただけでなく、しかも彼女が、自分を新しく変えることのできるチャンスでもやって来たような気さえしていたのだった。その私は、赤ん坊のときならぬ合唱を、順子に対する神の勝利というような大げさな気持さえして聞きながら、一人一人の母親と赤ん坊たちを眺めるともなく眺めていたのであった。

（つづく）

やっと順子が運び出されて来たようだった。私たちは、その車へ近寄った。順子は、血気のない青い顔をしていた。洋子が、その順子へ素気のない顔でいった。

「大丈夫らしいじゃないの？」

順子は、うなずいた。

「じゃ、わたし、店へ行くからね」

そして洋子は、私に挨拶もしないで、廊下の端へ向ってスタスタ去って行った。その洋子の様子は、ある冷淡さえ感じられるほどあっさりしていた。私は、ひとりになって、二人の看護婦の押して行く車の後からとぼとぼついて行った。瞬間、どうしてか、まるで自分の死体の運ばれて行く後からついて行っているような妙な感じが横切った。もちろん順子は死体であるはずはなく、また順子が私であるはずではなかったのだ。

私は、順子の部屋とベッドをたしかめると、急いで自分のアパートへ引返した。蒲団は、一時病院のものを貸してくれたが、それは全く一時の間に合せにすぎないと看護婦がいったように、田舎でしか見受けられないような盲縞の文字通りのせんべい蒲団だったのである。私は、自分の部屋のなかで彼女のための蒲団を荷造りしながら、一体神は、自分をどうしようとしているのだろうと考えた。しかしいうまでもなく、私のしていることは、神に責任があるわけではなく、私自身に責任があるのだ。蒲団の荷造りがすむと、私は表へ出て、タオルだとか金だらいだとか吸い呑みだとか、アルミの急須だとか、私の思いつくかぎりのこまごましたものを集めるために買い歩かなければならなかったのである。

私は、力仕事には馴れている。病院の表でとめたタクシイから荷物を下すと、看護婦にたのんで玄関の大きな方のドアをあけてもらい、蒲団の包みを肩にかつぎ、こまごました日用品の包みを左手にさげて、長い廊下を病室まで運んで行った。病室にいた看護婦が、順子の蒲団のとりかえを手つだってくれた。だが、もちろん順子は、私へ礼などいおうとはしなかった。そのかわりに彼女は、私へいったのだった。

「斎藤さん、子供がどうしてるか、見て来てほしいの？」

「子供って、旦那さんの御両親が引取って行かれた子供さんですか？」

「そのほかに私にどんな子供があるの？」

それは全く理の当然だった。私は、仕方なくいった。

「今日は、日曜だけど、わたしはやはり会社へ行かなければならないんで、明日なら行って来ますよ」

彼女は、青い顔に不服な色をうかべた。それでも彼女はいった。

「仕方がないわ、明日でも。ただわたし、子供を引取りたいの」

「え？」と私は思わず頓狂な声を出した。

「どうしてそんな変な声を出すの？」

「いや、子供さんを引取るのは、もちろん退院してからでしょう？」

「あたりまえじゃないの」

「そんなら話はわかったんです」

「何をびくびくしてるの？　あんたなんかに、子供を押しつけないわ」

「でも、引取るって御両親が……」

読者の声

★ご投稿を歓迎します。
★薄謝を呈上します。
★住所、氏名、職業、年令をご明記ください。

生きて働く教会形成へ

YMCAの『開拓者』休刊のあと、『ニューエイジ』のアメリカニズム的ないし個人閉鎖的なところを脱皮して、『月刊キリスト』が、社会的・政治的責任にも目ざめた、生きて働く教会形成への一つの貢献のための発展を祈ります。

ところで、谷口氏の『ヨハネ伝講義』についてのO氏のように、このことを「唯物論」とかきめつけることにほとほと失望します。O氏の「唯神論」とか、「唯心論」とかいうのは、「神秘主義」のことではないでしょうか。もとより谷口氏を尊敬することは、O氏やニューソートメンバーの自由だが、遠好近攻云々というのも、問題の中心をはずした言いがかりのようである。谷口氏の本も、宗教研究の資料としての価値はある。しかし、わたしはそれを信仰できぬ。また新興宗教が、新興なるゆえ、安っぽいとは言わない。ただその反動性だけはいただけない。

（北多摩郡・小平町・高木健二）

五月号、読者の声の、尼崎市の大塚兄の「国家主義は悪いか」を拝読させていただきました。文中に、谷口氏の『ヨハネ伝講義』の広告について述べられていましたがその中で、赤岩栄氏について、はなはだ失礼な発言をしているのはほんとうに残念です。共産主義はわたしも賛成しかねます。しかし、赤岩氏はなにも教界内に共産主義を持ち込むような著書もあまり見うけられません。それから広告のことですが、キリスト教はどこまでも生長の家などと、混同してもらいたくないものです。

（長野県・下伊那郡・玉井悦雄）

「国家主義は悪いか」と問われる大塚さんのご意見に対し、わたしは違った見解をします。ばくぜんと国家主義だけでは、あなたの考えている真意の国家主義がわかりかねますが、国家の上につける字句が、（民主・自由）であればよいのですが、（帝国または軍国・神国）に変わるとたいへんですね？国家の名のもとに、自由のそくばく、意志の統一などは、もうごめんです。広告の問題について、赤岩牧師をひきあいに出すのはどうかと思う。共産主義のことはよく知らないので論じたくありませんが、唯物論の宗教はアヘンなりという党と宗教家である問題は、個人が内面的に解決していると思う。わたしたちは、キリスト教牧師として接すべきだと思います。谷口氏個人は尊敬すべき人と思いますが、生長の家はキリスト教ではない。キリスト教では唯一の神を信じるか、生長の家は仏教・神道・キリスト教と、あらゆる宗教の多仏神を信仰される点にご注意ありたい（生長の家信者全体を一つにしてみるとき）。イエスはパリサイ人や律法学者を喜ばず、イエスを信じその心を行なった罪人・病人・心の貧しい人たちを、よろこばれたではありませんか。

聖書が万民のものであることは異存ありませんが、キリスト教の信仰に導く者、または入信者が受ける聖書講義は、だれでもよいとはわたしには考えられません。見る人によれば、旧約聖書をエロ物と同一にしか思わない人もいますから。読者と映画の好きなわたしにとって『月刊キリスト』は毎月の発行が待ちどおしい。読めば血となり肉となる感じがいたします。

（福岡県・嘉穂郡・宮川富雄・鉱員・35才）

寛大な気持ちと良識を

貴誌四月号の読者の声で、「無神経な広告」という一女子大生の一文に、編集部は不注意であったと重ね重ねあやまっておられますが、谷口氏の『ヨハネ伝』の広告をのせたことが、なぜ悪いのでしょうか。編集部はなぜあやまらねばならぬのでしょうか。これをおたずねします。

現在キリスト信者で、生長の家誌を読んでおられる人はたくさんあります。わたしもそのひとりです。また生長の家誌や講演などによって、キリストを知り、キリスト教に導かれた人も、わたしは多く知っています。わたしはいま、生長の家を弁護するのではありませんが、生長の家は宗教ではありません。したがって、谷口氏は教祖ではないのです。ただそのように思っている人がいるだけです。ところでわたしの申し述べたいことは、キリストを絶対神とする毅然たる心は尊ぶべきですが、あの広告をのせたことが神を冒瀆したように思っているあの女子大生や、それを肯定してあやまっておられる編集部のカタクナな心は厳に戒めるべきだと思います。キリスト教は親しみにくいとか、接近しにくいと言われるのは、このような偏狭な心がキリスト者に共通しているからだと思います。伝道のためにも、寛大な気持ちと良識をお願いいたします。

（兵庫県・氷上郡・足立辰之助・無職・56才）

本を読みましょう

―人間　その運命と愛をめぐって―



忙しい仕事のあいまに、ちょっと腰をおろして飲む一ぱいの冷たい飲みものは、わたしどもを生きかえらせます。

ところが、こうしたときにもふと気にかかり、それを考えれば考えるほど、不安になっていく問題があるのではないでしょうか。

いったいわたしはなんのために生きているのか。生きるために食っているのか、それとも食うために働いているのか。どうしてこんなに憎しみの心が強いのか。なぜこんなに愛さねばならぬのか。こんな具合に、際限もなく割切れぬ問題がわたしどもを襲ってくることが多いのではないでしょうか。人間として生まれ、人間として生きているというわたしどもにとって、もっとも基本的な問題も、ちょっと考えはじめると、不安と混乱によって報いられるといった悲しさをもっているのです。

こんなとき、松木治三郎先生の『人間　その運命と愛をめぐって』（日本基督教団出版部・二〇〇円）を手にとってくださるようにおすすめします。この本の中には、人間の問題がいつもギリギリのところで考えられながら、なお、そこで勇気をだして生きていくことのできる世界が、聖書のことばとの関係で示されています。講演をもとにしたものであるために、少々固い感じもしないではありませんが先生の豊富な学識と、あたたかい熱情を身近な息のように感じさせます。

ギリギリのところといえば、なんといってもあの悲惨な第二次世界戦争中に世界各国の人々が、世界の各地で身をもって体験した、いまわしい思い出がよみがえってきます。

ゲースの『不安の夜』（みすず書房・二八〇円）は、ナチスの従軍牧師として働く主人公が、脱走兵の銃殺刑に立会う前夜を中心にして展開される人間のギリギリの状況そこにはまた、死以外にはなんの期待もできないレニングラードの最前線に送りこまれる将校と、彼と一夜の別れを惜しむために、危険をおかしてきたその恋人との出会いが描かれ、戦争というもので人間が作りだす宿命が、克明に描かれています。この本にはいま一つ「焔のいけにえ」という短篇があります。これはナチスに迫害されるユダヤ人に、肉を売る店の女主人の目によって捕えられた戦争の悲劇の一断面を描いています。ゲースはドイツ人の側から、人間に対する自己批判のレンズをしぼって人間の愚かさと不幸を写しだしていますが、そこには割切れぬ人間の問題が残されています。これは香りのたかい文学作品です。その理由は、このような人間の愚かさと不幸の中にも、なお人間には前むきに生きられるなにものかがあることを、無言のうちに示しているからではないかと思います。

人間！　この未知なもの。そして不幸と愚かさの中でうめかねばならぬ人間の問題は、旧約聖書のヨブの物語の中で追求されていることをだれでも知っていますが、内村鑑三の『ヨブ記』（教文館・三八〇円）は、現代もなお迫力をもっています。聖書注解全集の第四巻として出版されたこの本は、現代的な装いの中にも、あの独得な内村の実験された信仰からほとばしる力を全ページにたたえています。

さらにモルガンの『愛の神について』（ヨルダン社・二二〇円）をヨブ記とともにおすすめしたいと思います。これは、ルカによる福音書一五章の講解説教といえますがこの本に一貫して流れているものは、失われた者の神による回復の福音です。

生きる勇気。どんな状況の中にあっても前むきに生きられる。人間の愚かさや不幸に打ちひしがれながらも、信仰の実験によって人間を克服する。こうしたものの根源をどこに確認できるでしょうか。おすすめした四冊の本は、これらの問題解決のかぎをもっているのです。

（**小野一郎**・日本基督教団久ケ原教会牧師）

信徒みんなで読み合う聖書研究誌

聖書の世界

本誌は、四月号から新編集方針により再出発しましたが、幸い好評を得て、毎号引きつづき増刷しておりますが、四月号、五月号とも売切れのため、ご迷惑をおかけしましたことをお詫び申しあげます。

七月号は、教会の夏期修養会のテキストとして左のように特集しました。

▲七月号主要目次▼

特集──「山上の説教」

はじめに　関田寛雄
1神の国に入る者の特質　川村輝典
2神の賜物と課題　雨宮栄一
3神の国の新しい義　鈴木和男
4神の国のよき業　高木幹太
5神の国の生活　山内一郎
6神の国の兄弟　大沼田実
7神の国の求道　岩井健作
8神の国とにせ預言者　船本弘毅
9二人の建築者のたとえ　川島貞雄

今月の聖書研究「教会の使命」

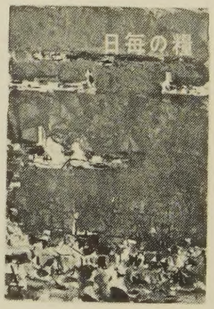
1みそばにおき宣教に遣わし　遠藤彰
2教会の使命　棟方文雄
3伝道への情熱　佐古純一郎
4**座談会**「現代産業社会でのキリスト者の使命」

連載　ヨブ記研究　浅野順一
使徒行伝　竹森満佐一

本号に限り七二頁　**特価七〇円**　〒六円

日毎の糧

36年7・8・9月分
A6判96頁価四〇円
送料一部につき二〇円



使徒行法　茅ケ崎教会牧師　木下芳次
詩篇　神戸栄光教会牧師　宮崎明治
ガラテヤ人への手紙　沼津教会牧師　三和磐夫
日曜日　鎌倉教会牧師　高田彰

大塚野百合著

真実を追って

女教師のノート

女性と生活シリーズ
新書判一七二頁
価一六〇円〒三〇円

どうすれば、人間の悲劇を悲劇としてその全重量を感じとり、苦しみのなかにある人に対して隣人として責任をおうことができるのか。この問題は、一番中心的であるにもかかわらず、わたしは、自分の破れがこの点において最も大きいのを感じている。──その痛みの中で、教育、日本人であること、女であること、クリスチャンであることを考えつづけた。そうして、わたしは、キリストの恵みと兄弟愛にささえられて、はじめてこの破れがいやされ、「新しい存在」「人間に対して責任をとる人間」とされることを、様々の人間や、書物を通して教えられた。この喜ばしい発見に至るまでのわたしの歩み──途中で幾度もくずれそうになったためいきにみちた歩み──をふりかえってみたい。
（本書より）

なるべくお近くの書店にご注文下さい。

日本基督教団出版部

東京都中央区銀座4の2・振替東京145610

編集後記

◇梅雨の訪れは、あの男性的な真夏の太陽を連想させ、また猛烈な白熱の炎が地上をおおった、あの原爆の日を、さらに、敗戦の日をおもいおこさせます。次号、八月号では、下記のように、「戦争とキリスト者」を特集いたします。戦争を体験した人々の話に耳を傾け、戦争を罪と感ずるキリスト者の声をひろめたいものです。

◇さて、今月は、「日本の伝道をどうする」という題で座談会を開きました。東京クリスチャン・クルセードから感じさせられた、さまざまの問題を、四人の先生に話していただきました。日本の教会は自主独立になるべきか、クルセードは、日本の伝道にプラスかマイナスかなど、熱心な討論がかわされました。皮肉と警句との応酬のなかに、日本の伝道の困難が、身にしみて感じられてきます。この日本伝道の問題について皆さまのご意見をうかがいたいと思います。

◇新しい試みとして、「現代のカルテ（診断書）」という欄をもうけました。キリスト者の立場から、現代の諸問題を批判、検討するページです。今月は、宇宙狂時代への批判、アイヒマン裁判の今日的意味について考えていただきました。ひきつづき、下記のような問題を扱っていくつもりです。

◇「信仰に生きる」には、「光の家」という「孤児の家庭」を独力で、維持しておられる、タクシーの運転手山口さんに、登場していただきました。信仰による使命を敢然と果たしてきた山口さんに頭がさがります。

◇山室民子先生のお話をうけたまわっていて、クリスチャンとよばれていながらも、「ほんとうの信仰」をもつことがいかにむずかしいかを痛感しました。「日々に新たに」されていってこそ、信仰に生かされるのだと思います。

◇「読者の声」には、期せずして、大塚さんにたいする賛否両論が集中しました。この問題には、キリストのみが唯一の真理だということ、新興宗教（およびそれらしきもの）をどう考えるか、天皇国家主義をどう考えるか、共産主義をどう考えるかなど多くの問題をふくんでいます。誌上でも、ゆっくり考えてゆきたいものです。

8月号・予告

特集・戦争

なぜ戦争に反対するか 中川晶輝

わたしの戦争体験 田口重良 鷲山林蔵

キリスト者平和の会 森岡巖

キリスト者の戦争責任

＜信仰に生きる8＞
その死を越えゆくもの
——原爆に散った一七才の少女——

＜伝道説教＞（霊南坂教会牧師） 飯清

＜巻頭随想＞
坂田祐、高橋虔、迫千代子

＜現代のカルテ＞
セブンティーン・国字国語問題
レジャーブーム・モダンジャズ

＜社会を見る目＞
防衛二法案をめぐって 松尾喜代司

＜キリスト教のいろは＞
ここに神がいる 島村亀鶴

＜聖句をめぐる座談会＞
生くるも死ぬるも主のために（ロマ一四・七、八）

アレッポの乞食娘（最終回） 太田博也

＜恋愛論＞
男と女 高木幹太

＜生きる意味について＞
放蕩息子の運命 佐古純一郎

＜連載小説＞
夜警番の日記8 椎名麟三

月刊キリスト

昭和三六年六月二五日 印刷
昭和三六年七月一日 発行

編集人 高戸要
発行人 浜崎次郎
発行所 日本基督教協議会文書事業部
東京都中央区銀座四ノ二
振替 口座・東京一一六七九
電話(561)六一三一・八四四六
発売所 教文館
東京都中央区銀座四ノ二
毎日新聞社販売店
東京都中央区有楽町一ノ二
印刷所 株式会社 恒陽社印刷所

直接、ご購読になりたいかたは、発行所まで、お申しこみください。
一部 六〇円（〒六円）
半年 三六〇円（〒共）
一年 七〇〇円（〒共）
三弗（海外）

KIRISUTO The Christian Home Journal.
Vol. 13. No. 7 July 1961
Japan Commission on Christian Literature Tokyo

昭和二十四年二月三日第三種郵便物認可
昭和三十六年七月一日発行（毎月一回一日発行）

月刊 キリスト

七月号

定価 六〇円

NCC文書事業部

IBM 2879

製版・印刷・恒陽社